



特 114
603



始



特114
603

木村定良編纂

春夏之卷



和歌
草野集

大正
2. 7. 4
丙寅

東京

修文館發行

少延やあとのまをまう歌を歌よむをさりのほをうりよまをわをいまを
けん萬葉集よを本草鳥虫なあくねのをはらよめるよーこそゆれせ
う毎とも數おろくみゆれねとそい皆其例をことよわをとまうれ出
よめるあち何らを後あたよまーるいあまを給へるやあとかれとゆあをれと
古今六帖のあとゆれとものかくひあえ有けるやあはみうとの大の
河乃みゆきのをり貫之ぬいあおれせあとおまををれ例をまの何あり
興あるあとを書出て歌よませさ給給へるやあとかれとゆあをれと
いれあいらあしなとやうゆあ人を何れとあれあふふ女文字ーを何ま
れあふをりれゆあせまあてをを何れ今れやうゆあふふー男文字例
あらんまあふまあとよを何れ今れらくーれをああゆあふふ奈良
代御代の末つりこ大御國あまれとやうくまふれゆて行ゆらうら哥

の道なきかりあねとあそねしかりかみなりしをわしなむさむしむさ
 2 唐哥をのみあのみつゝるととあねをしよりほむあちから歌のあら
 としあひのねてあゝのうゝあもあとりたよ男文字をならぬまゑて哥
 よむことゝちあり来しあるへし三月三日紀師匠曲水宴と今この世も
 をほつりねるをみるお花浮春水燈懸水際明月入花灘暗とゆゑる三題
 を何るしは貫之ぬしをとしはあゝ時の歌よまらこれのねあつたり
 てよみしことのあるあねらや男文字しそわけるあとりまのしめあ
 らあし大江千里ぬし白氏文集は句ぞあちぬれ出さよまねあるあ
 とをこまあひの哥のまゝとしあむりぬしをほせされとをほかみあち
 うゝりみるおねたもほあつけさのむ出せるをね回ることかたをま
 うあゝるちあねらなることほと有しなりけり又そのあとのまをむひ

のとしそつゝねちくはほめなる書りのほとめりより有るむ教隆の
 木工助の和歌類林了をさるまぢの書あやとちあしをめらるは今はの
 うそらてゝゝをほとしりたの朝野群載も残さゝるのまあねちゝしか
 あそありりぬし今の世あほつとねる書しゝゝあるとあとかたねをむ
 ちて哥ぞつひてゝるむ後葉集よ先たてるをほ又あるへしとゆ物をと
 れまあゝ有て此のた近世世もゆあそふ明題類題のぬくひ数あち
 のてたしちをありあゝよ吾友檀園の何るし哥のさとりありゝゝみ
 のからゆまゆつることほ葉まゝぬちなる年頃おをめ所ありてち
 りく此百年ちめりあなぬあることよあひ物とをて其道よ名たゝる人
 この家の集とをゝ物回く又累塵集萍水集采藻編あとの私撰は板あさ
 らゝねるを数あねとをほ人ゝ乃哥とことかたゆてわあちむろく何つ

めあまねくはひてあるちあまをりかき物てうひまあひのふりたど
もあまてやとてつひありく十二巻の書けりえらひさふめらねある也
なりまへてことめきの數八千あちかく歌の數よろうああちか何まね
を名つきて草野和哥集とて此集の名を草野とてをなつけられなる
よしりやんことなき雲乃うへ人のをとはふりてのせはふり物より
とちれ人よけのたりけりけりめふねとあるへて文化とひあて一の
十とせあまが三とせれ春よりあまひあてして文政を何らふありふら
年の神無月と何りあめをくられなるああえ有らる

せつ浪のや清水濱直一るは

歌よらあへんのうまなり今はありあうちあねとらあへて今を
ためあまのあまらぬらあへんの歌とてあまらんののさあまへ
とらあまのあまらぬ今この歌とてあまらんのせはひあまらあへんあまら
るあまのあまらぬあへんのうたもこと葉をふらああまらあまあらな
るあへてあまのあまらぬあまらぬあまらぬあまらぬあまらぬあまらぬ
りけれ近世の歌とてあまらぬあまらぬあまらぬあまらぬあまらぬあまらぬ
たあまらぬあまらぬあまらぬあまらぬあまらぬあまらぬあまらぬあまらぬ
らとまのあまらぬあまらぬあまらぬあまらぬあまらぬあまらぬあまらぬ
のて耳あたらんとあまらぬあまらぬあまらぬあまらぬあまらぬあまらぬ
の世はまらぬあまらぬあまらぬあまらぬあまらぬあまらぬあまらぬあまらぬ

をくうのせみれ世ひちとわりあら玉の年月よりはをわたりよるの
 の事それとまふあふのめならひあれ此歌を毎あふわくあふらふ
 きならはてあはたしうにふむくまをりのあふにならひあを葉りの
 まり世の人よをまこえやまこふと出ゆんまあむ有けるま今世
 此歌乃ひあふのうらふあふうく多ゆあふよとまみの粟の中津世よま
 りるをやのみふれ来りてあまこ年ぬぬれ世の中ありとある人
 つまゆのふめあふとまあはにふま〜歌よむ人もあまひのらうを
 つまされりてそのをとう〜あひぬるなりさるを今四方の海の波あ
 りうにをさまりうをねふるあまゆあらとれぬれとそを見あきらむら
 ぬさ〜ゆの〜糸のより〜よ出ま〜この道の二たひひあふ〜よ立
 うぬりぬるうけあ〜ゆの〜こ物うら我大御國のさうとひとをら

かへうえあふよ木村定良ちの世ひあ〜ぬありよ其名ま〜とら
 人〜の哥とゆのあつめさう〜む人のふよりあ〜と十何あや二巻と
 ち〜ぬるをりぬれや〜人かけ〜とあそとらむかれおの〜とちの
 うひまあひれまゆらゆ〜まあとぬらか〜まあらねと芳宜園大人の
 あま〜とひを〜人物せられ〜をこはう〜巻見む人のふめあ〜とてのさ
 はわのひ驚かほら春の大野の

椿園のある〜を終りま〜也

文政二年二月

凡例

此集は近來古學の歌よみ長流契冲春滿をはしめとして縣居の門人のかきりをあつめ又さらぬもふるところまなふたくひのひとくの歌ともを類題して四季六卷戀雜六卷すへて拾二卷となして學初の作例みむためににらひおけるをこたひ書商人のこふまゝに先四季六卷を板にゑらせつる也戀雜をもつきくに板にゑらさすへし

一 歌ともは人々の家集歌合などの板にゑれるよりゑらひいたし又寫本にてあるをもとめ出おのれ折に見およひきゝおよひて集中にいらぬをものせたり

一 作者のついでは見いつるまゝにのせたれば時代にかゝはらすついで

てなせり

一たとひ作例おほき題なりとも一題に歌かす四五首にすぎすさるは歌かすをすくなくして題かすをおほくせんとしてなり

一かなたいてよめるも眞字の題になほして其歌の心かなへるをはのせつ

一その題とてよまぬ歌なりとも外の題にかよへるをは外の題の歌になし又畫賛などの歌にても題詠にかなへるをはのせたれば本集とは題たかへるもあるへしみん人うたかふとなかれ

一おなし人の歌のつゞけるをは同としるして一題にても同し人のうた二首のせたるあり

一公事の題をはその季の所へいれたりさるは初學の爲其公事の季をしらむにたよりよければなり

一名所の題にて四季によめる歌をは季ことにするに入たり

木村定良識

春上 題數八百四十五首

夏 題數七百八十三首

秋下 題數七百八十六首

總計四季部 題數四千四十五首

戀上 題數七百五十九首

戀下 題數七百七十一首

雜中 題數五百二十二首

春上 題數六百三十一首

秋下 題數六百十四首

冬 題數八百二十五首

戀中 題數三百四十九首

戀上 題數七百三十六首

雜下 題數八百八十一首

總計戀雜部

題數二千九百五十五
歌數四千百十八首

類題草野集

春之部上目次

年內立春	元日	元日雪	元日雪	元日雪	元日立春	山家元日	元日宴	若水
門松	春風來海上	春從東來	貴賤迎春	幽栖春來	春風春水一時來	春風春水一時來	春生人意中	雪中春來
春松久綠	松迎春新	春到管絃中	梅柳度江春	雪消山色靜	每山有春色	立春	除日立春	
三日立春	立春天	立春雲	立春日	立春雪	雨中立春	立春風	立春霞	
立春曉	立春朝	立春江	立春湖	立春池	立春谷	立春風	立春川	
立春水	立春水	立春山	立春關	都立春	禁中立春	海邊立春	浦立春	
故鄉立春	閑中立春	名所立春	所々立春	春立視	初春	初春雪	初春霞	
初春山	初春海	都初春	野初春	初春河	初春水	初春梅	初春鶯	
初春衣	初春眺望	初春見鶴	初春祝道	早春	早春朝	早春雨	早春雲	
早春雪	早春風	早春霞	早春月	早春浦	早春湖	早春海	早春河	
早春山	早春關	早春市	早春水	早春鶯	早春梅	早春柳	早春松	
都早春	關路早春	海邊早春	故鄉早春	野早春	早春餘寒	早春興	早春松	
藥兒	春水	春冰	冰始解	冰解	春到冰解	東風吹春冰	腹赤御贊	
冰消田地	池水盡開	雪消冰亦釋	雪消春水來	瀧音知春	瀧響滴春風	和風報春	春風解冰	
風光日々新	白馬節會	子日	元日子日	正朔子日	子日松	子日小松	雪中子日	
霞中子日	山子日	野子日	山君子日	子日友	子日興	子日饗	子日祝言	

子日述懷	賭弓	霞	曉霞	霞知春	春曙霞	朝霞	夕霞
山霞	深山霞	遠山霞	朝山霞	暮山霞	嶺霞	嶺上霞	霞滿山
霞藏山	霞隔山	霞添山色	霞藏遠山	霞添春光	霞隔山樹	嶺霞	霞
野霞	野外霞	野經霞	原霞	原上霞	岡霞	行路霞	杜霞
關路霞	關中霞	名所霞	霞隔古寺	浦霞	故鄉霞	水鄉霞	經霞
遠村霞	海霞	海邊霞	海上夕霞	江上霞	霞隔浦	海路霞	霞隔水鄉
島霞	孤島霞	霞隔行舟	江霞	橋上霞	春江霞	湖霞	海上霞
湖上朝霞	河霞	河上霞	渡霞	橋上霞	檜上霞	湖霞	湖上霞
霞隔遠村	霞隔遠樹	霞春衣	邊峯帶曉霞	橋上霞	待霞	松上霞	霞隔松
春來鶯遲	初鶯	早鶯	早鶯猶若	初開霞	開霞	南枝暖待霞	鶯知春
鶯告春	山鶯告鶯	古巢鶯	谷鶯	出谷	雪中鶯	每朝聞鶯	鶯知春
雨後鶯	霞中鶯	霞裏聞鶯	曉鶯	曙鶯	寐覺鶯	雪中鶯聲	雨中鶯
山中鶯	故鄉鶯	山家鶯	野鶯	野亭鶯	岡鶯	朝鶯	夕鶯
鷓鴣中聞鶯	海邊鶯	鳴鶯	社頭鶯	關路鶯	河邊鶯	里鶯	旅中鶯
閑居鶯	窻鶯	樹間鶯	梅間鶯	名所鶯	森鶯	水邊鶯	閑中鶯
竹林鶯	竹間鶯	竹裡鶯	柳上鶯	花間鶯	松上鶯	老鶯	暮春鶯
鶯春友	鶯子春友	春情在鶯	春鶯呼客	鶯語漸々稀	鶯聲誘引來花下鶯有歡聲	鶯	鶯有慶音
若菜	若菜知時	若菜多	摘若菜	朝若菜	夕若菜	贈人若菜	雨中若菜
雪中若菜	雪中求若菜	野若菜	原若菜	磯若菜	岡若菜	澤若菜	園若菜

水邊若菜	田若菜	名所若菜	故鄉若菜	多春摘若菜	武藏野若菜	寄若菜祝	春雪欲消
寄若菜述懷	春雪	春山雪	野春雪	木春雪	春雪似花	雪消松綠	嶺殘雪
殘雪	野殘雪	野外殘雪	草殘雪	木殘雪	松殘雪	山殘雪	嶺殘雪
巖殘雪	島殘雪	樹陰殘雪	殘雪似花	山家殘雪	故鄉殘雪	殘雪半藏梅	嶺殘雪
二月雪落衣	餘寒	餘寒冰	餘寒霜	餘寒雪	餘寒月	餘寒風	山餘寒
二月餘寒	梅	梅度年花	栽梅	栽梅待鶯	若木梅	梅始開	露暖梅開
梅開露暖	春風先發苑中梅	梅	梅盛	梅花春久	雪中梅	梅似雪	雨中梅
霞中梅	梅風	梅薰風	依風知梅	梅薰夜風	梅花風靜	梅香	梅花久芳
梅花遠薰	蕙梅薰風	梅香何方	梅花夜薰	梅薰夜風	梅近衣香	梅香移袖	梅香留袖
梅花染衣	梅薰枕	梅香入閨	梅花夜芳	夜思梅	夜梅	閑夜梅	曉梅
曙梅	朝梅	夕梅	月前梅	月照梅花	社頭梅花	古宮梅	古宅梅花
閑庭梅	故鄉梅	遠村梅	山居梅	山家梅花	山家皆梅花	籬外梅	梅香當籬
梅香薰簾	簾端梅	庭梅	窓梅	窓前梅	垣梅	籬梅	園梅
里梅	隣梅	旅宿梅	野宿梅	行路梅	梅花處々	野梅	松間梅
名所梅	梅及移水	水邊梅	水畔梅花	海邊梅	河邊梅	見梅	每春玩梅
梅交松芳	插頭梅	折梅	折梅贈人	詠梅花	梅花契万春	愛梅	梅有連速
梅花將散	二月梅	落梅	庭落梅	閑庭落梅	落梅風	水邊落梅	梅浮水
梅花落琴上	落梅浮水	江梅	江梅盛	雨中江梅	梅江白	江梅白梅香不異	梅浮水
風搖白梅朵	寄梅懷舊	柳梅	柳辨春色	柳絲綠新	柳花	朝柳	夕柳

柳經年	古柳	雨中柳	柳似烟	柳に雪のかられるを	柳	霞間柳
柳先花綠	柳絲洗波	柳風	青柳風靜	柳亂風	柳絲隨風	門柳
門柳春久	柳垂糸	山家柳	故鄉柳	水鄉柳	水邊柳	河上柳
河邊柳	河邊古柳	河岸柳	池邊柳	柳臨池水	垂柳臨水	垂柳藏水
柳拂池水	柳隔水	柳系映水	岸柳	江柳	隣柳	墻柳
行路柳	遠柳	柳系	挿頭柳	旣柳	寄柳迷懷	初午稻荷詣
若草	草漸青	野若草	岡若草	春草	春草漸青	雨中春草
垣根春草	水邊春草	故鄉春草	行路春草	野經春草	磯春草	岸春草
泉溫草色春	歲	峯歲	野歲	岡歲	磯春草	岸春草
折蕨贈人	歲	歲	夕春月	山歲	山歲	谷歲
春月幽	霞中月	霞隔月	山春月	春曉月	曉更春月	春月曉靜
河春月	湖春月	關春月	旅春月	海邊春月	浦春月	磯春月
名所春月	春月言志	月入花灘暗	春江花月夜	故鄉春月	旅海春月	水鄉春月

春之部下目次

草庵春雨	寄春雨迷懷	歸雁	春雁	花前歸雁	春雁向北	歸雁知春	雁別花
歸雁忙	歸雁消雲	雨中歸雁	霞中歸雁	月前歸雁	雲間歸雁	暮天歸雁	夜歸雁
深更歸雁	暗夜歸雁	曙歸雁	曉天歸雁	歸雁似字	歸雁幽	遠歸雁	歸雁遙
山歸雁	峰歸雁	海歸雁	海邊歸雁	渡歸雁	渡歸雁	浦歸雁	水鄉歸雁
都歸雁	旅泊歸雁	故鄉歸雁	關路歸雁	春雁離々	歸雁契秋	春駒	春駒嘶
牧春駒	野春駒	澤邊春駒	遙見春駒	雉	岡雉	野雉	野外雉
野經雉	燒野雉	雲雀	夕雲雀	路雲雀	田雲雀	野雲雀	澤雲雀
雲雀落	呼子鳥	夕呼子鳥	山呼子鳥	谷中呼子鳥	森呼子鳥	林呼子鳥	山櫻
深山呼子鳥	梨花	庭梨花	若かへて	花櫻同	若木櫻	老木櫻	山櫻
深山櫻	水邊櫻	八重櫻	糸櫻	待花	漸待花	雨中待花	望山待花
待山花	閑居待花	閑中待花	老待花	未發花	待花遲開	山花遲	山寒花遲
山家花遲	栽花	老後栽花	尋花	尋山花	遠尋山花	霞中尋花	尋花超山
山路尋花	逐年尋花	遠尋花	雨中尋花	尋見花	遠尋見花	尋芳樹底行	初花
花未開	花初開	山初花	山花始開	山花半綻	山花未遍	始見山花	初花
暖雨新開一經花	花	花盛	花漸盛	山花盛	名所花盛	所々花盛	風靜花盛
盛花	見花	靜見花	心靜見花	月前見花	花下見月	每朝見花	終日見花
見花日暮	每春見花	年々見花	隔波見花	隔水見花	旅中見花	遙見山花	行路見花
山路見花	馬上見花	舟中見花	名所見花	獨見花	見花延齡	見花戀友	對花
羈中思花	夜思花	晝夜思花	每春思花	詠花	詠山花	雨中詠花	詠花經年

春下目次

老翫花	愛花	每年愛花	憐花	花未飽	心未飽花	馴花	對花
交花	折花	旅人さくらををる	寄雪花	月前折花	月前花	月照花	花間月
花下明月	山月映花	花林曉月	寄雪花	花雪	花似雪	花開風香	風靜花芳
霞中花	霞中花蕭	花透霞	夕花	花雲	花似雲	雲花無定樹	花映日
雨中花	雨後花	花帶露	夕花	花雲	花似雲	雲花無定樹	花映日
朝花	花下暮日	花下送日	花下忘歸	野花	山花	滿山花	曙花
花添山景色	遠山花	深山花	望山花	嶺上望花	遠望山花	暮山花	
分花入山路	山花不散風	嶺花	望山花	嶺上望花	遠望山花	暮山花	
柚花	樵路花	溪花	古溪花	橋下花	岡花	杜花	杜間花
行路花	關路花	關路花	不破關花	名所花	志賀花園花	志賀山越	池上花
水上花	水邊花	岸花	花影寫水	湖上花	海邊花	磯花	磯邊花
河上花	河邊花	瀧邊花	鹽屋花	浦花	閑居花	隣花	里花
庭花	田家花	山家花	都花	禁中花	禁庭花	古京花	故郷花
水郷花	古寺花	社頭花	松邊花	花交松	家花勝他花	依花忘行	依花待人
依花待客	依花待友	花時無外人	花留客	野花留人	花下蝶飛	花下逢友	花下逢友
としへて花のもとにわへり	花下交遊	花忘老	老賞花	花前與	花多春友	花のもとに弓いる所	花のもとに弓いる所
老後花	老見花	花忘老	老賞花	花慰老	花主	花宿	花宿
花枝	花梢	花忘老	老賞花	花慰老	花鏡	花浪	花浪
花衣	花面影	花形見	花與春句	花手向	花揮頭	惜花	老人惜花

惜春馬蹄遲	落花	穠見落花	惜落花	憐落花	落花多	山落花	深山落花
落花滿山	峯落花	谷落花	森落花	樹陰落花	行路落花	山路落花	關路落花
名所落花	水上落花	石のものとにこく櫻のちるを	古宮落花	故郷落花	落花浮水	河上落花	瀧落花
湖上落花	浦落花	海邊落花	古宮落花	故郷落花	庭落花	落花埋苔	落花滿庭
閑庭落花	山居落花	曉庭落花	山寺落花	古寺落花	社頭落花	朝落花	夕落花
夜思落花	月前落花	風前落花	落花隨風	雨中落花	雨後落花	落花似雪	花不殘
落花入簾	花落頭	花落樹猶香	落花蝶飛立	ちりての花をおもふ	ちりての花をおもふ	落花似雪	花不殘
花前迷懷	寄花迷懷	寄花懷舊	寄花神祇	寄花釋教	寄花無常	寄花視	寄花夢
花自有情	心在山花	春情在花	春情寄花	花下延思	花下言志	花如淚	花有喜色
遊絲	野遊	夕野遊	野遊到暮	遲日	閑中日長	春日	春日遲
春興	山家春興	はるの山ふみ	暮山春望	海上春望	江上春望	水鄉春望	春日望山
岩清水臨時	三日	曲水宴	桃花	燕合	燕來	燕來	牡丹
白牡丹	椿	董	庭董	野董	故郷董	古砌董	閑居董
摘董	菜の花を	この、菜の花を	庭董	野董	故郷董	古砌董	閑居董
水邊蛙	夕蛙	夜蛙	名所蛙	苗代	澤蛙	川蛙	田蛙
面後苗代	海棠	唐棣花	躑躅	水邊躑躅	河苗代	名所苗代	雨中苗代
巖上躑躅	夕見躑躅	樵路躑躅	山吹	山吹露	山吹露	松下躑躅	岡躑躅
山吹盛	翫山吹	折山吹	山吹	山吹露	山吹露	夕山吹	里山吹
岸山吹	島山吹	橋邊山吹	幽居山吹	籬山吹	山吹露	水庭山吹	瀧下山吹
					故郷山吹	山中山吹	名所山吹

處々山吹	雨中山吹	暮春山吹	惜山吹	山吹散	燕子花	池杜若	藤
紫藤	藤花初綻	雨中藤花	池上藤	藤花映水	水邊藤花	橋上藤花	瀧下藤花
浦藤	松上藤	松間藤	藤懸松	藤花藏松	紫藤埋松	折藤	挿頭藤
藤花年久	暮春藤花	藤花散	暮春	暮春花	暮春落花	暮春殘花	暮春雨
暮春雲	暮春風	暮春霞	暮春月	暮春鳥	暮春殘鶯	暮春郭公	暮春鐘
海邊暮春	浦暮春	湊暮春	江上暮春	山家暮春	暮春山	名所暮春	幽居暮春
旅宿暮春	惜春	寄花惜春	老人惜春	留春々不駐	惜春不駐	殘春	殘春日少
春殘二日	春光只是在明朝	三月盡鐘	はるのはてのうた	やよひの晦日	三月盡	三月盡夕	三月盡夕
三月盡夜	三月盡曉	三月盡鐘	三月盡花	閏三月盡	春風	春山風	春風夜芳
春天象	春日	春日星	春雲	春烟	春朝	閑中春朝	春夕
春夜	春夢	春山	春雲	春嶺	春柳	春野	春野やく
春行路	春關路	社頭春	春山雲	故郷春	水郷春	春閑居	春田家
春田	春川	春瀧	春海	春園	春浦	春浪	春色池
春木	春植物	松有春色	春獸	春園歌	春鳥	春聲	春色
春虫	春人	春主	春心	春車	春舟	春鐘	春色
春床	春苞	春山旅	春旅泊	春遠情	春迷懷	春懷舊	春無常
春神祭	春祝	陽春布德	春色浮水	江上春興多	萬物感陽和	春水滿四澤	家々詠春
心靜酌春酒	椿經八千春	東風暖入簾	志賀花園蝶	正月	二月	三月	水無瀬川
春以下同	櫻川	志賀浦	志賀花園	浮島	香取浦	室山	蘆屋里

夏之部目次

千葉野	壺籠浦	末松山	難波江	吹上瀨	淡路島	首夏山	首夏新樹
首夏	首夏惜春	首夏風	首夏雨	首夏水	首夏藤	首夏山	首夏新樹
首夏朝	首夏待郭公	山家首夏	田家首夏	竹亭夏來	更衣	惜更衣	更衣惜春
朝更衣	貴賤更衣	寄更衣述懷	早夏	早夏鶯	社頭早夏	孟夏旬	大神祭使
餘花	殘花	思餘花	尋餘花	尋殘花	賞餘花	山餘花	山中餘花
深山殘花	谷餘花	松陰餘花	餘花何在	餘花似春	殘花薰風	殘花誰家	殘花少
惜殘花	花落枝綠	鳥思殘花枝	遲櫻	山遲櫻	新樹	新樹風	新樹露
新樹妨月	山新樹	深山新樹	嶺上新樹	林新樹	庭新樹	雨中新樹	庭樹結葉
庭樹綠滋	綠樹連村暗	卯花	暮見卯花	夕卯花	夜卯花	卯花洗月	卯花似月
卯花如浪	卯花似雪	垣卯花	卯花誰垣	卯花傍家	卯花隔隣	卯花藏宅	山家卯花
閑居卯花	里卯花	田家卯花	溪卯花	路卯花	行路卯花	樵路卯花	卯花隱路
水細卯花	水邊卯花	卯花藏水	樹陰卯花	雨中卯花	名所卯花	卯花盛久	瀧佛
神まつるところ	いへに神まつる	賀茂祭	新竹	神まつり	葵	葵	挿葵
簾葵	每年懸葵	久待郭公	夕待郭公	夕待郭公	夜待郭公	郭公	遠尋郭公
待郭公	漸待郭公	待郭公空明	年々待郭公	每夜待郭公	雨中待郭公	郭公勝待月	對月待郭公
終夜待郭公	曉待郭公	對卯花待郭公	連夜待郭公	五月末聞郭公	待聞郭公	移居待郭公	名所待郭公
樹下待郭公	對藤花待郭公	未聞郭公	未聞郭公	近聞郭公	兩方聞郭公	人傳郭公	初郭公
始聞郭公	聞郭公	遠聞郭公	遠聞郭公	近聞郭公	兩方聞郭公	年々聞郭公	夕聞郭公

薄暮聞郭公	暮天聞郭公	夜聞郭公	閨夜聞郭公	曉聞郭公	深夜聞郭公	月前郭公	夢中聞郭公
夢後郭公	郭公驚夢	寢覺郭公	曉月聞郭公	曉郭公	曙郭公	朝郭公	夕郭公
夜郭公	郭公一覺	郭公聲跡	曉聞郭公	忍音郭公	曙郭公	郭公聲幽	郭公過
郭公早過	郭公未飽	郭公未通	郭公通	郭公聲通	郭公語少	郭公頻	郭公聲頻
郭公數聲	郭公稀	郭公留客	郭公如舊	雲間郭公	雲外郭公	雨中郭公	雨後郭公
遠郭公	近郭公	山郭公	郭公出山	山路郭公	麗郭公	樵路郭公	樹間郭公
谷郭公	森郭公	杜間郭公	岡郭公	野郭公	原郭公	獨中郭公	旅中郭公
旅宿郭公	關路郭公	海邊郭公	磯郭公	磯邊郭公	浦郭公	泊郭公	舟中聞郭公
舟中郭公	水路郭公	渡郭公	河上郭公	名所郭公	社頭郭公	寄神祇郭公	古寺郭公
古寺郭公	故鄉郭公	古宮郭公	里郭公	市郭公	山家郭公	田家郭公	閑居郭公
閑中郭公	行路郭公	郭公鳴橋	對卯花聞郭公	卯月郭公	閏四月郭公	五月郭公	五月五日郭公
郭公歸山	郭公催戀	郭公入夜琴	寄郭公祝	寄郭公述懷	寄郭公懷舊	盧橋	植橋
盧橋風	盧橋蕪風	雨中盧橋	曙橋	曉盧橋	曉更盧橋	盧橋驚夢	夕盧橋
夜盧橋	橋蕪	盧橋蕪袖	盧橋蕪枕	禁庭橋	故鄉橋	驚橋	盧橋蕪簾
庭橋	閑庭橋	依橋客來	故宅橋	水鄉橋	社頭橋	風靜盧橋芳	盧橋子低
對橋問音	寄橋祝	寄橋述懷	寄橋懷舊	棟	山家棟	早苗	採早苗
朝早苗	夕早苗	里早苗	山田早苗	山畦早苗	澤邊早苗	遠村早苗	門田早苗
河邊早苗	海邊早苗	急早苗	早苗多	雨中早苗	雨後早苗	名所早苗	寄早苗述懷
五月五日	藥玉	競馬	騎射	端午興	端午述懷	藥獵	菖蒲

菖蒲露	菖蒲蒲	曳菖蒲	尋引菖蒲	菴菖蒲	葦菖蒲	葦菖蒲	每家葦菖蒲	袖上菖蒲
雨中菖蒲	名所菖蒲	沼菖蒲	池菖蒲	水邊菖蒲	旅宿菖蒲	節後菖蒲	節後菖蒲	寄菖蒲祝
寄菖蒲述懷	紫陽花	梳子花	五月雨	初五月雨	朝五月雨	夜五月雨	夜五月雨	深夜五月雨
五月雨雲	五月雨久	連日五月雨	山中五月雨	袖五月雨	杜五月雨	野五月雨	野五月雨	山五月雨
峯五月雨	行路五月雨	旅宿五月雨	旅泊五月雨	山家五月雨	田家五月雨	閑居五月雨	閑居五月雨	閑中五月雨
菴五月雨	庭五月雨	故宅五月雨	川五月雨	江五月雨	橋五月雨	溪五月雨	溪五月雨	池五月雨
池邊五月雨	瀧五月雨	海邊五月雨	船中五月雨	浦五月雨	湖五月雨	水邊五月雨	水邊五月雨	名所五月雨
五月雨離晴	苦雨初入梅	梅雨留客	梅雨久	梅雨送日	五月雨晴	五月雨述懷	五月雨述懷	螢
夜螢	深夜螢	閑居螢	窓前螢	腐草化為螢	螢火似漁火	螢火如玉	螢火如玉	螢火似燈
螢似露	草螢似露	螢火似星	叢間螢	螢照叢端	草螢	雨中螢	雨中螢	水邊螢
水上螢	澤邊螢	田螢	池螢	江螢	河邊螢	流邊螢	流邊螢	瀧下螢
橋螢	海邊螢	浦螢	行路螢火	故鄉螢	名所螢	螢火透簾	螢火透簾	小扇撲螢
螢火秋近	螢火亂飛秋已近	晚夏螢	行路螢火	水雞	夕水雞	夜水雞	夜水雞	水雞終夜
水雞驚夢	月前水雞	曉水雞	閑居水雞	山家水雞	水雞何方	泊水雞	泊水雞	夏月
對泉待月	夏夜曉月	短夜月	夏月易明	夏夜翫月	夏夜惜月	夏夜月明	夏夜月明	水夏月
夏月浮水	水上夏月	水路夏月	水邊夏月	河夏月	河上夏月	河邊夏月	河邊夏月	池夏月
海邊夏月	磯夏月	浦夏月	江上夏月	山家夏月	竹亭夏月	夏月透竹	夏月透竹	名所夏月
樹陰夏月	樹間夏月	雨後夏月	夏月涼	依月夏涼	砂月涼	夏月似霜	夏月似霜	夏月似冰
夏月如秋	月色似秋	豐麥	唐撫子	名所豐麥	庭豐麥	籬撫子	籬撫子	觀麥副牆

燕子色々	豐勝榮花	朝折翠麥	每朝見燕子	愛翠麥	老見翠麥	夕燕子	夜燕子
雨後翠麥	豐翠露	燕子厭露	豐翠帶露	夏草	朝夏草	庭夏草	野夏草
杜夏草	徑夏草	行路夏草	水邊夏草	山家夏草	名所夏草	風前夏草	夏草露
夏草滋	夏草深	苜夏草	夏草花	兼待秋花	草花先秋	野草秋近	夏草露
萱草	鶉川	夕鶉川	深夜鶉川	源更鶉川	連夜鶉川	每夜鶉川	深夜鶉川
鶉舟多	鶉舟簫	夜川簫	瀨鶉舟	雨後夜川	名所鶉川	蚊遣火	曉蚊遣火
朝蚊遣火	夕蚊遣火	夜蚊遣火	遠村蚊遣火	里蚊遣火	浦蚊遣火	照射	曉照射
照射欲明	山中照射	深山照射	野照射	峯照射	樹陰照射	處々照射	名所照射
蟬	山蟬	杜蟬	樹陰蟬	樹上蟬	灑上蟬	瀧邊蟬	雨後聞蟬
夕蟬	名所蟬	蟬聲夏深	曉夏蟬聲	蟬聲秋近	寄蟬述懷	蝸	蓮
蓮露	風前蓮露	蓮含露	荷露似玉	池蓮	池上蓮	夕顏	簷夕顏
踈屋夕顏	墻夕顏	瓜	熟瓜	扇	閨中扇	圓扇風	扇不離手
扇風秋近	冰室	冰室涼	名所冰室	冰室山	夕立	夕立雲	夕立風
夕立涼	夕立易過	遠夕立	遠山夕立	遠村夕立	山夕立	川夕立	野夕立
原夕立	里夕立	市夕立	行路夕立	海邊夕立	浦夕立	橋夕立	夕立晴
泉	泉邊納涼	對泉避暑	對泉忘夏	夏日對泉	閑對泉石	鑿家泉	泉聲入夜寒
燭影寫水	澗路甚清涼	但在泉聲洗我心	松陰納涼	松下泉	松下泉	松下泉	納涼
避暑	納涼風	樹陰納涼	松陰納涼	松下納涼	松下泉	松風晚涼	竹間納涼
竹風夜涼	杜納涼涼	山家納涼	山陰納涼	浦納涼	海邊納涼	船納涼	河邊納涼

水邊納涼	納涼至晚	夕納涼	夜納涼	野納涼	麓納涼	橋邊納涼	行路納涼
家々納涼	高殿にすみする	夕納涼	うま入すみする	野納涼	名所納涼	納涼忘夏	樹陰夏風
樹陰秋	水風如秋	水風晚涼	水風夜涼	水風夜深	水邊風涼	近水漸涼生	瀨夏被
風來水樹間	水邊自秋涼	晚夏	晚夏涼	晚夏風	夏被	河邊夏被	瀨夏被
海邊夏被	湖邊夏被	夜夏被	名所夏被	杜夏被	家々夏被	六月被	六月被
日暮六月被	名越被	荒和被	祓麻	秋隔一夜	野亭秋近	來客夏被	六月晦日
夏のはて	夏天象	夏日	夏雲	夏雨	夏風	松風五月寒	夏露
夏朝	夏夕	夏浦夕	夏山夕	夏夜	夏夜興	夏夜短	夏曉
夏山	夏杜	夏里	夏故郷	夏夜	夏旅	夏旅宿	夏井
夏市	夏田	夏山里	山家夏	關路夏	夏河	夏流	夏舟
夏門	夏車	夏車	夏鳥	夏出	夏歌	夏牛	夏舟
夏野	夏衣	行路夏衣	夏糸	夏出	夏歌	夏牛	夏舟
夏遠望	夏人事	夏思	夏夢	夏述懷	夏懷舊	夏釋教	夏眺望
夏神樂	夏祝	卯月	五月	六月	閏六月	布計里下日	夏神祇
勝間田池	布留	高月	名取川	筑波	敷浪里	大葉山	鴨小川
大井川	布引瀧	會津山	那須野	筑波	敷浪里	大葉山	鴨小川
立秋	六月立秋	鷺立秋	立秋雨	立秋風	立秋露	立秋朝	立秋夕
立秋雲	立秋萩	立秋衣	里立秋	野立秋	關路立秋	社頭立秋	山家立秋

田家立秋	水邊立秋	立秋述懷	早涼	早涼知秋	風告秋	曉知早涼	曉風告秋
海邊秋來	秋來水邊	閑居秋來	閑庭秋來	幽栖秋來	荒屋秋來	野亭秋來	山家秋來
西風飄一葉	秋淺向泉	初秋	初秋天	初秋朝	初秋夕	初秋夜	初秋露
初秋朝露	初秋雲	初秋霧	初秋月	初秋風	初秋松風	初秋虫	初秋待雁
初秋淚	初秋衣	初秋扇	初秋木	初秋篔	山初秋	岡初秋	杜初秋
初秋落葉	名所初秋	都初秋	浦初秋	湖初秋	山里初秋	田家初秋	田初秋
新秋風	新秋露	新秋曉露	新秋雨涼	早秋	早秋風	早秋露	早秋雲
早秋夕	早秋秋	早秋朝山	名所早秋	原早秋	里早秋	河邊早秋	田家早秋
山家早秋	瀨早秋	浦早秋	江早秋	七夕	兼待七夕	久待七夕	待七夕
七夕待夕	七夕迎夜	七夕夜	七夕借夜	牛女年夕渡	乞巧奠	夜深憶牛女	曉思牛女
二星通達	織女契久	二星契久	星河秋久	七夕契久	二星期秋	烏鵲成橋	星河落簷
七夕喜晴	七夕月	月前二星	銀河月如船	七夕雲	織女雲為衣	七夕風	七夕露
七夕霧	織女霧為帳	七夕雨	七夕烟	羈中七夕	旅宿七夕	野外七夕	海邊七夕
山家七夕	家々七夕	七夕催興	七夕言志	代牛女言志	星夕燈火	星夕燈花	星夕曝書
七夕蒼絳	七夕野	七夕山	七夕濱	七夕川	七夕波	七夕瀨	七夕水
七夕舟	七夕橋	七夕田	七夕植物	七夕草	七夕薄	七夕瀨	七夕島
七夕鶴	七夕雁	七夕獸	七夕鳥	七夕虫	七夕蛛	七夕糸	七夕錦
七夕衣	七夕蠶	七夕抽	七夕枕	七夕扇	七夕琴	七夕櫛	七夕戀
七夕淚	七夕曉	七夕別	七夕後朝	七月八日	閏月七夕	七夕祝	七夕戀

七草七首	萩	尾花	葛	獅子	藤袴	女郎花	朝顏
七木七首	桐	桐	桃	梨	合歡	楸	楓
地儀七首	山	岡	野	里	河	橋	濱
文房具七首	硯	筆	硯	墨	紙	文	書
殘墨	孟蘭盆	相撲	萩音高	萩風	萩風寒	萩知秋	萩告秋
初秋萩	驚萩	夕萩	夜萩	深夜萩	月前萩	風前萩	秋風吹萩
秋風以萩葉	夕萩	夕萩	幽栖萩風	簷萩	萩驚夢	萩聲驚夢	萩聲近枕
庭萩	閑庭萩	山家萩	幽栖萩風	簷萩	江萩	葛	岡
葛風	月下葛	萩	萩漸盛	萩盛	萩盛開	萩露	萩上露
萩露深	萩露重	萩花露重	萩露滋	萩露如玉	月前萩	風前萩	雨中萩
朝萩	夕萩	夜萩	對萩	思萩	遠思秋萩	愛萩	折萩贈人
萩花移衣	萩萩	萩盛待鹿	野萩	野亭夕萩	行路萩	羈中萩	名所萩
高圓野萩	禁中萩	秋情寄萩	庭萩	閑庭萩	山家萩	田家萩	崎萩
萩花藏水	萩移水	朝女郎花	惜萩	萩散風	萩花落	女郎花	露隔女郎花
風前女郎花	女郎花離風	朝女郎花	月前女郎花	女郎花露	女郎花露	女郎花帶露	野女郎花
故鄉女郎花	澤女郎花	水邊女郎花	折女郎花	愛女郎花	女郎花留人	名所女郎花	薄尾花同
薄未出穗	萩薄	薄出穗	初尾花	風前薄	薄露風	薄露	夕薄
月前薄	尾花似淚	薄似袖	名所尾花	野薄	庭薄	閑庭薄	閑居薄
岡薄	田薄	行路薄	故鄉薄	秋興在尾花	荊萱	風前荊萱	荊萱離風

菊苣帶露	寄苣苣迷徑	關	野	關	繼	關	閑	閑	名所
權花	權未開	垣權花	朝顏珍	露	夕見草花	露底權花	曉更權花	曉更權花	かまつひの花
きらかうの花	鳴頭草	草花	朝見草花	草花露	草花露	月前草花	月照草花	月照草花	草花映月
風前草花	草花露風	草花露	草花帶露	庭移野花	草花露	草花露	草花交色	草花交色	水邊草花
行路草花	故郷草花	野花	野花留客	庭移野花	野花妨路	野花妨路	野花交色	野花交色	秋花
秋花逐夜開	庭露秋花	秋花催興	裁秋花	老見秋花	惜秋花	惜秋花	寄秋花迷徑	寄秋花迷徑	露
朝露	秋露重	秋露滋	朝露	朝露如玉	夕露	夕露	夜露	夜露	露如玉
月映露	月前草露	野露映月	草秋映月	月照草露	露深	露深	露	露	悲露
憐露	風前露	庭前露	閑庭露	苔路露	秋田露	秋田露	田上露	田上露	故郷露
野露	野露如玉	野草帶露	草上露	草露如玉	社露	社露	笹露	笹露	淺茅露
袖露	秋風寒	露世人淚	寄露祝	寄露懷愁	秋風	秋風	開秋風	開秋風	秋風涼
秋風漸寒	秋風寒	夕秋風	夜秋風	野秋風	野分	野分	山秋風	山秋風	名所秋風
海邊秋風	浦秋風	江秋風	關路秋風	竹路秋風	故郷秋風	故郷秋風	山家秋風	山家秋風	田家秋風
遠近秋風	岡秋風	松上秋風	庭前秋風	秋風入羅	秋風從興	秋風從興	秋風歎老	秋風歎老	出
聞虫	虫聲	夕虫	夜虫	寒夜虫	霜夜虫	霜夜虫	深夜開虫	深夜開虫	終夜開虫
曉虫	寢覺開虫	月前虫	待月開虫聲	雨虫	雨虫	雨虫	風前虫聲	風前虫聲	虫聲隨風
露底虫	虫聲非一	虫聲滋	虫聲幽	相思夕上松臺立	雨夜虫	雨夜虫	風前虫聲	風前虫聲	虫聲隨風
野外虫	寒野虫	濃端虫	濃端虫	草虫	淺茅虫	淺茅虫	原虫	原虫	野虫
川邊虫	山中虫	故郷虫	幽居虫	庭虫	庭虫	庭虫	庭夜虫	庭夜虫	曉庭虫

荒庭虫	籬下虫	庵	徑	圃	床	壁	枕
虫聲近枕	旅宿虫	蟲聲入琴	寺靜開虫	虫聲枯	暮秋虫	松	鈴
萎	促	蟋蟀	寄虫迷徑	鹿	聞鹿	朝鹿	夕鹿
曉鹿	夜聞鹿	深夜聞鹿	寢覺聞鹿	每夜聞鹿	終夜聞鹿	月前鹿	月下鹿
風前鹿	鹿聲比風	鹿聲比風	雨中鹿	鹿隱霧	霧中鹿	原鹿	野鹿
野夜鹿	野鹿交秋	鹿鳴秋秋	鹿交草花	田鹿	田上鹿	田家聞鹿	關路鹿
樹間鹿	名所鹿	旅宿鹿	旅宿聞鹿	海邊鹿	旅泊鹿	夜泊鹿	關路鹿
遠聞鹿	鹿聲遠	鹿聲近	鹿聲向方	鹿聲繁	山鹿	夜聲山鹿	山中夕鹿
山家鹿	山家聞鹿	深山鹿	深山聞鹿	遠山鹿	外山鹿	峰鹿	鹿聲何方
鹿聲夜友	鹿聲驚夢	寄鹿迷徑	晚秋鹿	暮秋鹿	秋望	秋望	水邊秋望
海邊秋望	河邊秋望	山邊秋望	野秋望	山路秋行	秋興	秋興	野秋興
仙家秋興	山中秋興	河邊秋興	田家秋興	山家秋興	秋夕	秋夕	秋夕月
秋夕風	秋夕雲	秋夕露	山中秋夕	深山秋夕	野外秋夕	海邊秋夕	海邊秋夕
河邊秋夕	水邊秋夕	水鄉秋夕	田家秋夕	山家秋夕	河邊秋夕	水邊秋夕	水邊秋夕
田家秋夕	山家秋夕	閑庭秋夕	閑庭秋夕	旅宿秋夕	古寺秋夕	水邊秋夕	水邊秋夕
秋夕傷心	秋夕催淚	老後秋夕	田家秋夕	旅宿秋夕	古寺秋夕	水邊秋夕	水邊秋夕
秋田庭	秋夕催淚	老後秋夕	田家秋夕	旅宿秋夕	古寺秋夕	水邊秋夕	水邊秋夕
運々鐘漏初長夜	秋夕催淚	老後秋夕	田家秋夕	旅宿秋夕	古寺秋夕	水邊秋夕	水邊秋夕
秋夢	秋雨	秋時雨	小庭行	秋夜露	秋夜深	秋夜深	秋夜深

秋之部 下 目次

月	待見月	見月	秋明月	秋月添光	待月	對山待月	高山待月	海上待月	對水待月
每夜見月	終夜見月	閑見月	獨見月	年々見月	每秋見月	深夜見月	深夜見月	夜々見月	連夜見月
觀明月	池上觀月	馴月	夜々馴月	每秋馴月	思月	觀月	觀月	終夜觀月	嶺上觀月
初昇月	漸昇月	停午月	漸傾月	傾月	夕月夜	未出月	欲入月	惜入月	月初昇
十五日	八月十五日	十五日	落梧新月	夕月夜	三五月正圓	弓弦月	月盛	入後暮月	十五夜
居待月	臥待月	廿日月	在明月	下弦月	十三夜	雲間微月	見月	見月	九月十三夜
十三夜觀月	狂雲妬佳月	月前雲	雲收月明	夜雲收月行遲	雲間月	雨後月	月前時雨	霧間月	見月
霧中月	曉月厭雲	月前霧	風前月	月前風	月前松風	野分後月	月前露	曉月	霧間月
舟中曉月	河上曉月	深山曉月	田家曉月	遠山曉月	嶺上曉月	海邊曉月	海上曉月	海上曉月	海路曉月
秋夜月	晴夜月	陰夜月	深夜月	深夜月	社頭曉月	曉月入窓	明月如畫	明月如畫	秋月如畫
秋山月	閑山見月	外山月	深山秋月	山端月	夕月	夕月	暮天月	暮天月	山月
嶺月照松	谷月	澗底月	杜月	林間月	松間月	松間月	月照松	月照松	月出山
松月幽	松月夜深	月前苔	月前木	月前杉	月前梓	月前梓	竹間月	竹間月	野月
野外月	秋野月	野月明	野月露深	野徑月	野亭月	野亭月	野宿見月	野宿見月	行路月

秋目次下

徑月	水上月	月照河水	池月明	海邊月	湊邊月	水路月	禁中月	山館見月	閑園月	憲中月	名所月	櫻河月	月不撰處	月夜興	會友見月	月前管絃	惜月	暮秋殘月
原月	水邊月	月光似冰	池月久明	月滯海上	浦上月	湖上月	禁庭月	田月	幽栖秋月	井月	名所秋月	須磨浦月	月似雪	月前待人	月下交友	月前鐘	獨惜月	月前眺望
岡月	水鄉秋月	河月似冰	澤月	沖月	浦秋月	湖邊月	社頭月	田家月	荒屋月	故鄉月	嵐山月	旅宿月	月似鏡	對月待友	月下交遊	月前遠鐘	殘月	月前遠望
樵夫歸月	月照流水	灑月	江月	濱月	波間月	湖上月明	古寺月	田家見月	草庵月	里月	野宮月	旅宿見月	秋月勝春花	月前思友	月秋友	月前燈	古寺殘月	月前情
杣月	月照水	灑邊月	江上月	磯月	舟中月	海人見月	蕭寺月	雞聲茅店月	庭上月	遠鄉月	住吉月	月前旅	緇素見月	客依月來	客依月來	月前篋	路明殘月在	寄月情
橋月	河月	月照灑	江山夜月明	島月	月夜舟	海人詠月	山家月	閑居月	月影滿屋	關月	更科月	月前旅行	貴賤憐月	客伴秋來	客伴秋來	月前幽情	月向白波沈	月前幽情
月照古橋	河上月	月照灑水	海月	崎月	海路月	花洛月	山家秋月	閑居見月	秋月入簾	關路月	末松山月	旅泊月	月前鶴	月夜訪友	月夜訪友	月前遠情	殘月掛岑	月前遠情
水中月	河邊月	池月	海上月	海路見月	都月	山居月	閑中月	山月入簾	關屋月	難波浦月	月下旅泊	浦鶴鳴月	月夜逢友	月夜聞琴	月夜聞琴	暮秋月	見月傷老	月前思

月添秋思	對月言志	月催淚	月如舊	月思古	月前懷舊	月契千秋	月前祝
月前祝言	寄月祝言	寄月祝國	月前祝君	月前神祇	月前述懷	雁	待雁
雁未來	初雁	雁知秋	風前雁來	風前初雁	霧中初雁	聞初雁	曉初雁
滿暮初雁	夜初雁	嶺初雁	每秋雁來	旅雁	旅雁連雲	雲外雁	雲間雁
風前聞雁	雨中雁	霧中雁	霧間雁	聞雁	深夜聞雁	夜々聞雁	月前雁來
月前雁	曉聞雁	江月聞雁	旅中聞雁	旅宿聞雁	旅行聞雁	馬上聞雁	海上雁飛
海上雁	海邊雁	湖上雁	水鄉雁	田上雁	田家雁	暮秋聞雁	霧
初霧	朝霧	河朝霧	海邊朝霧	山朝霧	曉霧	夕霧	海邊夕霧
瀟邊霧	橋邊霧	川霧	秋霧隔河	水路霧	湖上曉霧	霧底筏	海邊霧
古渡秋霧	野霧	山霧	遠山霧	霧籠山	山路霧	行路霧	關霧
關路霧深	關中霧	堤霧	遠村霧	名所霧	山家霧	秋宮霧	霧
擣衣	擣衣	遠間擣衣	秋來擣衣	遠擣衣	夕擣衣	夜擣衣	深夜擣衣
終夜擣衣	連夜擣衣	月夜聞砧	月前聞擣衣	月下擣衣	風前擣衣	擣衣響風	擣衣窓
擣衣聲幽	擣衣寒	曉擣衣	寤覺擣衣	不眠聞擣衣	擣衣驚眠	擣衣驚夢	荒屋擣衣
圍中擣衣	擣衣	近擣衣	里擣衣	水鄉擣衣	海邊擣衣	島擣衣	浦擣衣
故鄉擣衣	山家擣衣	田家擣衣	待人擣衣	南北路衣	名所擣衣	暮秋擣衣	鳴
曉鳴	田鳴	田家鳴	月前鳴	鶉	野鶉	野外鶉	野亭鶉
里鶉	故鄉鶉	江鶉	霧中鶉	九日	重陽宴	九日菊	菊
栽菊	菊花待開	菊有新花	菊花盛	菊久盛	白菊	紫菊	菊花色々

折菊	擣頭菊	菊露	菊帶露	簾菊露芳	菊上露	露菊花	愛菊
朝菊	夕菊	對菊待月	月前菊	月夜見菊	月照菊花	菊雜月	菊薰枕
籬菊	庭菊	閑庭菊	閑居菊	菊閑中友	菊交薄	山路菊	名所菊
菊映水	岸頭白菊	澤畔菊	谷菊	河邊菊	水邊菊	旅宿翫菊	菊花秋久
菊契多秋	菊契千秋	伴菊延齡	老人對菊	寄菊祝	寄菊述懷	檀紅葉	柞紅葉
檀紅葉	楓紅葉	櫻紅葉	萬	萬懸松	紅葉	尋紅葉	初紅葉
黃葉	紅葉淺	林葉漸紅	林葉漸變	遠村漸紅	紅葉未遍	紅葉淺深	遠山紅葉
紅葉深	紅葉遍	紅葉色々	紅葉處々	紅葉盛	山紅葉	山路紅葉	深山紅葉
山皆紅葉	紅葉滿山	嶺上紅葉	岡紅葉	林紅葉	森紅葉	杜間紅葉	夕紅葉
夕見紅葉	暮山紅葉	夜紅葉	月前紅葉	月照紅葉	雨染紅葉	雨中紅葉	雨後紅葉
霧中紅葉	紅葉隱霧	紅葉待霜	紅葉霜	霜園紅葉多	閑居紅葉	山家紅葉	田家紅葉
翫紅葉	折紅葉	見紅葉忘歸	紅葉前待人	紅葉留客	紅葉勝花	遠村紅葉	野紅葉
故鄉紅葉	隣家紅葉	松間紅葉	紅葉交松	紅葉透松	名所紅葉	行路紅葉	樵路紅葉
社頭紅葉	社邊紅葉	古寺紅葉	紅葉幣	旅中紅葉	河邊紅葉	隔川見紅葉	水邊紅葉
岸紅葉	水鄉紅葉	池邊紅葉	江紅葉	海邊紅葉	浦紅葉	瀧紅葉	瀧邊紅葉
紅葉映水	紅葉浮水	水上紅葉	紅葉染水	紅葉滿浪	紅葉滿網代	紅葉欲散	思紅葉
紅葉易散	惜紅葉	風前紅葉	紅葉厭風	紅葉隨風	暮秋紅葉	紅葉送秋	惜秋
老惜秋	秋徐暮	秋欲暮	秋不留	暮秋	暮秋風	暮秋雨	暮秋雪
暮秋霜	暮秋朝	暮秋夕	暮秋曉	野暮秋	暮秋森	山家暮秋	田家暮秋

暮秋庭	暮秋鳥	河上暮秋	福旅暮秋	暮秋旅	山寺秋暮	鐘聲送秋	故郷秋閑
借暮秋	暮秋懷	暮秋興	暮秋傷老	秋のはて	九月盡	惜九月盡	九月盡夕
九月盡夜	九月盡曉	九月盡風	山家九月盡	閏九月盡	秋天	秋大象	秋日
秋雲	秋嵐	秋烟	秋霜	秋寒	秋曉	秋曙	秋朝
秋地儀	秋山	秋山路	秋野	秋野遊	秋野歸	秋野草	風前秋草
野色混秋光	秋水	秋水郷	秋池	秋川	海邊秋	浦秋	秋泊
秋舟	秋里	秋山家	山家秋	山家秋深	秋田家	田家秋晚	田家秋曉
秋庭	秋故郷	社頭秋	秋神祇	秋古寺	古寺秋鐘	秋植物	秋木
秋動物	秋獸	秋鳥	秋蟲	秋香	秋色	秋聲	秋旅
秋旅行	秋羈旅	旅宿秋曉	秋雜	秋思	秋迷惘	秋手向	秋以下
秋形見	秋祝	七月	八月	九月	閏九月	嵯峨野同	秋以下
名所岡	竹田里	栗栖野	藤井原	御幣島	高野	大島峯	安濃
三香野橋	桂湯	玉河	うら古山	衣崎	曾登濱	戸絶橋	有明浦
神南備山	長田村	長尾村	假寝岡	衣浦	味鎌		
初冬	十月更衣	初冬天	初冬雲	初冬風	初冬嵐	初冬雨	初冬霜
初冬木枯	初冬曉	初冬朝	初冬眺望	野初冬	森初冬	里初冬	山中初冬
海邊初冬	山家初冬	田家初冬	閑居冬來	初冬傷老	初冬落葉	冬のはしめ山里をとふ	冬のはしめ山里をとふ
時雨	初時雨	開時雨	夕聞時雨	獨聞時雨	時雨雲	時雨告冬	曉時雨

冬之部

朝時雨	夕時雨	夜時雨	寢覺聞時雨	時雨驚夢	時雨向夜	連夜時雨	月前時雨
時雨過	時雨易過	時雨晴	時雨易晴	時雨陰晴	風前時雨	時雨交風	時雨頻
時雨遠近	時雨處々	山時雨	山中時雨	高山時雨	遠山時雨	深山時雨	時雨迴山
時雨染山	嶺時雨	麓時雨	岡時雨	山路時雨	橋路時雨	野時雨	野徑時雨
野亭時雨	名所時雨	海邊時雨	磯時雨	川時雨	渡時雨	船中時雨	樹陰時雨
松風似時雨	杜時雨	山家時雨	里時雨	閑居時雨	菴時雨	屋上時雨	園時雨
行路時雨	遠郷時雨	故郷時雨	關路時雨	田家時雨	旅中時雨	旅宿時雨	鞆中時雨
時雨混落葉	時雨似淚	時雨霑袖	寄時雨迷惘	時雨ふるよとふ人あり	道行人時雨にあへり		
時雨降る日人のもとへ	十月紅葉	殘紅葉	尋殘紅葉	紅葉殘梢	紅葉殘枝	紅葉殘枝	深山葉殘
もみちやちりかたなり	社頭殘紅葉	時雨染紅葉	時雨染紅葉	紅葉滿庭	紅葉散	紅葉不殘	林葉不殘
落葉	落葉有聲	聞落葉	夜聞落葉	曉聞落葉	落葉	落葉殘秋	落葉脆
落葉深	落葉不駐	落葉不殘	落葉不待風	落葉待風	落葉風	風前落葉	落葉隨風
落葉霜	落葉如雨	雨中落葉	落葉交雨	落葉混雨	朝落葉	夕落葉	夜落葉
曉落葉	月照落葉	月前落葉	山落葉	山中落葉	峯落葉	麗落葉	名所落葉
橋上落葉	落葉水紅	水上落葉	湖上落葉	水邊落葉	落葉浮水	落葉浮浪	池邊落葉
澗落葉	瀧上落葉	湖上落葉	湖上落葉	海上落葉	旅宿落葉	關路落葉	山路落葉
樵路落葉	行路落葉	路落葉	落葉埋路	落葉埋苔	落葉埋菊	故郷落葉	山家落葉
閑居落葉	古寺落葉	杜落葉	庭上落葉	落葉藏庭	閑庭落葉	松間落葉	松下落葉
車中落葉	遠近落葉	落葉如錦	落葉勝花	社頭落葉	寄神祇落葉	もみちやちりたるに酒のむ	

殘菊	庭殘菊	維殘菊	殘菊帶霜	殘菊映水	殘菊蕭園	霜後殘菊	雨中殘菊
雪中殘菊	月照殘菊	山家殘菊	翫殘菊	惜殘菊	寄殘菊述懷	霜	露結爲霜
朝霜	夕霜	曉霜	深夜霜	橋上霜	山路霜	樵路霜	杉路霜
野外霜	草霜	寒草霜	寒草帶霜	岡霜	原霜	田霜	篠霜
松上霜	葉上霜	庭霜	霜埋落葉	山家落霜	閑庭霜	社頭霜	霜夜聞鐘
人跡板橋霜	寄霜迷園	冰	冰初結	水結冰	源冰	冰滿	厚冰
朝冰	夜冰	月光映冰	谷冰	河上冰	濕冰	池冰	池冰作鏡
池水半冰	冰滿池上	井冰	懸繩冰	葦間冰	水路冰	江冰	江水初冰
湖冰	冰閉細流	汀冰	澤冰	淵冰	岩間冰	冰留水聲	冰留流水
山家冰	冰閉細流	冰閉山水	寒水閉藻	冰駐舟	冬田冰	田邊冰	網代冰
名所冰	訪湖冰	殘雁	曉殘雁	雪夕殘雁	田殘雁	寒草	寒草疎
寒草少	寒草綴	寒草藏水	野寒草	野徑寒草	原寒草	寒草	杜寒草
庭寒草	閑庭寒草	寒草處々	寒草風	嵐吹寒草	寄寒草述懷	寒草	野寒草
寒蘆	朝寒蘆	池寒蘆	濱寒蘆	江寒蘆	寒蘆滿江	寒蘆	水鄉寒蘆
蘆花似雪	水枯	夜木枯	山家木枯	椎柴	寒蘆滿江	山さとしハハ	水鄉寒蘆
枯野	枯野曙	枯野朝	枯野篠	枯野薄	枯野霜	前栽霜枯	寒
山寒松	寒松風	寒樹	寒樹風	寒樹交松	冬嶺秀孤松	寒松積年	冬月寒月同
冬月	冬曉月	曉寒月	霜曉月	冬寒月	冬明月	霜夜月	鳴夜月
雪開冬月	雨後冬月	風前寒月	葉落月明	月出寒山	寒山月	寒園月	由寒月

河冬月	海冬月	海邊冬月	湖上冬月	水鄉冬月	寒流帶月	冬月浮水	破林霜後月
寒流帶月澄如鏡	社頭冬月	池上冬月	森冬月	庭上寒月	閑庭冬月	故鄉冬月	山霞
名所冬月	野外霞	原上霞	篠霞	霞如玉	夜霞	聞霞	關路霞
深山霞	海邊霞	瀧邊霞	行路霞	山家霞	屋上霞	寢覺霞	寒園聞霞
千鳥	月前千鳥	殘月聞千鳥	風前千鳥	曉千鳥	曉天千鳥	曙千鳥	朝千鳥
夕千鳥	夜千鳥	寒夜千鳥	深夜千鳥	終夜聞千鳥	千鳥驚眠	寢覺聞千鳥	聞千鳥
尋千鳥	遠千鳥	千鳥登遠	近千鳥	名所千鳥	湖上千鳥	海邊千鳥	湊千鳥
浦千鳥	濱千鳥	磯千鳥	崎千鳥	島千鳥	瀉千鳥	津千鳥	川千鳥
千鳥驚波	千鳥驚舟	船中聞千鳥	海路千鳥	泊千鳥	旅泊千鳥	關路千鳥	行路千鳥
千鳥有跡	千鳥留跡	寄千鳥祝	衾	寒夜衾	寒夜重衾	水鳥	夜水鳥
寒夜水鳥	深夜水鳥	月前水鳥	夜思水鳥	朝水鳥	水鳥帶霜	水鳥拂霜	冰閉水鳥
池水鳥	葦間水鳥	水鳥遊藻	江水鳥	海水鳥	澤水鳥	河水鳥	寄水鳥述懷
河瀬にをしなく	水鳥驚筏	水鳥知主	一鳥過寒水	鳴	鴨	鶯	鶯
網代	夕網代	夜網代	名所網代	網代寒	紅葉留網代	網代雪	網代興
寒	山家寒	雪	待雪	初雪	朝初雪	業上初雪	山初雪
山家初雪	嶺初雪	松上初雪	行路初雪	橋上初雪	水路初雪	淺雪	雪未深
曉望山雪	曙雪	朝雪	雪朝	夕雪	薄暮雪	夜雪	深夜雪
深夜聞雪	夜寒知山雪	雪似月	月照雪	山月照雪	寒月映雪	風前雪	聞雪折

雪深	積雪	連日雪	雲間雪	雪似白雲	雪似花	雪點林頭見有花
山中雪	山中雪	暮山雪	深山雪	遠山雪	遠山見雪	嶽雪
龍雪	野徑雪	雲滿高根	雪滿群山	名山雪	山深雪	足柄山雪
原上雪	野亭雪	野亭雪	柳雪	山路雪	樵路雪	關雪
關路朝雪	足柄關雪	行路深雪	雪埋路	旅中雪	雪中旅行	馬上雪
水邊雪	氷上雪	川雪	海邊雪	海邊松雪	浦雪	瀧浦雪
湖邊雪	島雪	孤島雪	江雪	江天暮雪	古波雪	瀧雪
名所雪	里雪	市雪	市中雪	山家雪	山家雪深	山里雪
閑居雪	閑庭雪	菴雪	庭上雪	庭雪厭人	庭雪似月	田家雪
禁中雪	禁庭雪	故郷雪	故郷雪深	社頭雪	神社雪	古寺雪
杜雪	杜間雪	山樹雪源	嶺樹雪深	雪埋樹	樹頭雪	雪埋落葉
松上雪	松雪深	雪埋松樹	松上雪	雪作松樹花	晴雪落長松	杉雪
常磐木雪	竹雪	竹雪深	雪埋竹	雪滿衣	雪中遊興	雪中眺望
雪中遠望	雪朝遠望	雪朝遠樹	雪朝遠村	雪中遠情	雪中戀人	雪中待友
雪朝待友	雪中待人	雪中訪人	雪中行人	雪中客來	雪中會友	雪中待春
寄雪傷老	雪上淺源	雪中歌	雪中鳥	鳥翅拂雪	雪中燈	雪中鐘
寄雪延思	雪中迷懷	寄雪祝	寄雪神祇	野行幸	鷹狩	大鷹狩
夕鷹狩	晚頭鷹狩	鷹狩欲暮	鷹狩日暮	連日鷹狩	日々鷹狩	雪中鷹狩
狩場鷹	野鷹狩	炭龜	炭龜烟	炭龜烟織	炭龜雲	炭龜雪

深山炭龜	嶺炭龜	里炭龜	遠炭龜	遠近炭龜	埋火	閨埋火	爐火
向爐火	夜爐火	寒夜爐火	爐邊閑談	爐火似春	山家爐火	爐邊迷懷	爐邊極意
冬至	豐明節會	五節	賀茂臨時祭	臨時祭還立	蓮前使	賀調	新嘗會
神樂	雪中神樂	禁中神樂	曉天神樂	佛名	雪中佛名	佛名夜闌	佛名至曉
佛名朝	早梅	冬梅	雪中梅花	雪中早梅	梅雪	梅花先春	年內梅
年內早梅	年中早梅	里早梅	梅告春近	寒月照梅花	歲暮	歲暮近	歲欲暮
惜歲暮	年々惜歲暮	驚歲暮	傷歲暮	悔歲暮	慕歲暮	送年	歲暮忙
雪中歲暮	歲暮雪	雪與年深	雪中送年	歲暮月	歲暮梅	歲暮松	歲暮鐘
歲暮夢	水邊歲暮	河邊歲暮	海邊歲暮	都歲暮	關歲暮	市歲暮	家々歲暮
閑中歲暮	山家歲暮	閑居歲暮	鏡山歲暮	歲暮急出水	歲暮如流	老後歲暮	老人惜年
老送年	老傷歲暮	老少惜年	爐邊惜年	學者惜年	うかれめとしをらしむ	老後待春	歲暮訪友
歲暮迷懷	歲暮神祇	歲暮祝	閏十二月歲暮	待春	依花待春	老後待春	旅宿待春
春漸近	春既卜隣	除夜	驚除夜	除夜傷老	雨中除夜	家々除夜	舟中除夜
追離	冬風	冬風	冬象	冬星	冬日	冬雲	冬雨
冬露	冬夜	冬夜長	冬朝風	冬暈	冬曉	冬曙	冬朝
冬夕	冬山	冬深山	冬野	冬野覺	冬夢	冬地儀	冬山
冬嶺	冬池	冬深山	冬田	湖上冬	水路冬	冬川	川冬
冬瀧	冬社頭	冬海	冬田	湖上冬	水路冬	冬船	水鄉冬
故鄉冬	冬社頭	名所冬	冬田	湖上冬	水路冬	山家冬	冬閑鳥

山家冬朝	山家冬夜	山家冬深	山家如春	冬床	冬庭	冬籠	冬籠したる家
冬衣	冬木	冬植物	冬花	冬陸	冬竹	冬杉	冬禽
冬歌	冬雁	冬鶴	冬人事	冬旅	冬別	冬興	冬眺
冬香	冬色	冬聲	冬玉	冬筵	冬車	冬鐘	冬遠
冬述懷	冬懷舊	冬神祇	冬祝	冬月	冬間	冬十一月	冬十二月
楢小河冬以下同		眞神原	深草里	佐益中山	刀爾川		

目次終

類題草野集上卷

○春部上

年内立春

驚もなかなぬかきりの年のはにたかゆるしてか春はさぬらむ
おもふとなき世なりけりをしと思ふ年は残りて春のさぬれは

あら玉のとしにふたゝひ二荒山立かさねたるはる霞かな

朝氷とけにけらしなあら玉の年のこなたの春のはつかせ

さらてたにとまらぬ年をいそかせて残る日數も春になしつる

年たてはのへのあそひのゆかしきをけふこん友に先や契らむ

青柳のいと長く世に在へてもけふくる春はめつらしきかな

む月たつけふより梅をかさしつゝ今年も春は花にくらさん

はるくれと垣ねの雪も驚のこゑとゞきにそうちとけにける

あら玉のとしのをた巻たかてより又くり返し春のさぬらむ

けさはしも庭の小草のはつかにもつもらぬ雪に春そしらるゝ

ゆきながら明る朝戸にさく花のおもかけみせて春さきにけり

契冲	枝直	千蔭	春郷	蘆庵	眞淵	千蔭	春海	餘野子	春満	古道	春海
----	----	----	----	----	----	----	----	-----	----	----	----

元日鶯

元日立春

山家元日

元日宴

若水

門松

春風來海上

春從東來

貴賤迎春

幽栖春來

谷風に水のこゑさへさそはれてけふうくひすの春はきにけり
 かきこもる竹の垣はもうくひすの聲をしるへに春やこえこし
 ひさし野を霞こめたる今朝みればきのふそ去年の限り之ける
 ひ月たつけふを初めによみそむる春の日数は長くもあらなむ
 あら玉の年とのみこそおもひしかおくれすたてる春かすみ哉
 山さとのおのつからある門の松こしといはんしるしどもなし
 萬代のはたてなひかし大庭にけふよりはるのはつかせそふく
 朝日子のひかりまちどる若水にくまはや千代の春のこゝろを
 やととにいとなみたてし門松のまつにかならず春はきにけり
 二見潟こちふく風にあけそめて神世のまゝの春こきにけり
 から人もふりさけみよどくる春は布目の高ねに先かすむらん
 此國もなほひかしよりくる春をもちし人はまつや久しき
 よろつ代のえたてなひかす朝風によもの民くさ春をしるらん
 綾のきぬ布のたもともあらためて春きにけりとみゆるけさ哉
 さゝのやの朝戸明れば梅かゝに春のひかりもたくへ來にけり

契沖 千蔭 眞淵 蒼生子 蘆庵 枝直 千蔭 春海 契沖 千蔭 枝直 蘆庵 春海 枝直

春風春水一時來

春生人意中

雪中春來

春松久縁

松迎春新

春到管絃中

梅柳度江春

雪消山色靜

每山有春色

筑波山しくつのつらゝ今日とけて枯生のすゝき春風そ吹
 多摩河の水もぬるむやいつしかと風さむからぬ春のひかりに
 いなむしろ河そひ柳うちなひきこほりなかれて春は來にけり
 うちなひく霞もまたてのとけしとねもふや春の初なるらん
 待つつけし人の心のこるはまた花鶯もしらすそあらまし
 春といへは人の心そたゝならぬ世之花鳥のあこれのみかは
 みこしちやとよとししるき雪のうちに春來にけりと祝ふ民草
 松かえに日蔭のかつら千代かけてくる春とに色まざるらむ
 いく千たひ春の山松色そへてかはらぬかけもあらたまらむ
 鶯の囀といふしらへより世はこるへにもなりにけるかな
 枝かはす柳もうめの香あしみてなひく入江の水かをるらむ
 みなみちの江をこえゆくは青柳のめもはる風にゝはふ梅かゝ
 ふるとしのみ雪きえつゝ東人のはるしりそむるをつくはの山
 雪きえて花まつほどの山のこゝかすみはかりそ春の色なる
 うらくといつる日影にさそこれ霞にははぬ山のこもなし

眞淵 枝直 千蔭 蘆庵 春海 千蔭 枝直 千蔭 古道 全 千蔭 春海 全

立春

をつくはもとほつあしはもかすむ也ねこし山こし春や立ちむ
はる霞たゝるをみれこくもりし神代の昔おもほゆるかな
をちこちの山のみ雪もかすむ也けさより春になりけらしも
霞たつむかひの岡になかさりし鳥も聲して春はきにけり
人心よはみなはるのとくさの外にまされぬ朝はらけ哉

除日立春

これやこの春たつけふの年のくれ行もかへるもあふさかの山

三日立春

いつみ河年なみはやきみかの原れくれてけふそ春はたちくる

立春天

天の原はるたつらしも朝霞うら安の名にたちみちにけり

立春雲

いひしらぬ神代の春の初空もかくやいはどの明くれの頃
薄霞たなひきそへて春をけさくるかたしるき横雲の空

立春日

家つとりかけのたれをのたれもわかぬ長き春日をけふと迎て
かしこきやわか浦安を出る日に春知そめよわたりし國人

立春雪

春のくる雲路のぬさにけふちれと冬さへ雪をふりやつくさぬ
いとはやもふるとし遠きこゝちして雨にかすめるけさの初春

雨中立春

空と猶いふとなきを時津風たかつかひにて春をつくらん

眞淵 美樹 土満 古道 春満 宣長 全 千蔭 全 全 春満 千蔭 全 全 契沖 千蔭 蘆庵 長流

立春霞

のどけさは袖にしられてから衣さのふにも似ぬはるのはつ風
けふはしやこのめ春たつ時津風枝をならさてのどかにそふく
かくれしとはるも霞も天の戸の明るまちてそ今朝はたつらむ
朝霞うすき衣をたちそめてなつをかねたる春もきにけり
山のはもかすまぬほどの霞もて春はけふよりたちみちにけり
くたかけのなきてつくなるふる年のわかれそやかて初春の聲

立春曉

やととの朝戸やりこそいそくめれ年にまれなる春にあくどて
朝日かけ先かすめるやくる春のしるしかはらぬ光りなるらむ
難波江にしけき蘆ねのわしかひのけふそ今年のささし之ける

立春江

すはの海もけさより氷解そめて春風わたる路そみえける

立春湖

池水のこほりの底にすむ魚も心やとくるはるのはつかせ

立春池

谷風の氷をどきてたつ春もむかしにかへる浪のはつはな

立春眺望

ふる年はひとへへたつる眺めとてきのふの雪もかすむ山のは
山河のいよにあらそふ氷たにけふまけそむる春はきにけり
つくはねの高ねのみもき霞つゝすみた河原に春立にけり

宣長 春満 全 契沖 春満 契沖 宣長 契沖 長流 全 契沖 千蔭 全 全 春満 千蔭 全 全 契沖 千蔭 蘆庵 長流

立絶水

はるにけさ吹もおとせぬ谷風にこほりどけゆく水のしらなみ

春満

立春氷

朝風に氷どけゆく池水のみきはのちみも春やたつらむ

春満

立春山

けふやかて霞もたつのい駒山うへそ千さどの春にたくれぬ

契沖

立春關

朝かせにこほりなかる、龍の上のみふねの山に春は來にけり

春海

都立春

天の戸をかけたのはつ聲かすむよりはるに明行逢坂のせき

契沖

禁中立春

百司うまもくるまもつとふ也君か御門に春たつらしも

春海

海邊立春

衛士のたくひかり霞てはのくくとあくる御門に春立にけり

全

浦立春

あはち島あちまさの島も霞けりおのころ島に春やたつらむ

土満

故郷立春

吹かせもなこのうら松ほのくどかすむ梢に春は來にけり

宣長

閑中立春

いにしへのなにはの春や立かへる烟をかすむ民のかまとに

契沖

名所立春

世は春になりにつらしも窓の内にむかふ硯のこほりどけゆく

千蔭

處る立春

ふしのねの雪もかすめる昨日今日田子の浦ひと春やしるらむ

たみ子

門毎に高き

いやしき松をうゑて春はよそよりたぐぬけふかな

契沖

立春祝

山かつもしはくむ海人も春霞けふの心はへたてさうけり

全

初春

としとにかきもつくさぬこの葉を硯の海のさちといはまし

千蔭

初春

朝霞ふたらの山にたちそめてなひかぬくまもなき御代の春

枝直

初春

新らしきこよみと梅のはつ花といつれかけさは先ひらくらん

契沖

初春

めつらしと春をまちとる心こそ年はふれどもかはらさうけり

春海

初春

明ぬとてなる鳥の聲のうちに山きこかすみ春そきにけり

たみ子

初春

花鳥の春にけふしもあふものをきのふは老をなになけきけむ

千蔭

初春

かきりなく、れども同じ春なればわかぬ心もかはらさうけり

筑波子

初春

かつしかや千しろのわさ田はる立て豊年しるくふれるゆき哉

千蔭

初春

かすみあへすなほふる雪もけふよりの人の心の春はうつます

蘆庵

初春

春はまたあさまの山の薄かすみけふりにまかふ色としもなし

春海

初春

またはるにあふうれしさをつゝめとや袂もたかに霞たつらむ

枝直

初春

浅みどり霞にもるゝ色もなしはる立くらしよものやまゝく

蘆庵

初春

いつくより春はさぬるとみわたせばやまのはとに霞たなひく

土満

初春

いつる日のひかりを春の初花にゝはひそめぬるみよしの山

契沖

どね川のこほりもどけてしらすとはふ小新田山に霞たなひく
 たちそむる霞とやみん春はまたあさまのたけになひく烟を
 わはち島わはともみえす朝かすみしきつの浦に春立しより
 うちひさす都大路のたてぬきに霞の衣たちそめにけり
 むさしのは春さにけりなおしなへてたつや霞の廣機のきぬ
 すはの海や氷とくらし遠つあふみ天の中川みきはまされり
 はのくど霞む川どの朝風にはるたちかへるなみのはつはな
 うめかえの花のゑまひを朝はらけ年の始のさかえにそみる
 朝日かけにはふ軒はに春もけふ立枝のうめそ咲そめにける
 かすむともわかぬはかりの春の色を松にとわるうくひすの聲
 百鳥のいつれはあれと鶯のなくひとこゑにゑるは來にけり
 うらくどはるしきぬれと鶯の聲もまたてそきくへかりける
 このねぬる朝けの霞また薄し春といくかもたぬころもに
 みわたせは田つらのこほりうちどけてとはの山本霞こめけり
 初わかなれふる春野にゐるたつやとも千代つむ類なるらん千

貞隆 枝直 春海 千蔭 全 眞淵 春海 眞淵 千蔭 枝直 古道 筑波子 長流 土満 蔭

初春祝道
 あたらしき春の光もうら安の國ふりしるきみちそこのみち 全 蔭 庵
 ゆく末ののどかにみえて天の道も正しき御代に春はきにけり
 ときしらぬみ雪なからにふしのねも霞にははふきのふけふ哉 千 蔭
 花といふ花の咲へきはるくれにははぬはともめつらしき哉 筑波子
 東路に先くる春の日のかけをゆきにまちとるふしのしはやま 千 蔭
 けふひと日春雨ふりてあらふ野のあすの若なは水もかもはし 長 流
 老木さへめくみにもれぬ春雨のふるのゝ若ないかににふらむ 蔭 庵
 山のこゝ雪けなからに八重雲をひとへたつるはるかすみ哉 千 蔭
 わし引の八重山こえて初春のたちぬさなれやつもるしら雪 全
 ひとせの月と花とのねもかけを春たつ空の雪にみるかな 全
 わけわたるはるの潮ちの時津風東路にこそ先かよひけれ 全
 のどけさの花の香またてうくひすもさはれぬへき春の初風 宣 長
 かけてまつ花のにしきの下衣はるたちそむるあさかすみ哉 全
 角田川岸のうすらひとけそめてみなかみかすむ春はきにけり 千 蔭
 どちらはてし朧のし水ぬるむよりなこりはかりの月もこほらす 枝 直

早春浦

さえくれしへたてやいつと浪風のなこの浦人はるをしるらむ
あつさ月は春きにけりますらをか手にまく柄の浦もかすみて

春満

早春湖

さゝ浪や志賀の水うみしかすかに春にはへる朝日かけかな
わか浦や残れる雪もわしたつもはのかにみわたかすむ春哉

春満

早春海

谷風にこほりなかれて鳴瀧やにしの河瀬もこるはきにけり
はるはまた浅瀬の水やさえぬらん川へのを草もゆるともなし

宣長

早春山

はるのたつ霞の袖はいどはやも千さとの山にかけてみゆらむ
春たつやたなひさそむるかすみさへまた薄機のみぬ笠の山

春満

早春關

花とみし雪こそきゆれ雪とみん花のはるたつみよしの山
のとかにもたつや霞の關の名も明行春のそらにしられて

春満

早春市

はるをうる人を行かふ朝霞たつの市路もけふはかすみて
けさよりは春の霞のたつの市に去年にとしをたれかふらん

契沖

早春水

とる風のたよりにかのれ聲たてゝ鶯さそふたにかこのみつ
うくひすを都のつとにいさどてやけふの初音に春のさそひし

契沖

早春鶯

鶯もとしのさかえをけふよりと百よろこひの初音をそ鳴

春満

早春梅

うすらひは春たにむすふ池水の汀のうめそひもときにける
冬かけて咲そめしかとうめの花春の色香はこどにそ有ける

千蔭

早春柳

たらちねのこかひはしむる初春に柳はまつそまゆこもりする
はるはまた浅香の浦もかすまねと色こそまされ住よしの松

長流

早春松

とことはに春をこめたる九重も年のはしめはけにそ花なる
はるのきる衣の關のうす霞また山風はたちもへたてす

よの子

都早春

みちのくのちかのしはかま春くれは煙よりこそ霞そめけれ
はるくれはやかて霞やへたつらんとほさかりゆく海こしの山

宣長

關路早春

けふよりはなにはも有し都鳥ふるきにかへる春とつけこせ
わけわたる空の霞もほのくくと紫たふるむさしのいはら

枝直

海邊早春

わかなつむ袖のさむさや空にしる霞のころもかすかの原
たをやめか若なつまんととめてこし雪まに雪の又そつもれる

枝直

故郷早春

はるとにつとひゑらきて萬代にかくしわそとん酒はき歌はき
大君の千代のためしとま心をつくしのあまかつれるみにへか

土満

野早春

ことしよりねひ先こもる藥兒にあえなん春そかきりしられぬ

千蔭

早春餘寒

全

早春興

全

腹赤御贄

全

藥兒

全

春水

はる風にこほりなかるゝみきはには水の心のゆくもみぬけり

真淵 契沖

春氷

あすか川みひろのさしの霜くつれさそふゆきけの水のしら浪
はる風も氷のせきをふきとちてしはしとゝひる鴉のかよひち
いもかひもとくとむすふと立田川氷のひまもけさそみぬける

全 長流

氷始解

けさよりはあさせこす浪れとかへて氷なかるゝたま河の水
うすらひのなかるゝ水の烟よりすみた河原はかすみそめけり

千 枝直

氷解

はるの日のひかりのとけきみ心を廣田の池や氷とくらむ
さくら河みきはのこほりとけそめて春をよせくる浪の初花

全 全

春到氷解

山陰もこほりとくらしなつみ河かはれとゆるき水のはる風
あをやきのいと吹みたす春風にむすひもとめぬ池のうすらひ

枝直 蘆庵

東風解春氷

氷るし水のしら浪立かへりはる風ふきぬかはつらのやと
春風のいたらぬ隈やなかるらんけさはあしまもこほらさり鳧

古 枝直

春風解氷

氷るし細谷川もはる風にとけて花田のねひとみえつゝ
氷ぬしかけひのつらゝうち解てしつくの田ぬに春立にけり

千 春海

池水盡開

うすこほり松吹風にこらとけて千代のかけみるはるのいけ水

千 千蔭

雪消氷亦解

けさはゝや外山の雪まみえ初てかけひのたるひ車おつなり
筑波ねのみゆき消こまみちの河みなもさかまきけさそ流るゝ

蘆庵 千蔭

雪消春水來

春風はをのへよりこそ立けらし岩間のたるみけさひゝくなり
あふさかや岩間のし水おとすなりこほりふきとくはるの山風

全 春海

瀧響滴春風

かとお河水はとけて山ひこはこたへもしらぬはるのはつかせ
嶺のかすみ野へのを草の若緑きのふにけふそふかさまされる

千 契沖

和風報春

難波江やこほりなかるゝ朝とにつのくむあしの數そゝひゆく
白雲の庭にたなひくあを馬は空のみとりの名のみなりけり

春 長流

風光日々新

浄御原ひしりの御世のためしとてひくや雲ぬのけふの白馬
九重の玉しく庭にあとつけていなゝさいつるあを馬の聲

千 枝直

白馬節會

あを馬の毛色もはえてみゆる哉今日引わたす紫の庭
たなひける霞のみかは白馬もけふと雲ぬにはるをみせけり

春 宣長

子日

小松原手引のいとのうちはへて子日する野に千代はへぬへし
子日して千代のためしを引松は根さしそとほき二葉なれとも

長 湛水

そのかみの子日の松の千代をへし露よりなれる玉はゝさかも

千 千蔭

元日子日

初春のはつねのけふののとけさにねは宮人の野への遊する
船岡や松とみゆきのあとをこそ千代の子日のためしにはひけ
門松の今一しはの春の色も子日にあへるけふやまさらむ
いさゝらは驚きかん松ひかん春くるけふそはつねなりける
む月たつけふのはつねの小松原霞こそ先たなひさにけれ

土満
春海
契沖
枝直
千蔭

正朔子日

うれしさを引かさねよと春の立けふに子日やめぐりきぬらん
む月たつけふさへ松を引つれば心ゆくへきはるにそありける
みゆさせし北野の春の姫小松引もかしこきためしなりけり
君か世の千代のためしにひきのなる松も子日のけふを待らん

春満
千蔭
筑波子

子日松

ねのひすとひくや小松のすり衣袖のみとりそ千代の色なる
かすかの、小松か原にあわ雪のふるさと人は子日すらしき
はる霞を袖にわけてしめ野行紫野ゆきねのひするかき

春満
長流
千蔭

子日小松

君か代の千代のふる道ふりはへて引や子日のさかの山松
春日野にいさといはましを山陰のけふの子日はまつ人もこそす

春満
長流
千蔭

雪中子日

天津琴けふひくまの、小松にも年のをすけて風そしらへむ

全
千蔭

山子日

契沖

契沖

山居子日

子日するのへの小松をあり敷にちとせをかけて人をむらたつ
わか山のふるすを出る鶯もけふをはつねとれとろかしけり
わか門の小松ひきけり尋こしみやこの人にいさといはれて
子日する松にならひて千の春契かれせしみやひをのとも

全
千蔭

子日友

いくよの言葉の花か咲ぬらん子日の小松ふた葉なからに
ともにひく二葉の松や一とせのみやひかはさんはしめ也ける

全

子日催興

ひきうゝる子日の小松としより幾代かひある春にあはまし
子日するけふのためしとひく松にひかれて千代の春や重ねん

全

子日祝言

龜山の松を子日にひきしより心のうらはちよもたかはし
子日して千とせをまつのこのはもさかえんすゑの春やいく春

全

子日述懐

子日にも引人なくてふりにける身をあはれとや松もねもはん
わしといひ鷹どわかれてわたる哉けふのいく羽の雲のうへ人

全

賭弓

此殿のかへりあるしやしるからん射手のつかさの袖つとふ
春雨も山のみとりをそめぬるにかすみそはやく深さまされる

全

霞

むらさきのめもはるくといつる日に霞色こきむさしの、原

全

霞	霧	霽	霞	霞	春	朝	夕	山
知	知	知	知	知	曙	曙	霞	霞
春	春	春	春	春	霞	霞	霞	霞

みわたせはは山しけ山れしなへて霞をもるゝ色なかりけり
 たかさこのをのへに春の立そめて霞の衣松かさねせり
 日にそひてさそなこのめもはる霞ふかくなり行みよしの山
 野も山もかすみ渡りてみえぬ日を春はなかく隣れとそみる
 しま山はゆきけなからにやしは路の霞そはやく立わたりける
 あくるより今朝は霞にしらま弓春來にけりな高圓のやま
 八重かすみかすみこめつゝむら鳥のこゑさへむせふその曙
 山高みいつる日影をまちとりてよもにへはへる朝かすみかな
 わひきするわさこそみえぬ朝はらけ霞をもるゝあまのよひ隣
 ふしのねの雪さへ春の色みえて霞そめたる朝はらけかな
 明たてはきゝしなくなる足引の山のこぬれに霞たなひく
 はる風の霞によわる夕くれになひかぬ山もとはさかりゆく
 あさ緑かすみそめてそあし引の山のかひある色ほみせける
 はる霞八重たつ時は三笠山さしてそこともわからさうけり
 出る日はたゞくれなるの鏡山かすみのみかくひかりとそみる

契	春	蘆	契	土	春	枝	千	宣	千	契	千	春
冲	海	庵	冲	滿	海	直	蔭	長	蔭	冲	蔭	海

霞	霧	霽	霞	霞	春	朝	夕	山
添	隔	藏	滿	上	暮	山	山	山
山	山	山	山	霞	山	霞	霞	霞
色	山	山	山	霞	霞	霞	霞	霞

けさはまた霞もひとへ二並のつくはの山はそれとしるしも
 はるをあさみこのめもえぬ山なみにへはへる色は霞之けり
 はるもたつみ山の谷の川きりは峯の朝日にかすみとそなる
 ふりさけてみるものとけし鏡波山は山しけ山かすみわたるを
 武藏のをふりさけみれば秩父ねにはる日かけるひ霞たなひく
 雪さえてきえぬよそめの山のはもあるかなきかにかすむ春哉
 山からすわけぬと告る聲はしてやへの霞やよをのこすらむ
 立ならふ高ねのひはらかけくれて霞にのこるゆふつくひかな
 朝霞たちそふまゝにみねの松心あてなるいろたにもなし
 あしからや嶺にたなひくかすみたに立もねよはぬふしの芝山
 いくむらの霞なればかは山つみしき山つみのみけしかりけん
 船木こるおとしられて足柄の山は名のみそかすまざりける
 心あてのかすみはかりにきのふみしふしのねたとる東路の空
 世は春になりけるかな消のこる雪にやつれし山もかすみて
 ふしのねもふもにつゝくむら山もなへて縁にかすむはる哉

千	枝	宣	枝	全	千	契	春	枝	千	契	千	春
蔭	直	長	直	蔭	蔭	冲	海	直	蔭	冲	蔭	海

霞藏遠山	霞添春光	霞隔山樹	里霞	杜霞	野霞	野外霞	野徑霞	原霞	原上霞						
うら／＼とかすみそめたる晨より日影にははぬ山のはもなし	をとめ子かくる髪山の山まゆをうたてもかくすはるの霞か	いつことも春のひかりはわかみとりかすみに匂ふ明霞の色	山にてもなほ春ふかくみゆる哉かすみのうちのみねのまつ原	旅人のやとりやいそく吳竹のふしみのさとをかすみこめけり	さとなれてなく鶯の聲のみはたちもへたてぬはる霞かな	ゆふけふりしるへも春はとひわひぬまかふかすみの深草の里	梢よりかつわらはれて朝かすみや／＼はれそむる山もとのもり	なか／＼にかすかの野へは日にそひて緑もうすくかすむ若草	はるの日にゐなのをゆけは有馬山ありともみえずたつ霞かな	都人わかなつみにといつる野は先さきにたつあさかすみかな	小松ひき若菜つみにとならさすは霞のすゑ野いかいたとらん	旅人のいくのいすゑのいくへとも限しられすかすむはるかな	はる風はそよと斗のおともなしかすみわたれるゐなのふし原	青霞たちの原にきてみればいはゆる駒のこゑのみそする	
春海	千蔭	枝直	契沖	春滿	古道	宣長	蘆庵	宣長	契沖	枝直	全	全	宣長	枝直	契沖

岡霞	行路霞	徑霞	關路霞	關中霞	名所霞	霞隔古寺	都霞	故郷霞	水郷霞						
はるかせのなきさの岡にわたつみのおきをふかむる朝霞哉	わけみとり行かふ袖もはの／＼と霞むみやちの春そのとけき	たそかれとたとるもわかすうちむれて霞にまじる春の山路は	ゆふ日さす神のみ坂はあらはれて霞にへたつあしからのせき	東路やのとかなる世は關もたゝ名をのみとめてたつかすみ哉	せきの名の霞はかりをとさしにて春こえやすき東路の山	はるふかみ分こし嶺の朝な／＼霞にきゆる跡のとはやま	すまわかしみわたし遠くなりけり浦浪かけてかすむ春へは	とのくもりうすひのみさか霞むてあつまの國そはやく春なる	清見かた關はかすみのへたて／＼も猶もるものは浪のおとかな	風たえてかすまぬれともかすみけり泊瀬の山の入相のかね	ふりはへて行かふ袖のおひ風に都大路はかすみかぬらむ	みよしのゆきのふるさと春くれは青根かたけを先霞ける	すみた河さしのわか草もえしよりみとりにかすむ朝はらけ哉	ひとすちのかすみのうちや久世椿梅津大のあたりなるらん	
契沖	春海	春滿	春海	宣長	春滿	宣長	枝直	春海	千蔭	蘆庵	全	枝直	春海	千蔭	蘆庵

霞隔水郷

立ちめてはるは難波のなにとなくかすむ浦のみるめ也ける

宣長

遠村霞

風にはふ梅津のさとのしるへたにたえてつれなくかすむ春哉

全

海霞

かきりなき青海原に立わたる春のかすみや天のうきはし

蘆庵

海邊霞

なにはかたあらぬかたにもかりかねの歸るとみしや霞む釣舟

契沖

めもはるにかすみわたれる海原はあはとみるへき遠山もなし

春満

玉よする浦浪かけてかすむ日は潮ひ潮みちわかれさりけり

枝直

こきいて、明石のとよりみわたせはやまと島ねもかすむ春哉

宣長

あまの子かいそなつむなるま袖よりやそ島かけて霞こめけり

千蔭

わたの原聲こめたる夕なきにちかちのときこゆいさりすらしも

土満

海上夕霞

住のえの浦の松風群たえてかすみにこもるおきつしら浪

春海

住吉もなにはもおのかうらくとなきたるみれば霞也けり

長流

おとにきく浪もかくれて田子の浦や霞は春そたぬ日もなき

宣長

もしはやくなにはの浦の八重霞一重はあまのしわさ也けり

契沖

みなれさをなれても春はたとらんおのか浦と霞こめつゝ

千蔭

いかはかりわけまよふらん名にたてる春の霞のうらわこく舟

全

霞隔浦

海路霞

海上霞

いせの海や常世の浪の萬代のおとをこめつゝたつかすみかな

全

島霞

たちへたつなみのひまにはあらはれて霞にしつむ淡路島山

春満

孤島霞

駒とめてさやにみましを玉の浦はなれこしまもけさは霞めり

枝直

霞隔行舟

かちのおとはちかの浦わにこく舟もみえぬまてなる朝霞哉

契沖

江霞

かれあしもつのくみゆくか難波江やなきたる浪にうち霞む頃

春満

なにはえや浪のうへなるみをつくし春は霞のそこにこそみれ

春海

千舟よる入江の水に春の色もほにあらはれてたつかすみかな

千蔭

つのくにのなにははりえは玉よりも春日うらゝに霞しく頃

宣長

春江霞

うちけふる入江の水に松かえのうつるみとりやはるの一しは

千蔭

ことうらのみるめやからん難波かた入江はりえもわかぬ霞に

春海

湖霞

さゝ浪にうつるもはるとにはてるやむかふ鏡の山はかすみて

全

湖上霞

唐崎の心あてなるひともとの松もほのかにかすむうらく

蘆庵

深みとりかすみの底にはのみえてそれとはしるし辛崎の松

千蔭

ふせの海や春ふかゝらし垂姫のかすみの袖もおもかくしせり

春海

湖上朝霞

朝日かけ山はかゝみの名にはれて霞のそこの海そくもれる

契沖

河霞

はる霞みふねの山をたちこめてよしの川にかちのおとする
きふね川せにくたけてちる涙も春はかすみの袖のしら玉

千 蔭

河上霞

水無瀬川霞のみをのわらはれて一すちふかきをちの山本

宣 長

渡霞

みつのもりみつとやいはん夕かけて霞もふかき淀のわたりは

春 滿

橋上霞

わけわたるよさの松原すゑかけて霞につくわまのはしたて

全

檜上霞

ひはらより先うつもれてみわの山しかもかくせるゆふ霞哉

春 海

松上霞

うと濱のむかしはしらす住よしの松にかすみの衣かゝれる

長 流

霞隔松

いつのよの子日の小松としふりて春は霞にたなひかるらむ

千 蔭

霞隔遠村

しはならぬわふみの海も霞む日はみるめはかりの志賀の濱松

契 沖

霞隔遠樹

はるそとは霞やはやくしらま弓いそ山松をたちへたてつ

千 蔭

霞春衣

住よしの松そ霞にあらはるゝとはさとをの草のはつかに

契 沖

霞隔遠樹

つまとのいつれのをよりかすむらんしらへもとはき嶺の松風

枝 直

霞春衣

をちかたのつゝみの柳はるくれはおのか畑にたちかすむらん

千 蔭

霞春衣

立かへりいなはの山のみねの松ちきりたかへすたつ霞かな

宣 長

浅峯帯晚霞

たちそめし春の霞のうす衣日をかさねてやそふ色も見む

蘆 庵

鶯

ゆふからす歸る翅はかつ消てかすみにのこるをちかたのやま

春 海

鶯

うちわたす竹田の原の雪のうちに鶯なきぬはるのはつこゑ

真 淵

鶯

花おそさかた山里のうくひすやわれはかはにも春をつくらん

春 海

鶯

我その浅篠原をすたちつゝよそにうつらぬうくひすの聲

千 蔭

鶯

花になく心の色もおのつからねにあらはるゝはるの鶯

蘆 庵

待鶯

花の香のしるへもまたて谷風に先うちいつる鶯のこゑ

宣 長

南枝暖待鶯

雪きぬて先さくかたのうめかえにやかてまたるゝ鶯の聲

枝 直

鶯

うくひすの聲まちなかねて露ぬるむかたえにはふ梅の初花

千 蔭

鶯

梅柳はるにいりえのみなみには初うくひすのねもまたれけり

春 海

鶯

うめかゝに山さくら戸を空より先明てまつ鶯の聲

契 沖

春來鶯遲

はるくれと谷のとにのみおとつれてさとにまにるゝ鶯の聲

土 滿

初鶯

さとなれぬこゑなほわかすめつらしなすたちそめたり園の鶯

春 滿

早鶯

やかてこの垣ねやふるすけさよりの春つけそむるやとの鶯

蘆 庵

早鶯猶若

朝日さす木かけの雪とうちとけぬ羽根ならはしの鶯の聲
心とく春つけそむる鶯もまた舌たみてこゑのきこゆる

契沖 蘆庵

初聞鶯

梅かゝのかすみをもるゝ朝戸出に初うくひすの聲そにはへる

千蔭

聞鶯

世の中のうきもつらきも鶯の聲をしきけはわすられにけり

筑波子

毎朝聞鶯

あさとにきなくうくひすきなけ猶春しらぬ身も春としるへく

蘆庵

鶯知春

百鳥のあるか中にも谷へよりはるをしらせにいづるうくひす

秀衛

鶯告春

ふる雪に冬こもりせしうくひすの聲はるへにもなりける哉

枝直

鶯告春

鶯のこゑなかりせはあはかたの春をも春とたれかしらまし

さえ子

鶯告春

鶯のなくねきこえしあしたより今一しほそはるこのときき

逸子

山鶯告春

なへて世にはるをしれとや鶯のこさきたつるけさの初聲

千蔭

山鶯告春

うくひすの聲いちはやき山里を春うとしとはたれかいひけん

春海

山鶯告春

空はなほ雪けなからの山さともきけはこゝろの春の鶯

宣長

古巢鶯

はるきてもなれしふるすを鶯はいてかてになく聲はのとけし

全

古巢鶯

春寒みゆきのふるすを鶯はいてかてになく聲はのとけし

春満

谷春

谷河にかたえさしおはふ梅さけは浪の花にもうくひすを鳴

契沖

鶯出谷

のとかなるひかりはうとき谷の戸もさすか春しる鶯のこゑ
ゆきゝえぬ谷のうくひす深きより浅き春にそなきて出ぬる

宣長 長流

鶯出谷

鶯のたにのといつるはつこゑをきゝにし日より春を來にけり

路子

雪中鶯

うくひすのはつねのけふの玉はゝき翅に雪をそらひてそなく

長流

雪中鶯

軒近き枝にこつたふ鶯の羽風にもろきはるのあわゆき

枝直

雪中鶯

れもひあへぬはつねは雪の中ゝにのとけさまさる春の鶯

宣長

雪中鶯

花はゆき雪は花ともまかへとも鶯のねにゝるものそなき

土満

雪中鶯聲

にははぬをあなうめとてやふる雪の花ふみしたく枝の鶯

春満

雪中鶯聲

花とちるそのふのはるの白雪にゝはひをそふるうくひすの聲

千蔭

雪中鶯聲

ふりつみてまた春さむみなく聲も雪間もまれの野への鶯

宣長

雪中鶯聲

うめかえに笠やとりして春雨にぬるとも猶とうくひすの聲

契沖

雪中鶯聲

はるさめにうめの花かさとりもあへすしとゝにぬれてき鳴鶯

枝直

雪中鶯聲

うくひすのこゑなぬらしそ春雨にきつゝなくなる梅の花笠

宣長

雪中鶯聲

はるさめのつきてしふれは我園にはねもはしあへす鶯の鳴

土満

雪中鶯聲

雨はるゝゆふくれ竹のおくしめてしめやかに鳴うくひすの聲

春海

霞中鶯

霧ふかき谷よりいてし鶯の野へのかすみに又やむせはむ

契沖

霞裏聞鶯

はるかすみいほへかおくのたかむらに千代をこめたる鶯の聲

千蔭

曉鶯

うくひすの聲にあくるや春霞なほよをのこすたかむらのおく

全

曙鶯

をりかこふまかきの竹のよをこめて聒なからにうくひすの鳴

全

寢覺鶯

うくひすのねくらなからの一聲にいはひて明るしのゝめの空

全

朝鶯

窓の竹によをこめてなく鶯はおいのねさめのわれのみやさく

春滿

鶯

おきいてをさわきやすると鶯のこゑゆゑいと朝いをそする

長流

鶯

鶯のこつたはんとや羽風もてちりぬうめも朝きよめする

契沖

鶯

さしいつる朝日もにはふ梅かえに春をあらそふ鶯のこゑ

宣長

夕鶯

のき近き一むら竹にふしなれて朝ことに鳴うくひすの聲

枝直

鶯

おほつかなどはれぬやとに鶯のひとくとなくや夕くれの聲

春滿

鶯

ふしなれし一むら竹によかれしと花にわかるゝ鶯のこゑ

枝直

山鶯

咲花に來鳴うくひすよひくはいつれの枝をやとりどはする

土滿

山鶯

うめかゝにさそはれ出てみよしのゝ高城の山にうつる鶯

契沖

故郷鶯

あれにけるしかの花園春くれは猶宮木もる鶯のこゑ

全

山家鶯

ふるさとなれし鶯ことしたに歸りやくると松になくらん

枝直

鶯

さほのうちを春しもとへは宮人のむかしのそのゝ鶯の聲

千蔭

鶯

山さとの谷かたつける朝いにはまぐらのしたにうくひすそ鳴

契沖

鶯

やまかけや柴のあみ戸をわけさして初鶯のこゑをこそきけ

蘆庵

山家鶯

山さとも鶯なかぬほどこそわれけさの初ねに春は來にけり

宣長

野鶯

世に出ぬなれや友垣かくれすむ竹のはやまにたるゝうくひす

春滿

野鶯

若なつむあをつゝらこに先いれてきかはやとかもふのへの鶯

長流

野鶯

さどはなれかりもつくさぬ野つかさの萩のふる枝に鶯のこゑ

枝直

野鶯

はるくれはあをむ雪まのはつ草に初ねおくれぬ野への鶯

宣長

野亭鶯

のへちかき家むになれて百千鳥千とりはくれとうくひすの聲

契沖

岡鶯

谷こしにみゆるをかへのうめかゝも遠近ちかきうくひすの聲

全

里鶯

高安のさとのうくひすたかために大和人くとなきてつくらん

全

旅中鶯

かきこもる竹田の里をどひしかは初うくひすのねをそ聞つる

春海

旅中鶯

うくひすの聲のにはひにさそはれて花なき里も春をしるらん

全

旅中鶯

一夜ねてあすもきかはや旅人にやどかすかのゝうくひすの聲

宣長

羈中聞鶯
 海邊鶯
 島鶯
 社頭鶯
 關路鶯
 河邊鶯
 水邊鶯
 閑中鶯
 閑居鶯
 窓鶯
 樹間鶯
 梅間鶯

ふるさと今や鶯いたつらに人くとあきてわれまたすらむ
 あまの子も宿やさためん難波津に梅かえさしてうくひすそ鳴
 さとはあれてなにはるなかの鶯も民の、島のたえぬこゑかな
 たちえさすいかきの梅にとひこえて神のいさめぬ鶯そなく
 みつかきの神か枝に朝日さし鶯きなくはるののとけさ
 こののねのはるのしらへを鶯に猶と、めたるあふさかの關
 うくひすのこゑもかすみをもる春はゆく人とまる逢坂のせき
 さは風毛柳か枝になひくより千鳥にかはるうくひすの聲
 池水のけさよりみゆる浪のあやに聲のあやそふ庭のうくひす
 梅かゝにゐる鶯もさためぬをふみゝるわれそしつけかりける
 しつた巻しつけくもあるか鶯の百さへつりはくりかへせども
 世の人は春のすさひやおはからん我どかたらへ軒のうくひす
 なれてこそ友ともきかめくれ竹にふしとさためよまとの鶯
 梅柳いつれまさるとえやわかぬこつたひくらすうくひすの聲
 かり衣梅にやとせは朝はらけ袖よりいつるうくひすの聲

契沖
 全
 全
 全
 土満
 契沖
 宣長
 契沖
 長流
 契沖
 全
 春海
 契沖
 長流

名所鶯
 森鶯
 鶯鳴梅
 竹鶯
 竹林鶯
 竹間鶯
 竹裡鶯

うめかゝをつはさにしめて朝な夕なこのまたちく、春の鶯
 はるさむきくらまの山のうくひすはたどる、や雪に鳴らむ
 鳴てしもとまらぬ春はすきか枝にこゑもいそのもりの鶯
 はる深き老そのもりの鶯は人もすさめぬねをやなくらむ
 はの、と明る夜つくるうくひすの聲にしらめるその、梅枝
 はるなれやうめさくさとのをちこちにかたらひかはす鶯の聲
 さどなれてまかきの竹に鶯の一よをわかすわけはの、こゑ
 ひまもなきみとりの竹の葉かくれになくねもしけき春の鶯
 吳竹のしけみかおくにすたちつ、谷のどしらぬうくひすの聲
 はる風はけさしもふかぬくれ竹の林にふるふうくひすの聲
 その、竹また笛にともきらぬまにふしにこもれる鶯のこゑ
 朝日さすその、むら竹うちなひきさえた、に來なく鶯
 人とはぬ竹の中道なか、に先うくひすのはつねき、けり
 春さぬとけふつけそむるうくひすの聲もおくあるその、吳竹
 うちなひくその、むら竹長き日にうきふししらぬ鶯の聲

千蔭
 蘆庵
 枝直
 契沖
 春海
 千蔭
 枝直
 宣長
 千蔭
 長流
 契沖
 千蔭
 枝直
 春海
 契沖

柳上鶯

花間鶯

松上鶯

老鶯

暮春鶯

鶯春友

鶯千春友

春情在鶯

春鶯呼客

鶯語漸々稀

鶯はやなきにねくらしめなくんそのかた糸をよるもなくへて
 鳩鳥のあそふいけへの青柳におのれもくゝるはるのうくひす
 さくらさくこのまにいりて雲鳥のあやにかなへる鶯のこゑ
 たつた山櫻にうつるうくひすのいまぬふ笠は雲のきぬかざ
 ふるすにはいまた歸らぬうくひすも木つたふ花の雲にいる也
 うくひすのおのかみどりも松にゐて今一しほの色やまさらむ
 宮のうちにあはれとしへしたくひそときけはむつまじ老の鶯
 中よにあはれなりけり散にける花のあどいふうくひすの聲
 散殘る花にや老をわするらんなほうくひすはものうけもなし
 うくひすの人にをしませぬ聲ならて花まつほとどの友そすくなき
 ちよかけて契たかへぬ友なれやかならずきなく春のうくひす
 あをやきをいとよるてふ鶯のねにのみ春はこゝろひかれつ
 花のもとにさそはれきてそしられける人をはからぬ鶯のねを
 うくひすの聲にひかれて花もなき宿とはしれど人そとひける
 鳴どめぬ花のこすゑは鶯のまれになりゆく聲にこそしれ

長流 契沖 長流 全 契沖 全 千蔭 全 春海 枝直 千蔭 全 眞淵 春海 蘆庵

鶯聲誘引

來到下

鶯有歡聲

鶯有慶音

若菜

若菜知時

若菜多

摘若菜

朝若菜

夕若菜

贈人若菜

かすむ野の花をこそみれ鶯のこてふににたるこそにひかれて
 鶯のはつねそ千代をよはふなるたかきにうつる春をまちえて
 おのか春のもゝよろこひときゝつるもわかぬ千さどの春の鶯
 たつぬれば雪まの若菜七草のたからよりこそえかたかりけれ
 あしたつの雪ふみ分しあどゝめて千代の若菜をけふや摘まし
 つめはかつ千代のためしのうれしさを袂にあまるわか菜也梟
 ゆきまなきかたやたつねんみな人の摘て殘さぬへの若菜は
 かすむのゝこなたかなたに行わかれ友まとはして若なつむ也
 したもえの野への若菜にいそかれてむら消のこるこそ白雲
 うす氷さえわへぬ春の淺澤にをりしりかはの水の深せり
 打群て摘てやせどもへのはみなやかてすゝなの花にならまし
 けささえし垣ねの雪のたまり水野澤にいたる若菜をそつむ
 水さむみあらふ若菜のしつくだにかたみにたまる朝氷かな
 つみたむるををかたみの若菜ゆゑ歸るさくれて野風寒けし
 君をまつ思ひをのみそ摘ぬればかたみにみたぬ若菜也けり

千蔭 春海 春滿 長流 千蔭 長流 全 契沖 全 千蔭 契沖 宣長 春海 千蔭 契沖 全 長流 全 契沖 美樹

雨中若菜

雪中若菜

雪中求若菜

野若菜

原若菜

磯若菜

岡若菜

つめとなはつきせぬものは野へにおふる若など君か齡也けり
 はつ春のけふの若なをはしめにてうれしきこの敷をつまなん
 春雨にうるふわかかなをつみければ歸るさまにも色そまされる
 ふめはさえきゆればつみて春のの雪も若なも残らさうけり
 つむとのかたみの若菜それをさへをしとや雪の降かくすらん
 かきわけてみれども雪のふかせりは心わてにそ摘へかりける
 これそこのいく田のをのいく薬老さへしらぬ若なつみてむ
 末とはき春のわかかなかそふれはつむへき千代を限しらぬ
 鶯のこゑせぬかたもつみためす陰野のわかかなこほるゆきまに
 若菜のみ今もゆるらん春日の飛ひはたえてよをふれども
 若なおふるかたをそよとも告やらすまたやけ原の野への下荻
 雪のみそ分る袖にもふりつみて若なまれなるかすかの原
 春の日のよろきの磯な行末のわかめをかけてあまやつむらん
 あはし山霞むはるへになりにつけり今そしるはのいそな摘らん
 かたをかのわしたの原のくるまて雪ますくなき若なをそ摘

筑波子 春海 全 蘆庵 春海 長流 蘆庵 契冲 千蔭 長流 宣長 契冲 土満 契冲

澤若菜

園若菜

水邊若菜

田若菜

名所若菜

故郷若菜

多春摘若菜

春くればわかになつむとて里の子かならしの岡は雪ものこらす
 千年へて摘どもわかしたつのおさる澤へにおふる若菜は
 みかりせし野澤に出てはし鷹のすなつみつけふも暮しつ
 たつのゐの澤邊の根芹けふ摘ていとふ干とせはしるくも有哉
 園のうちの草にましりてもえにしをけふ摘みれば若な也けり
 野へに九に人はいつるをわし垣のま近き園にわかになつみてん
 春風にのさはの氷とけぬらんさとのたをやめ根せりつむみゆ
 さゝら浪よする小河のみきはなる芹はつむこそ洗ふなりけれ
 賤のをかへす山田の澤へにはわかになつめとやめをさそふらん
 筑波ねの雪けにぬる乙女子かすそはのためは若なつまはや
 さの海は濱もをけふのわかなどやかたみの浦にあまもつむらん
 春日の雪まのわかになつむ時とみどりの袖もよしそありける
 みつししみつし若な若かへりいくらの年を老すも有らん
 春されはさえもさえずも白雪のふりにし里にわかになつみてん
 武藏野にあまたの春を摘る身そわかかなそことに思ふとちある

宣長 春満 枝直 契冲 全 全 枝直 契冲 長流 契冲 長流 直淵 土満 全 千蔭

武藏野若菜

寄若菜祝

寄若菜迷懷

春雪

けふとにいはいはふわかかなの若かへりあまたの春をつむそ嬉しき
 初若なつみつゝ君をいはふなるともをひろきむさしの原
 けふを祝ふやまと言葉にめつらしくつみもませたる唐なつな哉
 年とにえるのゝに出て摘つればわかかなやおいの敷をしるらん
 うくひすの聲する竹ををらしとて薄くそかゝるはるのあわ雪
 梅にちり柳か枝にみだれつゝはるこそ雪はあはれなりけれ
 うめたにもさかりまたしみうたかへと櫻とちりて泡雪そふる
 風さえてなほうつみ火のあたりまで春としもなく雪そ吹いる
 さは姫の霞かくれの山まゆもよそほひうすきえるのあわゆき
 みるからちにはかなく消る沫雪はもゆる春野にふれは也けり
 ふるとして名のみなりけりくるまちてさくや木との花の白雪
 袖ふれをかをりぬへくもみゆる哉春たつそのゝ木とのしら雪
 みよしのゝ花の盛もかゝるらん春ふる雪のゆきてみねとも
 つくこねのこそ白雪きえそめて松のみどりそやかに春なる
 咲花とねもひもわへす梢よりもろくもおつるはるのゆきかな

春海 千蔭 長流 蘆庵 契沖 千蔭 長流 蘆庵 契沖 春海 枝直 千蔭 全

山春雪
 野春雪
 木春雪
 春雪似花

雪消松緑
 春雪欲消

殘雪

わすれては花かどそおもふ山のはに春も日をへて殘るしら雪
 松かけにきえんともせぬふる年の雪もときはの物とこそみれ
 花とちり月となかめし夕くれのわすれかたみやこそその白雪
 めつらしとみそめしはどになりにけり遠山のはにのこる白雪
 里人の若なたつねとふみわけし跡もさたかにのこるしらゆき
 草も木も下もぬわたる春のゝにつれなく雪のきえんともせず
 春もまたあさのゝ雪のむら消にあさるきゝすの跡もみえけり
 ふみどけし御符の跡もさながらにのこるかたのゝこそその白雪
 いさゝめに春の光をかたわけてをのゝかやねに雪そのこれる
 めもえるの野のへにきゆるはとみえて草のはつかに殘る白雪
 春さむみこほりもどけぬ谷風にのこれる雪や木とのつ花
 枝たわにのこりし雪のとけそめて雨にもまさる松のした露
 しろたへに殘るみ雪を春の日のひかりにみかく玉のよこ山
 よしの山空こそかすめ雪はまた春のきにける跡たにもなし
 花さかえともにあはれとめてなまし猶さえのこるみねの白雪

春満 千蔭 直枝 眞淵 枝直 土満 千蔭 宣長 枝直 土満 宣長 枝直 千蔭 宣長 枝直

巖殘雪
 島殘雪
 樹陰殘雪
 殘雪似花
 山家殘雪
 故鄉殘雪
 殘雪半融梅
 二月雪落衣
 餘寒
 餘寒水
 餘寒霜
 餘寒雪
 餘寒月

かひかねや霞吹とくはる風にのこれる雪そさやにみえける
 山風のいとほの中に吹入てかくせる雪もはるはきえつゝ
 春をあさみよるとはみえて河島にかへらぬ浪やのこるしら雪
 はつせめかつくるゆふ花ちる斗ひはらかもとのこる雪かな
 いさゝめに梢の花のちるはかり外山のかひにのこるゆきかな
 花もやゝにははんと思ふ山さどにねはつかなくものこる雪哉
 かきたえてふるさと人のとはさりし恨をのこすこそしら雪
 雪となほむすはゝれたるかたえより紐とく梅のめつらしき哉
 はるもいま中空にちるしら雪をはらへは袖にのこる梅かゝ
 鶯の涙やさらにこほるらん花みぬえたにあられちるなり
 浪の花さそひかはなる柳にもこほりつれなきはるの河水
 春さむみのへのすみれは咲もせて霜のみひとり花とみゆらん
 雪もまたふるからをのゝもとかしこもとの寒さにかへる春哉
 ふけゆけは猶影さむし春の月かすむとみしやゆきけなりけん
 うすくもり雪けにさえて霞にはあらぬおほるの春のよの月

千 契
 千 契
 春 契
 千 契
 全 契
 千 契
 枝 契
 宣 契
 宣 契
 宣 契

餘寒風
 山餘寒
 二月餘寒

梅
 梅度年花
 栽梅
 栽梅待鶯

はるきてもふるさとさむき飛鳥風冬に吹かへすたをやめの袖
 雪もまたさそひきぬへし雲みたれ空さえかへるるの山かせ
 春きてはさむさをこひぬ炭焼もゝどのこゝろのをのゝ山風
 かりかねのかへるつはさを又やもる曉さむきささきさのしも
 二月の空さえかへるやまかせは冬にまされるこゝちこそすれ
 などてかく花おそけにもみえぬらんはるひと月はさても過しを
 ともすれは花にまかひてちる雪にうめかゝさむき二月の空
 梅の花けふみる雪のおもかけやあすのさくらの雲におほえん
 なつかしき花のゑまひをみし夢のおもかけうかふ梅のした蔭
 うめかゝのわつかにかをるわしたより花に心を思ひそめつも
 日のめくる南のえたの霜とけにぬれてはゝゑむうめのはつ花
 空たきもたくひにすれと咲梅の立枝の香にはおよふともなし
 うめならてなれの草木か玉くしけ二とせかけて咲にはふへき
 梅をこそやしにうめあたりよりをちの風さへ匂ふをかりに
 うゑてこのはるくる梅の初花に初音たくへよそのうらくひす

契 冲
 春 満
 契 冲
 全 淵
 真 淵
 千 蔭
 蘆 庵
 長 流
 春 海
 土 満
 蘆 庵
 春 満
 蘆 庵
 契 冲
 春 満

若木梅

かさすよりかしらの雪のかくろへは老もわか木の梅の花かさ
長流

梅始開

梅かゝそけさこそ風に匂ひくれきのふは雪にわさむかれけり
千蔭

露暖梅開

雪さえしなこりの露やぬるむらん日影にほふうめのはつはな
契沖

梅開露暖

梅かえの花のゑまひそひらくなる春のめくみの露かゝりつゝ
全

春風先發
苑中梅

心おそき花の木とにうめかゝの春をつたふるそのゝわさ風
全

梅盛

心と木に吹ともわかぬ春風をけさそみそのゝうめのはつ花
蘆庵

梅花春久

はつせ風ふく日ふかぬ日梅花にはふさかりは時なかりけり
契沖

雪中梅

われも又わかえつゝみむはるとにそのふの梅のさかん限りと
千蔭

梅似雪

ねたしとて花をは雪のかこふともいかゝはすへき匂ふうめかゝ
蘆庵

雨中梅

おのつから千本のうめをかきねにてかをれる雪にこもる宿哉
春海

霞中梅

うめの花このした風のさむけれと散もちらぬも雪かどそみる
契沖

梅風

はるさめにぬれては雪にわくへきを散そふ梅も枝にさえ行
全

さは姫の霞の袖につゝみてもあまうてかをるうめをした風
枝直

うめかえをればふ霞の袖たにもまよはぬほどの風をかほれる
千蔭

梅薫風

花の香に霞もにはふゆふへかなわたるか風のうめの立枝を
宣長

依風知梅

春風はうれしかりけり木のもどに梅かゝならぬ袖やたれなる
春海

梅薫夜風

はる風をひたすら花にうきものと梅香しらてかこちける哉
宣長

梅花風靜

きのふまで雪のふるえにふゝめりしうめ咲たりと風そしらす
枝直

梅香

月にみてまつやといつこ春風のこてふにゝたるよはの梅か香
宣長

梅花久芳

はるかせはふきにけらしな薄機の霞のそてを毛るゝうめかゝ
千蔭

梅花遠薫

青柳のかたよるかたや薫るらんふくとしもなきうめをした風
春海

露なからかをれるうめのそつ花に心おかれぬ朝かせそふく
枝直

なにはめかやどのあし火をたきものゝ烟になして匂ふ梅かゝ
長流

咲梅のたちえにならふかやはある春にいゝろの花はめてしも
春満

ふるどしの雪のうちより菅のねのななき日かけてかをる梅哉
千蔭

我のみや哀れとはみん梅かゝのをちかた人をさそはさりせば
枝直

玉しまや河上とはさうめかゝもなかれてにはふさどのはる風
宣長

うめかをる霞のおくをどめゆけは猶木のもととは香けかりけり
千蔭

わか宿もなほ過る風のうめかゝに垣ねたかへて人やどかめむ
春満

簷梅薰風	軒近き松にこゑせぬ春風も袖にしられてにはふらめかゝ	枝直
梅香何方	風ならてとはれぬ閨の手枕にいつこのうめのかゝかよふらん	たみ子
梅花夜薫	咲花の陰にやとるとみし夢をうつゝにかへすまどのうめかゝ	枝直
梅薫袖	古さとのふる木のうめの花の香をま袖にしめて翁さひせん	千蔭
梅近衣香	みぬ人のためとてをれる梅なれど花のにはひと袖にこそしめ	蘆庵
梅香近袖	梅の花にはひかふかくしみにけりたちよる人の袖をあまたに	千蔭
梅香留袖	紅のうめのはつ花さきしより香さへふかくそ袖にしみける	全
梅花染衣	うめかゝは人をもわかす日をかさね立よる袖そふかくしみける	蘆庵
梅薫枕	たちよりてたゝ一枝をいりしよりなこりいくかの袖の梅かゝ	宣長
梅香入閨	身にさむく風は今しもふかなくに衣にとほりにはふらめかゝ	契沖
梅花夜芳	かよひ來てわかぬ覺をやまちつらん枕にのこるよはの梅かゝ	宣長
夜思梅	こるのよの月は霞にふけなからぬやのひまもる軒の梅か香	契沖
	風たえて月も朧のねやの戸にそれかとはかりにはふ梅かゝ	宣長
	月よゝし梅かゝさよしいさゝらこのしたかけに枕からまし	春海
	梅香を吹くる風のなかりせは春のよすからものはおもはし	土満

夜梅	鶯のねやのものともさたまらすわかしかたへのよるのうめかゝ	長流
閨夜梅	はる風にうめかをるよは人またぬねやの板戸もさゝれさりけり	千蔭
曉梅	はるの夜のかすめる月に風たえて香さへおほろの庭のうめかゝ	宣長
曙梅	くらふ山閨のうつゝもさたかなるしるへなしやはよはの梅かゝ	長流
朝梅	あかさりしやみの匂ひも色みえてはのゝゝあくるまとの梅かえ	宣長
夕梅	朝かすみたちいてゝみれば梅咲て在明の月にはるかせるふく	枝直
月前梅	匂くるうめのありかもみえそめてはる風しらむわけはのゝ空	宣長
	朝日かけさすやのきはのうめ咲てたるひのしつく先かをるなり	千蔭
	れのつから花の光にくれかねて梅のはやしはゆふやみもなし	春海
	花の色はたそかれときの垣ね道ゆき過かてにははふらめか香	蘆庵
	うめの花かをるあたりを過かてに空行月もかけとゝむらん	千蔭
	かけ毛にはひ花も光をそへてけり月と梅とはおもふとちなる	春海
	枕ふく風のたえまかかすむよの月よりうすきにはのうめか香	宣長
月照梅花	梅かゝとあやなきやみもあるものを月のかけそふよはそとなる	千蔭
社頭梅花	はるされと神の御室の御名におふわかきの梅そ世にかをりける	全

古宮梅
古宅梅花
閑庭梅
故郷梅
遠村梅
山居梅
山家梅花
山家皆梅花
簾外梅
梅香當簾
梅香薰簾

南より先さきそめて日かすふる北野のうめそさかりなりける 全
いにしへの高津のみや木此ころはなにはるなかに匂ふうめかゝ 長流
むすひたきてわかかたすまぬいはりにはうめをあるしと鶯の鳴 契沖
ささぬやと人もこそとへ梅かゝをかきねの外にかせささそひそ 蘆庵
すみすて、軒はも庭もあれ行にはるやむかしとにはふうめかゝ 春満
難波津や千代ふるさとの春をへてみやひわすれぬ梅かゝそする 枝直
はつせのやさとのうなるに宿とへとかかすめる梅の立枝をそさす 契沖
うめの花さきにけらしな軒はよりあそたつ雲もかに、はふまで 千蔭
山さとのうめの名たてのさひしさを都につてよのきのはるかせ 宣長
咲しよりかすみこめつ、うめかゝをよそにもらさぬはるの山里 千蔭
みやこにてかすみとみしは山里をつゝめる梅にはひなりけり 全
山さどはいましものこる雪かどとへは木との花にそありける 蘆庵
玉たれに色もすきまの梅の花香はさなからの軒のはるかせ 宣長
どはるやとをすのかをりにはかられて咲初し梅の花をこそしれ 千蔭
うめの花さくや軒はのいよすたれいく春かけてかせかをるらん 全

簷端梅
庭梅
窓梅
窓前梅
垣梅
籬梅
園梅
里梅
隣梅
旅宿梅
野宿梅
行路梅

朝戸出の袖こそにはへのきはよきはるやたちえのうめのはつ花 宣長
たか袖をおどろかすらんはともなき庭のまかきにあまる梅かゝ 枝直
うちなひく世は春なれや朝日かけにはへるまどにははふ梅かゝ 全
ふみ、むとむかふ南の窓のうちにはひもどく梅もかに匂ひけり 千蔭
うめの花さけるかきねのゆかりとてにははぬくさもにはふ春風 宣長
しめゆひしまかきのもとのうめの花たれにゆるしの色に咲らん 千蔭
咲みちてしめの外までうめその、いはるかせあまるよもの花のか 宣長
うめかゝに夢の名残やと、むらんねさめのさどのはるの明はの 春海
さくやこの花にそしのふ里の名はなにこのこのむかしかたりに 春満
中垣のこなたもにはふうめの花われさへはるゑあるしかはなる 春海
一もどのうめをかたみに友としてならふる軒のむつまじきかな 全
くさ枕いもこひしらにかたしきの袖にはかなくかよふうめかゝ 蒿蹊
袖にふけみやこの夢も花の香にかへてひと夜はうめをした風 宣長
家人はうき旅としもれもふらんうめさく野へにまくらゆふよも 千蔭
わか袖にうめかゝいたくかをる也このした陰にたちとまれどか 春郷

梅花處々 山里は梅さく宿のあまたあればあるしさためすとふへかりけり 春海
 野 梅 さしてゆくかたもなけれどかにめて、梅咲のへは近ききにけり 蘆庵
 松間梅 日にそひて風は松にもおとせぬをそけしくなりぬうめの匂ひは 契沖
 名所梅 もえそむる野はまた陰の浅ければたうめかゝのふかくさの里 長流
 梅花移水 玉しまや梅さくころは中空をにはひなかるゝはるのかはかせ 宣長
 しろたへもこそめ底にかけみえてさをさしわふるはるの川水 千蔭
 飛鳥井はうつろふ花のかけもよし色もかもよきうめのさかりに 宣長
 とけにけりこほりなかるゝ河のへにおくれぬ梅の花のしたひも 全
 うち出るみ谷の浪にわらそひてかはふや梅のはるのはつはな 千蔭
 なに波かたまはにこさいる船人のいとはぬほどのうめのした風 契沖
 難波人しはやさきぬもうめかゝの風にまちかきあしの袖かき 全
 舟よする衣手いたくかをるらんさくやうめ津のはるのかは風 春海
 春たちて匂へる花のかはみればわれさへともにはゝ急まれけり 筑波子
 年のにはにめつらしきかなおもふとち梅をかさゝぬ春しなければ 千蔭
 梅がゝを松の葉とにとゝめては千代もかをらん軒のはる風 全

挿頭梅 その香さへ日をへてあせぬ梅の花うへも千とせのかさし也けり 全
 折 梅 梅花をればこはれて白妙のそてよりふれるはるのあわ雪 契沖
 朝またきたをるたもとに露おちてにはひにぬるゝ梅の木のもゝ 宣長
 うつろへる花の色香をみてもしれとふやとまちし心なかさゝを 千蔭
 はるかせに散くる梅の盃にうかへるとに酒はのまなん 美樹
 契りおきて千代を十かへりこのもとにきつゝなれなん梅の花笠 千蔭
 うめの花おほろ月夜にはふなり常にもかもなこのころにして 契沖
 梅の花わかぬ心にまかせよとどくもおそくもさきにはふらん 千蔭
 うめの花ちるへくなりぬ心してえたにうつろへはるのうくひす 枝直
 色も香もどりならへたるうめの花咲こそるのもなか也けれ 真淵
 つはめ来て鴈しかへれそかた待しさくらに梅もかはりてそちる 契沖
 鶯もはるのなかめをいかにせん笠にぬふてふ花しちれゝと 千蔭
 問人の笛もきこえて垣のうちらうめちるかせのおもしろき哉 真淵
 はるさめにぬれてちる梅苔の上のちりとなりては風もはらはす 契沖
 落梅風 鶯のやととどはうめの花さそひしかせやいかゝこたへん 同

水邊落梅

さゝれこそ浪もかをれり咲梅のわかつて散うく庭のやり水

枝直

梅浮水

はるたちてみどりにかへる池水にこそめのうめの陰そにはへる

千蔭

梅花落琴上

花の香は波になかれてゆく水に影をどゝむるさしの梅かえ

春海

落梅浮水

たをやめのゆのてもあやにかをるめり琴ちに梅の散かゝりつゝ

千蔭

紅梅

水上のさどやいつこそたつねみんうめかゝおくるはるのかは波

春海

紅梅

ひもどかぬ花さへあるにいつのまにそめて色こそ梅のくれなる

春満

紅梅盛

たきものゝかをりおはゆる梅の花うへもゆふ日に色こかれけり

春海

雨中紅梅

くれなるのこそめのうめは春雨にぬれての後そいろまさりける

枝直

梅紅白

はる雨にひもどく梅のくれなるもふりいてゝこそ色まさりけれ

春海

紅梅白梅

梅の花あさしとやらん白妙もこそめもなへてあはれとおもはゝ

千蔭

紅梅白梅

たをやめかかさぬる袖とみるはかり色わくうめのなつかしき哉

春海

風搖白梅

にはひかはへたてぬ梅のいかなれば色のみ花のけちめみすらむ

同

寄梅懷舊

さえかへる風のたちえのともすりに花ふさなから梅やちらまし

蘆庵

柳

梅の花たゝひとへにてあわ雪のふりにしよにもにたるいろかな

契沖

柳

あをやきの千筋のいとをうちかはへて長き春日をかりや出せる

千蔭

柳辨春色
柳糸縁新

青柳のいとへたてゝもみつる哉よりきてはなほまさるみどりを
よりかけし柳のいとそみどりなるかすみの衣たちそめてより
ふくとなき風になひきてくる春のゝとけさみする青柳のいと
さしやなきふる葉なからに今年よりはるしりそむる淺みどり哉
あさみどりもゆるやなきにさそはれて下行水もかつぬるむらん
そめかくる柳のいとや人心えるにひかるゝとしめなるらむ
うちたるゝ柳のいと淺みどりはるくるとにめつらしきかな
あら玉のはるのやなきのあさみどりいまくり返し幾世経ぬらん
みしま江の玉江の柳風ふけははるさへあしのそなそちりける
よひの雨のなこりかすめる柳原ほのかにみするはるの色かな
春の日のゆふかゝ柳なひくめりわりとやこゝに風のやどれる
川そひのさどのかさちのふるやなきかけみる水にいくはるの行
かけみるもいま幾はるとくちのこるあはれもふかさかは柳哉
はるさめのけふそめかくる青柳のしづくや野への色どなるらん
はるさめは有るともみえず柳原あるかなきかにかけかすみつゝ

全 千蔭

柳花

契沖

朝柳

春海

夕柳

契沖

柳經年

全

古柳

宣長

雨中柳

土満

春海

柳似烟

柳に雪のか
られるを

柳 露

霞間柳

柳先花緑

柳絲洗浪

柳 風

青柳風靜

柳飛風

柳絲隨風

春雨にぬれしやなきはをとめこかうちたれ髪をゆするとそみる 千蔭
 はる風のかすみふきとく河つらにはれぬけふりや柳なるらむ 春海
 どけやすき雪にはありともあわにたにむすひもどめよ青柳の糸 同
 わけゆけはこはれぬ露も枝なからたもどにかゝる青やきのかけ 宣長
 ちきりあらそやなきにかのか玉の緒も長くどむすへはるの朝露 同
 ふくとなき風にまかす青柳をかすみなからにかたよりにけり 春海
 あさみどりいとうちはへてひもどかぬ花をさそふその、青柳 千蔭
 うら／＼と枝うちけふるやなきはら花にさきたつはるの色かな 全
 河内女の手そめのいとやあらふらんゆふなみかゝるさしの青柳 全
 春されはむつたのよとの柳原みどりにみゆるかせのいろかな 全
 吾門の青柳のいとくる人をまねくはかりの風はふくらん 全
 あさみどりなひくやなきの色にみよのとけき春のかせの姿は 自寛
 あをやきにぬくやしら露玉のをのたまゆら／＼にたる風そふく 土満
 花ならて吹よるもよき春風は何かやなきのいとひしもせむ 宣長
 みさをなきものとやいとん吹わたる風をすかたになひく柳は 蒿蔭

閑居柳

門 柳

門柳春久

柳垂絲

山家柳

故郷柳

水郷柳

水邊柳

いとよわき心つからやはる風のふくかたよりになひくあをやき 春満
 春くれは人そとひけるかくれかのかどの柳のいとほしきまて 蘆庵
 たか門も五本ならすうゑ添てみいれもなかきあをやきのかけ 春満
 わかかどのひともと柳いとたれてくるやど人をまたすしもなし 枝直
 春くれはさせることなき賤かやのかどの柳のいともめつらし 蘆庵
 かどにたつやなきのいとをくり返しへぬへき春の限しらすも 枝直
 うちなひく柳のいとを春風にむすふもどくもまかせてそみる 全
 はるされはよもきか門のさし柳さしてとひくるひともありけり 千蔭
 柳のみゝかきにおひて朝髪を風にけつりし宮ひともし 契沖
 故郷のたえしすたれを風ふけはあむともみゆるあをやきのいと 全
 六田河かせものどかにゆく水のみどりによどむやなきかけかな 眞淵
 かけうつす浪もにはひて青柳のいとよりそふる河つらのごと 春海
 たる風は人にしらしいなむしろ河そひやなきなひかさりせは 枝直
 枝ながら露もみたれてうきしつむ玉島河のあをやきのかけ 宣長
 青柳の下枝なみこす河つらは花田のいとをあらふとそみる 春海

河柳	袖ひちてむすひやせまし水底にうちはへみゆる青柳の絲 ひたすえはなひくもかのかまゝならず河そひ柳浪にせかれて うちいつる涙の花よりよしの川はやく春くるわをやさのいと	蒼生子 春海 宣長
河上柳	露しけし淀の川舟さすさをのしつくもかゝるさしの青柳 ゆくかはのそこの玉藻とみるはかりきし手の柳かけそうつろふ 老ぬれとやなきの髪はみどりにて水の鏡のかけもうらみす	全 春海 枝直
河邊古柳	青柳のうつろふかはをわたりなと花田のおひやなかはたえなん はるをあさみ水草もかひぬ池水になひく玉藻や青柳のかけ	千蔭 枝直
河岸柳	風わたる池のこほりもとけて今なみよりむすふあをやさのかけ 山鳥のそのしたりをのます鏡池のやなきのかけにみえつゝ あをやさのうちたれ髪をけつるには下行水やかゝみなるらん	春滿 長流 春海
池邊柳	青柳はいとたれにけり藻かり人その舟ちゝめはるの河つら 谷河やかけさしおほふ青柳のしつえにむせふ水のおどかな	全 千蔭
垂柳臨池	水引のいとかどみしは浪あらふさしの柳のしつえなりけり 落たさちなかるゝ河しなかりせとよりてみてまし青柳のいと	春海 有庸
垂柳藏水		
谷柳		
柳拂池水		
柳隔水		

柳絲映水	六田川かはそひやなきうちなひきかけそふ水もみどりなりけり 川かせになひく霞の絶まよりかつみえそむるさしのあをやさ	土滿 蘆庵
岸柳	わたしもりくれぬといそく川さしにのどかにひとりたてる柳か くさかえのいりえのやなきうちなひき流れてきもるはるの山風	契沖 全
江柳	青柳のいとをとなりみるやとはおもひかけすそ人にとはるゝ はる風はふきもふかすも誰ために垣つのやなきうちなひくらむ	蘆庵 土滿
隣柳	はる風のあわをによれる柳もてとひくる人をとめんとそおもふ 道のへになひく柳をむちとみてあゆみを駒のすゝめぬる哉	真淵 契沖
墻柳留客	そめかけてみやこの大路花はまたさかぬ錦をいそくあをやさ はるかぜの柳のいとをしらふれはゆきゝのひと袖かへすめり	宣長 蒼生子
行路柳	うめかえをさをちらはるかに送りすてゝ柳にかへるはるのかえ風 鶯のこつたふ枝のたよりよくいとをはへたるたまのをやなき	全 長流
遠柳	宮人のかつらにすてふ青柳のいとのみどりのめつらしきかな ちる花はしつ心なしのどのなるはるにかなふはやなきなりけり	千蔭 契沖
柳糸	めかれせぬ柳のいとにぬくものこそてよりかつる玉にそ有ける	たみ子
挿頭柳		
翫柳		
寄柳述懷		

初午稻荷詣

おもふとならさらめやも諸人のけふうちたよくみつのかみかき 千 蔭
 いなり山杉のもどつ葉をりかさしゆふこえゆくはみやこ人かも 春 海
 みねとほくのほりもゆくか稻荷坂ぬさどるそてもかすむ斗に 全
 はつうまのけふにあひてそいなり山花なき杉も人にをらるゝ 嵩 蹊
 いなり山道にうりかふはに鈴のふりはへて行人そおはかる 自 寛
 藤なみの花のしなひの長き世にためしかえらぬかみまつりかな 春 海
 舞人のたちまふそてもかすむ也三笠の山のやまかけにして 全
 春雨のふるからをのもきのふけふわかくさ山に色そかよへる 契 冲
 木のめかはわかぬめくみのはるさめのもりの下にもあをむ若草 宣 長
 雪はまたきえもはてぬに野へはゝや薄みどりなるるのわか草 蘆 庵
 朝つく日かけさすかたの雪まよりやゝあをみゆくそのゝ若草 千 蔭
 春さめは七日ふりけりおしなへてにひ草かちのへのみゆるは 春 海
 どころからうへもはるひと春めきて若草あをむ春日野の原 宣 長
 雪きえぬはとこそあらめ春の色をえや忍ふの岡の若草 全
 おひさきもやゝ此ころそしられる花さく草とあらぬむくらと 枝 直

春草漸青 蘆 庵
 雨中春草 枝 直
 雨中野草 全
 垣根春草 長 流
 水邊春草 契 冲
 故郷春草 千 蔭
 行路春草 宣 長
 野經春草 千 蔭
 磯春草打 枝 直
 岸春草 春 海
 野草綠短 千 蔭
 泉温草色春 枝 直
 蕨 全
 おもふ人住とはなしにさわらひのをりなつかしきみやまへの里 春 海
 袖つれてあそふはるのゝ手すさひにをりあはれなるはつ蕨哉 春 海
 伊豫の湯にあらぬ泉もぬるむよりひたりみきにも草の毛ゆらん 全
 伊豫の湯にあらぬ泉もぬるむよりひたりみきにも草の毛ゆらん 全
 袖つれてあそふはるのゝ手すさひにをりあはれなるはつ蕨哉 春 海
 おもふ人住とはなしにさわらひのをりなつかしきみやまへの里 長 流

峯 野 岡 山 谷 樵路 折蕨贈人 春月

かけろふは空にきゆるを春雨にもえまされるへのさわらひ
いさけふはをきのやけ原かきわけて手折てをこんはるの早蕨
都人とはすははるもつれくとひとりやをらんみねのさわらひ
むさしのくさのは山もはるはまたふもとのちりの下わらひ哉
早蕨もねはふよこのゝ紫にさくやすみれのゆかりにぞつむ
足引の山さくらとを立出てをかへのわらひけふはをらまし
鶯にさまたけられてけふも又をかのさわらひをりそのこせる
絶やらぬゆきゝの岡のはつわらひもえあへぬまに人もこそつめ
あしひきの山のさわらひもえさらは朝露わけし袖はかわかし
山道のたをりのわらひつかねをもよそにもとめぬ青つゝらかな
かきわらひもゆるはかりはをりしれと春の光もさゝぬ谷の戸
あかすとやわらひあまたに折そへて眞柴すくなきはるの山人
たきゝこるこのもかのも初わらひをりゝ絶るやまたつの音
山守にしのひてをりし下わらひしたにもゆるをそれとたにみよ
霜とみは花に心のおかれなん霞むもうれしはるのよのつき

契冲 真淵 蘆庵 長流 契冲 古道 枝直 春海 契冲 宣長 春滿 千蔭 たみ子 春海

曉更 夕 春 曉 春 月 幽 中 隔 月

はるのよはかすむを月のならひにて眺むる人もくもるとはみす
くれふかく霞こめたる花の色もはのゝみえてにはふ月かけ
空の海や霞のみをゝゆく船のはのかに見ゆるはるのよの月
久かたの月のかつらのこのめまてけふる時とやおほなるらむ
天の河ゆきけの水もにこらしをいかて瀧に月のみゆらむ
ゆふひはりしはふにおちて聲やめは山よりのはる春の夜の月
あかつきのたかならはしに入おたの月も霞の袖おほふらん
あけゆくや霞にしらむ山みえてはのゝこのるはるのよの月
鶯もうめもよほす櫺の戸に月はいそかぬありわけのかけ
しらみゆく外山の花のひかりよりおほつかなしや有明の月
はのかにもあまるはうれし春のよのふかき霞のそての月影
さしくたす舟は浪路に跡たえて水上かすむ春のよの月
はるのよはひかりを花とちらさねと霞や月のにはひなるらん
春の夜のかすめる月はらすきぬをかけしくしけの鏡とやみん
かすむよの月にはまはにむかはれて秋みしよりもむつましき哉

契冲 蘆庵 宣長 千蔭 春海 千蔭 春滿 春海 枝直 千蔭 全

山 春 月

はるなれや花の木のまをれ出るかけさへにはふ山のはの月
ま木たてるあら山中もかすむよの月にそはるの色はみえける

春 満

海 邊 春 月

玉つしまうすき霞の衣よりひかりそどはる春の夜の月

千 蔭

浦 春 月

かいらくのならひもそひてかすむらん年をつもりの浦の月影
すくもたく烟もたてすかすむよの月やあはれとみつのうら人

契 沖

磯 春 月

かすむよはるしまか磯の浪のうへにうつすともなき月のかけ哉
まゝの江や玉藻かりけんおもかけもほのかにうかふ春のよの月

契 沖

江 春 月

そことなく夕しほみちてかすむえの春のみるめは月にこそあれ
住の江やはそえの浪のかすむよは有かなさかに月そやとれる

千 蔭

河 春 月

すみた河川おとすみて春のよの月は霞の空にふけゆく
とね川のうへ行水のよとゞもににこるはかりのはるの月かけ

古 道

湖 春 月

はるのよも名にたつおとは清麗や霞あやなき浪の月かけ
すはの海や氷はどけて春のよはかすみのうへをわたる月影

宣 長

關 春 月

心せよ霞もふかきはるのよは月たにもらぬはまの關もり
草まくらみやこおもへはこれやらぬ心にゝたるはるの夜の月

枝 直

旅 春 月

故郷春月

ふるさとの板ゐの水にうつろふもおはつかなしや春のよの月
ふるさとのしかの花そのわれにけり月や昔の春をしるらむ

千 蔭

旅海春月

かすめたゝ浪のうさねのよはの月春とみるめもなくさまはこそ
うすはたのきぬもてつゝむ玉しまやかすむ河瀬の春の月かけ

春 満

水郷春月

幾とせのはるをふるやの板ひさしかすむとすれと月そもりくる
いこま山霞はれせて秋しのやさどの名しのふはるのよの月

春 海

幽棲春月

かすむよの月にも老をたどる哉われのみはれぬなかめ也やと
去年よりもかすみそひつゝはるとにわかよのふけをみする月影

宣 長

名所春月

みしよにはにるへくもあらぬ春なから月の哀をかはらさうける
上津瀬は花にへたてゝ入月のなこりかすめるはるのかはつら

春 海

月入花難暗

あらし山花よりおくに月は入るとなせの水に香のみのこれり
いくちゝのはるをふるえの水のおもに月と花とのかけは老せし

千 蔭

春江花月夜

○ 春 部 下

春 曙

花鳥の色ねをこめていひしらぬ春のあはれはかすむあけはの

春 満

春曙雲
春曙鴈
春山曙

よこ雲の花をわかる、曙にはるのあはれはつきぬなりけり
しらみゆくをのへの櫻色みえてかた山くらきはるのわけはの
咲やらぬ花をまたし明はの、なかめなからに春をつくさは
露の身を常にもかなとおもふまで心そとまるはるの明はの
みねの松枝にわかる、よこ雲の千年もか、れはるのわけはの
ゆく鴈もわかれかたみやねに鳴てかへりみすらんはるの曙
なくさまぬ秋な、らひそ月かすむ姨捨山のはるの明はの
櫻咲外山はしらむ春のよををのへのこす有明の月

千 春 枝 蘆 契 蘆 契
蔭 海 直 庵 冲 庵 冲

山家春曙
山居春曙
幽栖春曙
閑中春曙
水郷春曙

はるなれや雪のなかめを引かへてかすみこめたる明はの、空
はれやらぬ雲も霞も花の色にはひておくるはるの山さと
たれかしるふもとのさとにさく花の雲よりうへの春の明はの
なからへてすみやわふるとみん人にみせはやかすむ窓の曙
おのつからよのまの花の露落てしこふにかをる春の明はの
散つもる花にやまたきしらむらんそらはぬ庭のはるの明はの
青柳の下かけかすむ六田川月もよとめるはるのわけはの

全 春 千 枝 全 千 春 宣 契
蔭 海 蔭 直 蔭 蔭 海 長 冲

江上春曙
海邊春曙
浦春曙
河春曙
名所春曙
春曙眺望
春 雨
朝 雨
晚 雨

下にこるとねの川どの明はのはかすめる空のうつるなりけり
難波かたかすむ入江のみをつくしたてるやいつこはるの明はの
わたの原や、明そめて磯山の花と浪どのいろそわかる、
いつはわれどはるのわけはのみし人や浦を霞のなにはたてけん
よをこめてみを引のはる舟のはの霞にしらむどねの河つら
はの、くと明ゆく空も紫に、はふやはるのむさしの、原
またやみん一夜たひねの曙に霞しきつの浦のわけはの
よこ雲のうす紫にわかる、やすみれさく野のしの、めの空
はるさめのあやおる池之時わかぬ水のみどりもそふかどそみる
かのをかのをかやかりふく軒にはいと、おとなきとるの雨哉
いたつらにぬれてしほる、花鳥の色ねもをしき春雨のそら
さかぬまはめくみし花を春雨のいかてうつるふ色になすらん
くもりひのめにこそみえぬ春雨のふるか朝けのかせのつゆけき
ふる年もしらてねしよの春の雨を明てみるこそのとけかりけれ
ゆふつゝの光をかす霞よりやかてをさ、にはるさめそふる

千 枝 千 宣 全 全 全 千 千 蘆 契 蘆 契
蔭 直 蔭 蔭 長 蔭 蔭 蔭 蔭 蔭 蔭 蔭 蔭

霞中春雨
夜春雨
春雨夜静
山春雨
庭春雨
里春雨
野春雨
谷春雨
故郷春雨
山家春雨
田家春雨
旅春雨

うめの花心つからにちりそめて春雨かをるゆふへたのしも 千 蔭
いとしく花まつころの長き日を眺めくらすそいふせかりける 九 み子
はるさめにこそあやなくなりにけりさらてもかすむ夕暮の山 春 海
すみた河みのきてくたす筏しに霞むわしたのあめをこそしれ 千 蔭
はるさめのあすの野山の浅みどり軒はにかゝるよはの玉水 契 冲
軒くらき春の雨夜のあまそゝきあまたもおちぬおどのさひしさ 宣 長
春雨のいかにそめてかかすみ行山のみどりのうすくみゆらん 契 冲
めにもみえぬかすをまさこにあらそひて春の小雨そ庭に降しく 長 流
ふるとても物はなかめぬ里の子はつはなすみれにぬれ暮しつゝ 九 み子
はるのゝに小雨ふりしくますゝも草はみどりの色そそひゆく 長 流
春雨はふるともみえす谷かけは木ゝのしつゝのおどはかりして 春 満
ふるさどは袖にもかけていにしへをしのふの軒のはるさめの露 宣 長
わらひをる便にとひしさど人のおどつれもなきはるさめのころ 千 蔭
としわらんたりはのかつら秋かけて小田のなはしろ春雨そふる 枝 直
たひ衣たちにし日より春雨のふるさどにしもおもひしはれつ 春 満

幽栖春雨
閑中春雨
草庵春雨
寄春雨述懐
歸 雁
春 雁
花前歸鴈
歸雁向北

世にふるも人にしられぬすみかにはよきたくひなるはるの雨哉 千 蔭
うくひすも友もとむとやぬれてなく草の庵のはるのなかめに 契 冲
をりくはどはれまほしき宿なるをおどたにたてよ軒の春雨 春 海
はるさめもおとしのふ也山かけにかくてよをふる心しりさや 全
八重霞かすみなからにうちしめり野つらのいはに春雨そふる 千 蔭
おとしのふ春の雨こそあはれなれ我身世にふるたくひと思へは 春 海
わかくさのみどりおひそふ春雨にいとふり行わかみしられて 九 み子
白雪のふるさと遠く行雁も道しる駒のあとやならへる 長 流
しはしたにみてをしのはん春のかりこえ行嶺はかすますもかな 枝 直
はるくれは霞をみてやかりかねの我もと空におもひたつらん 宣 長
やま櫻雪ともみえよゆく厂のこゝをこしちとたちどまるへく 春 海
捨かてになとかへるらん古郷も旅ねもおなしかりのうき世を 蒼生子
とこよものもとむとはなき使しもそなたにたちぬ春のかりかね 長 流
ふるさとへわかるゝかりのこゑきよて梢の花もねにかへるらむ 千 蔭
かへるかり跡はしたへとしら山のゆきみるへくもなき雲路かな 長 流

歸鴈知春

一年はわすれてたちもおくれなんかすめはかへる春のかりかね
こちふけはかり歸る也小山田の雪けの水に時をしりてや
たみ子 蘆庵

鴈別花

歸る厂しはしまちみよ散ぬれはこも花なき里にやはあらぬ
契沖

歸鴈忙

なたてとやかかへすをうしとらむへき花より先にいそく厂金
全

歸鴈消雲

わけぬとて峯にわかるよよ雲につれて消ゆくかりの一つら
枝直

雨中歸雁

はるさめにおはひ羽たのむかりかねも今はの心しはれてやゆく
契沖

霞中歸雁

聲はして空ゆくかりのつら／＼にみれともみえすかすむ夕くれ
全

月前歸雁

かちのねとにかよへる聲はさたかにて霞のみをにきゆる厂かね
千蔭

雲間歸雁

花にうき心を人にみせしとや霞かくれにかりのゆくらむ
春海

暮天歸雁

行雁のかけたにしはしみるへきをうたてもかすむよはの月哉
千蔭

夜歸雁

霞むよの月なみすてそかへる厂花にはうときならひなりとも
春海

曙歸雁

かへるかりたか枕よりわかれねと雲路にまどふしの／＼めの空
契沖

曉天歸雁

天の原霞こめたる夕つくよたつ／＼しくやかりのゆくらむ
土満

歸雁似字

春のよの夢の枕をとひすてよやみのうつらにかへるかりかね
蘆庵

歸雁幽

歸るかり月にはかりかね
契沖

遠歸雁

うつろはぬ星をそなたのしるへとや曉やみに歸るかりかね
長流

歸雁遙

かへるさはとえりすらし玉つさのもしすくなかる春のかりかね
長流

山歸雁

かけて今ゆくへやしのお雲にこめ霞につむむかりのたまつさ
春満

峯歸雁

朝霞月もいまはの山のはをこえてきえゆくはるのかりかね
宣長

海歸鴈

天つかりこえ行山のそなたにはかすまぬつらを今やみおくる
春満

海邊歸鴈

みおくるも遠き山への夕霞やかてまきるはるのかりかね
蒿蹊

淒歸鴈

かりかねのきえはとにもどちさらねと霞もゆくかをちの山のは
長流

海歸鴈

きえのこる雪をや花とみねこえて故郷いそく天つかりかね
春満

海邊歸鴈

なれをけれまつとしりてか春に今いなはのみねを歸る厂かね
枝直

淒歸鴈

かへるかたこよときよこし鴈の舟こしの海にもとまらさりけり
長流

海邊歸鴈

住のえや故郷いそくはるのかり岸によるてふかひもひろはて
宣長

淒歸鴈

かへるかりわたのみなどにしたへとも雲ちゆかれぬあまの釣舟
長流

濱歸鴈

秋ならてこぬみの濱のはるの日にしはしやすらへかへる雁金
かりよなど心もとめす住吉の春の濱邊をたちわたるらむ

常樹

浦歸鴈

聲としてかけもみぬめの浦遠くかすむ雲をかへるかりかね

千蔭

水郷歸鴈

舟きはふよどの川つら夜をこめてとは田わかるゝ鴈かねそする

枝直

都歸鴈

しつけさに心をよせて都への春をいどふかあまつかりかね

千蔭

旅泊歸鴈

さくら咲磯山かけに舟はてゝよふかく鴈のこゑをさく哉

自寛

故郷歸鴈

かへる雁ねのかふるさど外なれやしかのみやこもよそに過らん

長流

關路歸鴈

行かりにくるつはくらめあふ坂の關とやちさる天のいはかど

全

歸鴈契秋

あふ坂や關をはこえてゆく空も霞へたつるはるのかりかね

宣長

春駒

又こんどたのむの秋の夕きりもおもかけどはくかすむかりかね

長流

春駒

あれまさる心こはさもしらま弓春はとられぬわたちのゝ駒

宣長

春駒

はるされはあせみ咲のゝはなれ駒すさふとなしに花にゑふらん

契沖

春駒

乗駒のうらやましとやいはゆらんとりもつなかね春の野かひを

蘆庵

牧春駒

うちむれてあさるみまさの春駒の中にも龍のおひ先はみゆ

枝直

野春駒

さぬかへり猶ふる雪にまさの名のをふちにみゆる春の若駒
あれゆきし駒をはる野にもとむればそれも跡なきもすの草くさ

千蔭

澤邊春駒

かけろひのもゆるわら野のわら駒もうら若草になるゝ頃かな

たみ子

遙見春駒

ねよけなる野澤の草になれてなと駒のこゝろのあれまさるらん

春海

雉

れきつ風あれゆくかたにつなえてなかせる船に似たる春駒

長流

岡雉

春のゝに去年のみかりの跡とへて妻なきさしの聲そかなしき
人めなき垣ねのきゝすねに鳴て春のねふりをおどろかしつる

全

野雉

また浅き小草かくれにしのひかねあはれきゝすのあらはにそ鳴

蘆庵

野徑雉

明ぬとて鳴やきゝすの聲のうちにはのゝしらむ春の山はた
たひにして妻こひすてしかた岡のきしもかれ飯のはろゝどそ鳴

春海

燒野雉
雲雀

われも又おもひの家の内なから燒野のきゝすのあはれとそみる 契沖
霞たつはる野の雲雀なにしかおもひあかりてねをはなくらん 眞淵
いとゆふになかき日くらしつなかれて中空にのみまふひはり哉 千蔭
はるされはすみれさくの、朝霞空にひはりのこゑはかりして 枝直
聲はして雲のいつこの夕ひはりありかや風のうへにさたむる 契沖
空とほくあかりもゆくか夕ひはり野澤の水にかけのかすめる 春海
霞わけて今かおつらし夕ひはりるかに聞し聲のちかつく 蘆庵
山のはに日影もおつる夕ひはりきはひかほにもみえぬのとけさ 宣長
としめてひはりなくなり行かひも春にすくなきのへの芝生に 春満
すきかへすほどといくかもあらを田を野とすみなして雲雀鳴聲 枝直
いつこまでのへの雲雀の揚るらんたつかけろふの行へどめつゝ 千蔭
草の名のはゝこ交りにすみれ咲野をなつかしみひはりおつらん 春満
はるのゝすみれの床におちきつゝ聲もにはへるゆふ雲雀かな 春海
根せりつむ野澤の水にかけみえてひはりおちくるはるの夕くれ 千蔭
ゆく空もかすむ野澤のうもれ水こゑはうもれすなくひはりかな 宣長

夕雲雀

路雲雀

田雲雀

野雲雀

澤雲雀

雲雀落

呼子鳥

夕呼子鳥

山呼子鳥

谷中呼子鳥

森呼子鳥

林呼子鳥

深山呼子鳥

梨花

庭梨花

うちひれてすみれつむなるをどめこか袖におちくる夕雲雀哉 千蔭
おほ空はそこはかどなくかすむのにこゑのみおつる夕雲雀哉 春海
野へ近き垣ねに床やしめつらんかすめる軒にひはりおつなり 蘆庵
住よしのなこしの岡のよふこ鳥なにゝよるへきあまのつりふね 長流
はるかなる深山の柳の斧のおとにこたへてもなく呼子鳥哉 春満
いつこそやよふこの山によふこ鳥霞かくれのゆふくれのこゑ 蘆庵
いもせ山かなたこなたのよふこ鳥聲のかよひは川もへたてす 長流
山彦のこたふる聲にしられけりみ谷のそこになくよふこどり 春海
たらちねのこゝその森の呼子鳥このくれやみをこゝろとやなく 契沖
花ちらふかた山林今さらにかひなきねにもよふこどりかな 千蔭
よふこ鳥我がどゆかん道もなしはるもみ山はきりふかくして 長流
枝に葉に露をはねひて雨にけさ花のひもどく庭のやまなし 春満
たをやめの姿を今もしのへとや雨にゝはへるやまなしの花 春海
はるのよの月の光はうすけれと物おもひなしの花はくもらす 枝直
ふりこへてとばれやすると待かひもなしの花さく春雨の庭 全

若かへて
花 櫻 同

もみちにも花にもあらて春秋を一木にみするわかへて哉
 うら／＼とのどけきはるの心よりにはひいてたる山さくらにはな
 ふもとたのなはしろ水にかけみえて山のさくらは花さきにけり
 世の人の心をはるになすものは野山にはなふ櫻なりけり
 咲さかぬほどをあれとおもふかな春もかくある花の日數に
 さま／＼の花はわれともひのもとの春のひかりそさくらにける
 此はるをなか世の春のはしめにて千とせもにはへはつ櫻はな
 我もおいさくちも古木ふりせぬはわかぬ心と花の色かど
 松杉のえたをのこしてふる雪は外山にさけるさくらにけり
 かはつなくしつくの田るにいほりして筑波高ねの花をみる哉
 おく山の岩ねこけむす櫻花はるしりそめていく世へぬらん
 おく山のいはほの中におひいてうきとしらぬ花のいろ哉
 心わりてなかるゝ水もよとめとや汀の花のかけもみたれぬ
 風をうらみ雨をいとひてやへ櫻ひとへに花をおもふころ哉
 一さかりありて散ぬる花の後にはるをどゝめしやへ櫻かな

契 沖
 真 淵
 枝 直
 千 蔭
 春 海
 高 蹊
 千 蔭
 蘆 庵
 枝 直
 千 蔭
 契 沖
 千 蔭
 全 蔭
 枝 直
 春 海

糸 櫻
待 花

うくひすの梅よりのちの花笠に又もぬふへきいと櫻哉
 どくさかえうつろふともしかならんよし山櫻まちもかこたし
 鶯のこゑさゝそむるわしたよりまたるゝものは櫻なりけり
 はるの日のおそしてふ名は我とく花まつ人やいひはしめけん
 足引の山のこすゑになかめしてさくらかたまつ時にはなりぬ
 はるのきてひと日／＼にそふものは花のまたるゝ心なりけり
 またれつる花かどみえし白雲は香にもにははぬ雨にさりける
 咲ぬやとむかふと山の春霞たちてみぬときもなし
 いつか又さくらん花のかゝらはとおもひなくさむみねの白雲
 霞たつとやまにかゝるしら雲はまたるゝ花のおもかけにして
 はるとの花より外は世中にまつともなきすさひなりけり
 いつしかとまつに心をなくさめて花さかぬまのはるそのどけき
 なにともおいの心にいそかれて花まつはとそいとゝ日なかき
 いひそめてこかるゝほどの心かなまたひもとかぬ花にひかへは
 初花はいくかもえたにこもらしをまつにはそれもおそくら哉

契 沖
 枝 直
 宣 長
 春 海
 土 満
 枝 直
 全 蔭
 千 蔭
 春 海
 枝 直
 春 海
 全 蔭
 千 蔭
 全 蔭
 契 沖

山花遅	花の雲はやたちかはれ白雪をきえていくかのみよしの山	宣長
山寒花遅	名のみしてよしの山は春寒し來ませまつさく花の都に	枝直
山家花遅	山さどははるのひかりのねを櫻おくれて咲をなくさめにして	全
鮮花	ことしよりむつましませよ櫻花我世をへなんはるのかきりは	千蔭
老後栽花	ときもよしおそきもあかし栽をへてあまたみきりにさける櫻は	春満
尋花	うえてみる花には風をいとふ哉いづれをさきとしらぬ身ながら	たみ子
尋山花	たつねゆくむかひの山はさきぬやどは花を野路のはる風	宣長
遠尋山花	さくら花尋て深くいる山のかひ有けなるくものいろかな	全
霞中尋花	尋いる花のそらめにはかられて分しやいくへ峰のしら雲	全
尋花超山	とひのこすさところなけれ春霞先さく花を立やかかくすと	枝直
山路尋花	こえてなほ風もいくへの花のかにうかれ行らんはるの山ふみ	宣長
逐年尋花	はのみゆる木のまの雲をめにかけて花をとめ行春のみ山ち	千蔭
遠尋花	としをへて花にまかへる偽にたつねもこりぬ嶺のしらくも	契冲
	わけはやなどは山さくら花を花雲をくもともみるをかきりに	春満
	さきぬへき花のこすゑも風さえてねもかけどはきはるの山ふみ	宣長

雨中尋花	いたつらにかへらんものか春雨の花のしつくを袖にかけすは	千蔭
尋見花	とめこすはくやしからましさどわきて先咲そむる花の一もど	枝直
遠尋見花	咲にけり山分衣はるかせも袖にはのめくをちの花のか	宣長
尋芳樹底行	けふも又雲を心のしをりにて花にそわくる木くのした道	自寛
初花	山ふかく入にし人もいて見よ花はさどよりさきそめにけり	枝直
花未開	咲ぬまのおもひねにしみならひにはこれも夢かどたどる初花	宣長
花初開	さそはれん風の心をたれどはやうちどけかぬるはなのしたひも	枝直
山初花	咲そむる花をしみれば又さらにはるたちし日の心地こそすれ	全
山花始開	神路山木綿かけたりとみるはかりや咲そめしみねのはつ花	千蔭
山花半綻	こき出しからろの浪の花かともみふねの山はさきそめにけり	全
山花未遍	やま櫻そともかけともかたわきてなかはそ花のさかり也ける	枝直
始見山花	うつろはん恨にかへて山さくらさかりまつまをさかりとやみん	全
暖雨新開 一徑花	さくら花かつ咲そめてこまかして霞色つくみよしのやま	宣長
花盛	春山のあめわたけきあどみえてかけちにさけるひと本の花	蘆庵
	大路行人のたもともさくら色に染るそ花のさかり也ける	眞淵

花漸盛
山花盛

櫻はなさかりとなればちるうさも待しつらさも何かおもはん
盛まつ外山のさくらふゆめりし枝は日とにまれになりゆく

春海
枝直

名所花盛

吉野山よしや山もりつけすとも花のさかりはみねのしらくも
ゆきふらぬ春もさくらの盛には木毎に花のみよしのよま

長流
宣長

處々花盛

よしの山さどにもかゝる白雲とみゆるは花のさかりなるらし
さくら咲大のさどに一夜ねてあすはをくらの花もわけみん

春海
たみ子

風静花盛

風ふかぬ花の盛にわひにけるけふをいくよのおもひ出にせむ
さきつゝくさくらの中に花ならぬ松めつらしきみよしの山

千蔭
宣長

盛花

かつみれとなくさめかねつ櫻花さそん風のうしろめたさに
世にわれは今年の花もみつうれしきものはいのち之けり

枝直
宣長

見花

花みればわかくれゆく春の日をおそしとたれかいひ始めけん
つくくど花に心をちらさねは風もこすゑやよきて吹らん

春海
枝直

静見花

かくなから千世もへぬへしみる人のちらぬ心に花しならは
露をたにちらさぬ花のかけなればたれかは風に心おくへき

千蔭
枝直

心静見花

ささしよりわかぬ心をちらさねはさそはん風をまつ花もなし

春海
枝直

月前見花

ものどに心ちらねは名にたてゝわたなる花ものどかにそみる
あかすみる月のいるさの山さくらちらぬもをしき花のいろ哉

蘆庵
宣長

花下見月

花はまたちらぬ梢にかけ落て先をしまるゝはるの夜の月

全
全

毎朝見花

よしの山あくる日とに咲そひてきのふの花もよものしらくも

全
全

終日見花

菅のねの長さ春日にあくかれて暮れば花のかけにねにけり

土満
宣長

見花日暮

みすてゝはかへらぬ庭のこの本もくれゆく色を花のわかれち

宣長
蘆庵

毎春見花

はるどにみるとはすれと櫻花あかてあまたのとしもへにけり

全
全

年々見花

みるともはとしくかはる花の下になれぬと思ふ身は有にけり

全
全

隔波見花

舟もかな波路さしはへかのみゆる磯山さくらたをりてもみん

全
全

隔水見花

さしかけやをられぬ花のにはひをも浪によせくる春の河水

春海
宣長

旅中見花

草まぐらいつれの陰とさためましやとはあまたのはなの夕暮

宣長
土満

遙見山花

あし引のとは山もとにゐる雲は風にしられぬ花になりける

土満
宣長

行路見花

あすよりはかゝる櫻の木のもとはよきてそゆかん春日暮けり

宣長
契沖

山路見花

岩根ふむそはのかけちのめかれよりさくら吹まく風そあやふき

契沖
枝直

馬上見花

河上の高ねのさくら咲しより水かふこまのたゝぬ日もなし

舟中見花	心ひく渚の花にあくかれてくたしもはてぬ春の川ふね	春海
名所見花	世のなかによしの山の花はかりきしにまさる物は有けり	真淵
獨見花	わひしらにさくや一木の家櫻おなしころにともしのふらん	枝直
見花延齡	のどかなるはるの心にひかれな花ゆゑ千代もへぬへかりけり	春海
見花戀友	みせはやと人をそしのふ山櫻わかぬころのへたてなけれ	全
思花	ふしのねに霞たなひくみよしのむら山櫻今やさくらん	古道
羈中思花	おもひやるしるしとするもとけぬへしなれし都の花のした紐	契冲
夜思花	かきりある花の日数をぬえ玉のよのま見さらんとのくやし	蘆庵
晝夜思花	花にくれ花にそわかすよるも猶ひるみし色のゆめにみえつ	宣長
毎春思花	世々ふともふりせんものか花をおもふ人の心も花の色かも	千蔭
翫花	よの中に花みてくらすはるはかりおもふ事なき時は有けり	全
翫山花	ちるわかれありとしりつゝ咲花になれしやなにの心なるらん	春海
雨中翫花	ちるをなれもわすれよ山櫻我いへちもおもはぬものを	宣長
翫花經年	すみた河堤のさくら人ならば笠させましをみのかさましを	千蔭
	咲ちるはかはらぬ花の春をへておはれとおもふとそゝひゆく	真淵

老翫花	ちるをしむ心そ年にまさりける老をわする花そと思へは	春海
愛花	花にのみ暮さぬ春はなけれとせいつれの年かあくまではみし	全
毎年盛花	ゑるとに咲まされはや櫻花わかぬ心のとしにそふらん	全
隣花	春ことのちきりかはらす咲花にあたる名をそたてすも有なん	全
花未飽	あくとはあらしとそおもふ春の日に秋の夜そへて花はみるとも	枝直
心未飽花	分のこす野山をねはみ櫻花心ゆくまでみしはるそなき	蘆庵
馴花	日をへてもうすくれなるの花よなど人の心をふかくそむらん	春海
對花	いつしかと待しはとより立なれて櫻かもとにいくかへにけん	千蔭
交花	わか袖のひたりみきにもかをしめて花なき時のおもひ出にせん	全
折花	花をたよそに見よとてさくらめとわかぬ心にをるかわりなさ	たみ子
旅人折櫻	人ならばうしとみましを櫻花わかぬころにたをりつるかな	宣長
月前折花	山櫻かたえまはらになりけり我よりさきにたれかたをりし	春海
月前花	あしからのやへくも分る旅ならて高ねの花にたふさふめれや	千蔭
	けふも又かりつくしつゝ朧夜の月にそたをるはなのひとえた	全
	山のはに花かあらぬか霞とも雲ともみえず春の夜の月	宣長

月照花	さかりなる花にひかりやゆつるらん空にかすめる春のよの月	枝直
花間月	櫻花そらにしられぬ雲まより猶それかどもかすむ月かけ	契沖
花下明月	あひにわひてさきものこらすちりもせて花もこよひや望月の影	宣長
花色映月	とりもせぬ春の月夜の山櫻花のおほろそしくものもなき	全
山月映花	かつらきの神も花ゆゑいとしく臙月夜やあくるわひしき	契沖
花林朧月	臙夜の月もかけをやわきつらん花のはやしはさしもかすます	蘆庵
寄雪花	ふしのねもおよはし花のはる風にしら雪にはふみよしの山	宣長
花雪	ゆきとのみ庭もはたれに花ちれば梢にのこるしら雲もなし	枝直
花似雪	ふる雪とはいとはぬ花の白雲もあすのこすゑの風やさひしき	春満
花開風香	枝かこす松のこすゑはひらきえてさくや高ねの花のしら雪	宣長
風静花芳	嶺たかみかすみにももる花のかをかどふ斗の風とふかなん	千蔭
	よるの雨の露たにちらす櫻花にはふはかりのけふのはる風	眞淵
	わか爲にさける一木の花の香をよそにとさそふはる風もなし	枝直
	花におく露たにちらぬ春風にこゝろとかをる山さくら花	千蔭
	をりくにかすみをもれてかをらすは吹ともしらし花の下風	春海

霞中花	はるかせにこそはぬ色もさそはれて霞にふはなのおもかけ	宣長
霞中花薫	たちかくす霞の袖もさく花もはころひそめてにはふはるか	春海
花透霞	さく花をへたてもはてす中ふにはひをそふるうす霞哉	千蔭
寄雲花	咲そめし花かあらぬかふもどまで立田の山のけさのしら雲	宣長
花雲	名に高さ花のさかりかよしの山雲にはあらぬみねのしら雲	全
花似雲	くもとのみまかふ櫻のさかりにこ心もそらになりけるかな	眞淵
雲花無定樹	曉の嶺にわかれぬしら雲はよのまにさけるさくらなりけり	枝直
花映日	咲ころとおもふ心に松杉もわけてやかゝるはなのしらくも	蘆庵
	出るより霞にふはるはるの日の花にいそかぬかけそのときき	枝直
雨中花	かけろふのゆふ日にさらすみよしの瀧つかふちの花さくら哉	千蔭
	たかねよりあは立くもは花なれこそはふる雨そかににはひける	全
雨後花	山さくら花とさかりの春雨につゆふきちらすゆふあらしかな	宣長
花帶露	たちよりてなこりの露にいさぬれん花にはれゆくむらさめの空	枝直
夕花	初櫻露にふはへりきのふまで雨つみしてさかすやありけん	千蔭
	もゝ鳥のねくらもどむる羽風にもちらまくをしきやまさくら哉	全

夜花

かへらはや高ねの櫻あかぬともふもとの花もくれはてぬまに
夕月のいりぬる後もさくら花さける木陰はやみとしもなし
よるもなほ夢路にたにとみしけふの花そめ衣かへしてそぬく
たひ人のせきちこえゆく松の火にあら山さくらよるもにはへり
なかく月に月もなきよは櫻花さたかにそみるおもひねのゆめ
花の色はたかねの霞ふかきよの月にもしるきやまさくら哉
ちるといふともしはしはわすれけり花にかせなきあけほの空
花はた霞みわたれる絶間よりしらみそめたる明ほの色
朝日かけまちとるかたの梢より外山のさくら色そひゆく
ゆふはえをめてしや色のあさつく日さしも句へる花におもへと
くるまて花にそはんとおもひきや道行ふりのすさひなりしを
山さくらちれば咲つく陰とめて大かたおるははなにくらせり
先さきし山を旅寝のはしめにて一本のさくらちりのこるかけ
けふいくか花より花の草まくら結ふもてふのゆめはかりなる
おもはえすたつとやすき日數哉なれてもあかぬ花のしたかけ

闇夜花

宣長 枝直 千蔭 宣長 全 枝直 蘆庵 宣長 春滿 春海 眞淵 枝直 千蔭 蘆庵

深夜花

宣長 枝直 千蔭 宣長 全 枝直 蘆庵 宣長 春滿 春海 眞淵 枝直 千蔭 蘆庵

朝花

宣長 枝直 千蔭 宣長 全 枝直 蘆庵 宣長 春滿 春海 眞淵 枝直 千蔭 蘆庵

花下暮日

宣長 枝直 千蔭 宣長 全 枝直 蘆庵 宣長 春滿 春海 眞淵 枝直 千蔭 蘆庵

花下送日

宣長 枝直 千蔭 宣長 全 枝直 蘆庵 宣長 春滿 春海 眞淵 枝直 千蔭 蘆庵

花下忘歸

故郷にけふもくらしつあすか風さそはんまて花にやとらん
木のもとに日數へぬれ山さくらめつる心もなれてまされり
をのゝえもくたすへき哉ひとせにわふこなれなる花の盛は
行暮てやとりはしめつよしの山かくある花はあすさへそみん
山さとにあるしをたれとさためねと花のかけこそ長居せらるれ
ゆふこえをわかすめてすえ歸るさのとほさとをのゝ花や恨みん
春雨のはれゆくへに出てみれば若木のさくら咲そめにけり
山鳥のをのへさくら咲にけりななき日さらす雲のかゝれる
みよしのやこれもうき世の色なからえもいとほれぬ山さくら哉
岩根ふみかさなる山のかひ有てよにぬ花のさかりをそみる
みわたせは花より外の色もなしさくらにうつむみよしのゝやま
ふた神のかさしの櫻咲そめて山さひいますをつくはの山
朝とにかすみ色そふはつせ山ひはらかかくもはなになるころ
一むらのくもこそかゝれ山のはのとはきこす糸の花やさくらん
それとみてわけこし山の雲のかくによにめつらしき花は有けり

野花

春滿 春海 眞淵 枝直 千蔭 蘆庵 宣長 春滿 春海 眞淵 枝直 千蔭 蘆庵

山花

宣長 枝直 千蔭 宣長 全 枝直 蘆庵 宣長 春滿 春海 眞淵 枝直 千蔭 蘆庵

満山花

宣長 枝直 千蔭 宣長 全 枝直 蘆庵 宣長 春滿 春海 眞淵 枝直 千蔭 蘆庵

花添山景色

宣長 枝直 千蔭 宣長 全 枝直 蘆庵 宣長 春滿 春海 眞淵 枝直 千蔭 蘆庵

遠山花

宣長 枝直 千蔭 宣長 全 枝直 蘆庵 宣長 春滿 春海 眞淵 枝直 千蔭 蘆庵

深山花

宣長 枝直 千蔭 宣長 全 枝直 蘆庵 宣長 春滿 春海 眞淵 枝直 千蔭 蘆庵

望山花	たちへたつ霞も雲もかをるなりはなにしらめる明はのゝやま	春満
嶺上望花	よしやふけ花のはる風かをらすはまかひもはてん嶺のしら雲	全
遠望山花	しらゆきか雲かあらぬかよしの山ましろにみゆる花のよそめは	たみ子
暮山花	あやにくにいと霞も立そひて夕やまさくらいろそくれゆく	宣長
分花入山路	山櫻一日なれみし歸るさを風にたくひてはなはおくれる	契沖
山花不散風	けふいくか山わけ衣きならして花にやつるゝ袖そうれしき	春海
嶺花	龍田山花咲峰のはるかせもわたらはくものなかやたえなん	契沖
嶺上花	ちらぬまも心つくしを風越のみねにしもなと花はさくらん	蘆庵
遠嶺花	おもへともをりかさゝれぬ心を峰のさくらにつくすこの頃	たみ子
岡花	白雲のかゝるとみえしたかねより吹おろす風に花のかそする	枝直
杜花	ふしのねも花のさかりになりぬらんくもよりうへにかをる春風	春満
杜間花	たれどなく春のゆきゝの岡こえてはこひがちなる花の木のもと	全
杜花	うらみしよつゝ霞も杜の名の衣手かけてにはふさくらに	全
杜花	おくれねもおそ櫻かともゆるかなもりの青葉にましる一本	宣長
杜花	宮木引聲のをりくたえぬるは山山ひともはなやみるらん	枝直

樵路花	咲にはふはなに心やひかるらん宮木いそかぬみをのそま入	宣長
溪花	しは人のこるやくろ木にをりそへし花にみ山のはるをみる哉	千蔭
古溪花	そこひなきみ谷の花の雲のうへをかしてさしらてわたる棧	全
橋下花	岩くゝる流のすゑのかをれるはみたにのおくの花やさくらん	枝直
霧中花	たひ衣さそ山さくらさきぬらし雲のはたてにわたすかけはし	全
霧中見花	霞立なかきはる日になかめして花にもものをおもふたひ哉	眞淵
霧中見花	手向せし山のさくらを風ふけはくさの枕に雪そつもれる	枝直
霧中見花	旅ころもひもまたくれぬ木の本にやとらまほしき花の色哉	宣長
霧中見花	やとゝへはこゝもいくへの白雲とみしよりなれしはなの下蔭	枝直
霧中見花	あしからやみねの岩ねにやすらひて八重山遠き花をみる哉	千蔭
霧中見花	たひねせし陰もひとよの夢とのみ立わかれゆく花の明はの	宣長
霧中見花	春の日の長さのみかはさく花の陰行道はくれんともせず	枝直
霧中見花	せきもりもある世なりせば逢坂の花にとまるともゆるさし	春満
霧中見花	もる人の袖より外にかをるなり關吹こゆる花のしたかせ	枝直
霧中見花	足柄のやへ山さくらさきにけりはるのあらしの關もりもかな	蘆庵

關路花

不破關花

名所花

雪のうちに出し日數もつもりきて春さくはなのしらかはの關
 山ふかみおもひの外に花をみて心そとまるあしからのせき
 さくら咲ふはの山路は關守のすますなりてもひとをとめけり
 櫻さくころにしなれは名もしるゝ雲るにみゆる天のかく山
 花さくら霞の袖そおほふなるたかきぬゝのあさつまのやま
 みわたせは雲も霞も櫻色にはふやさくらみよしのゝやま
 わけはのや霞かくれの岩門もはなよりひらくあふさかのせき
 分ゆか老やかかくれんよしの山おのつからなる花のかさしに
 ことの葉の色香もよゝにそへ來てそ今もにはへる志賀のはな園
 花を吹あらしの空は雪なから袂そかをるしかのやまこえ
 みや人のかはひのこれるしかの山花にこえゆく袖そやさしき
 こえなつむ妹かたもとに吹かけて花をかさぬるしかの山風
 ふみそめし人の心をはるとの花にわすれぬ志賀の山こえ
 ささしより池のみきはのさゝ浪も花にこゝろをよすところみれ
 枝なからあわとそみゆる岩そゝくたるみのうへのはつさくら花

宣長

眞淵

全

枝直

千蔭

宣長

春海

自寛

春海

眞淵

千蔭

蘆庵

春海

千蔭

契沖

志賀花園花

志賀山越

池上花

水上花

水邊花

岸花

花影寫水

湖上花

海邊花

磯花

磯邊花

河上花

河邊花

瀧邊花

鹽屋花

浦花

閑居花

櫻さくはるの川とを見わたせと雲のなかゆく水のしら浪
 よる浪の花にも香をやうつすらんはるゆく河のきしの櫻は
 こゝもとに浪うちよせよ櫻花うつろふかけを手にむすひてん
 さゝ浪のあふみのうみに舟はてゝひら山さくらちるまでもみん
 あつさ弓いそ山さくら風ふけは雪にさをさすあまのつりふね
 はる深さおきつしは風ふくたひに花の浪こすいその松はら
 わたつみの神のをとめか花かつらかけてちらすな磯による浪
 山さくらさくどみしより吉野川なかるゝ花もかつそたえせぬ
 櫻さくかたのやいつく白雲のなかになかるゝあまのかは水
 河上に若なあらふ子かり立て花のかけみる水なにこしそ
 咲花のくものいはへを分てく落る瀧のみなわもかにゝはふらし
 しらいともつねより長さはる日哉たきのうへなる花につゝきて
 浦風にたちものほらぬしはかまの烟はをなにおよはさりけり
 すまのうらやなきたる朝の浪をよりまれなるあまの家櫻哉
 住なせは庭のこけちにちる花のおとをさゝしるをりもありけり

春海

枝直

千蔭

たみ子

枝直

蘆庵

千蔭

眞淵

枝直

全

千蔭

宣長

枝直

契沖

枝直

隣花	里花	庭花	田家花	山家花	都花	禁中花
人とはぬやとて風のふかさらはなほしつかにそ花をみてまし 世のうきはのかれしやとモ花咲は又やまかせのいとほる哉 うとからぬ中垣こえて咲しよりよそには花のあるしとやみん 中垣のすきまもれくる花のかにちるさへもはたまたぬるかな 此頃はまつとをしむとゆきにも花をそかたるさくらぬのさと はるとのかさしのためと家櫻色もにはひもそはりゆくらむ 五百代や千しろの田つらかへすくみれとモ花に飽ときそなき 山さとは岩ほのなかと聞つるを花にこもれるころなりけり あし引の山櫻戸の花盛うへこそひどのおもひいりけれ 聞なれてうからぬ山の松かせも花さく頃はうしろめたしや いかなれやよをもいとひし山さとの花の色かにそむる心は 咲しより花にうつろふ山さとのほるのころはちるかたもなし ふりはへてゆくも櫻のきぬなればはち花のくまたにもなし くればとりあやにしきになれてこそさけるかひあれ山櫻花 もしきのおほ宮人にかさゝれて野山にまさはるはなのいろ哉	蘆庵 宣長 枝直 千蔭 契沖	蘆庵 宣長 枝直 千蔭 契沖	蘆庵 宣長 枝直 千蔭 契沖	蘆庵 宣長 枝直 千蔭 契沖	蘆庵 宣長 枝直 千蔭 契沖	蘆庵 宣長 枝直 千蔭 契沖

禁庭花	古京花	故郷花	水郷花	古寺花	社頭花	松邊花
雲のうへに又白雲のかさなるはちかきまもりのさくらなるらん 九重に八重さく花やいくよのちかきまもりのかさしなるらん 六宮のみきりの櫻さくころは廣瀬龍田のかみもまもらむ たきのうへのみふねの山に宮人のむかしかさし花咲にけり たとへける櫻の花の色をかりならのみやこはいまさかりなり ふるさとをはるこたれかはみよしの山をのきはの花の曙 咲にけりふりにしさとの櫻花むかしにかへるはるとみるまで ふるさとを花の頃のみとふ人はわれにけりとモおもはさるらん 芹つむと水なにしそ咲しより花のかみのかはつらのさと 山寺の花はのこりて鐘のねどにけふもくれぬと人そちり行 をはずせや花よりひく山風のかねのにはひもしらむよの空 くちのこる爾伽井の水を鏡にて花はいくよのかけにうつせし ことの葉の色香にあける神なからなほみつかきの花やめつらん 花ゆゑも神のいかきはこえぬへし咲ひと枝のをらまはしさに 松風のおとをどめ来てどこしへに散へくもあらぬ花をみる哉	枝直 千蔭 全 宣長 全 古道 全 枝直 全 宣長 全 契沖 全 春海 真淵 宣長 千蔭	枝直 千蔭 全 宣長 全 古道 全 枝直 全 宣長 全 契沖 全 春海 真淵 宣長 千蔭	枝直 千蔭 全 宣長 全 古道 全 枝直 全 宣長 全 契沖 全 春海 真淵 宣長 千蔭	枝直 千蔭 全 宣長 全 古道 全 枝直 全 宣長 全 契沖 全 春海 真淵 宣長 千蔭	枝直 千蔭 全 宣長 全 古道 全 枝直 全 宣長 全 契沖 全 春海 真淵 宣長 千蔭	枝直 千蔭 全 宣長 全 古道 全 枝直 全 宣長 全 契沖 全 春海 真淵 宣長 千蔭

花交松

家花勝他花

依花忘行
依花待人

依花待客

依花待友

花時無外人

花留客

野花留人

花下蝶飛

花下逢客

としへて花の
もとにあへり
花下交遊

花かよ松のこすゑはそのまゝにたちもかくさぬ峯のしら雲 宣長
 白雲にまかふはかりの花はわれとなれし一木をあはれとそみる 千蔭
 妹かりといそく心をわすれめや道のゆくての花しさかすは 蘆庵
 どはれぬはたかためかうき蓬生の花よひとめを待つてみよ 全
 庭のおものはつ櫻花咲ぬれはとふへきひとをかそへてそまつ 契沖
 柴の戸の花なわすれそ都人われにはうときこゝろなりとも 春海
 思ふともこんとは花にたのめともまたて散なはいかにしてまし 全
 咲しより日とにとひて山寺も木こりも花のともとなりぬる 蘆庵
 よしさらはおもひれもはす心みんふるさと人を花にまかせて 枝直
 さくら花わたにうつろふ心もて道ゆくひとをなとどむらん 春海
 立出て山わけ衣なかりき日をけふはすそのゝ花にくらしつ 宣長
 ちるかとはまかひなからにとふてふものどけさそふる花盛かな 全
 咲しよりあひみぬともの戀しくは花の陰をそとふへかりける 蘆庵
 なつかしき花の色香をわすれめや春よむかしの春ならすしも 春海
 玉たれのをかめを花の陰にすゑてにはふ霞をくみかはしけり 千蔭

花宴

花前興

花多春友

花のもとに
弓いる所

老後花

老見花

花忘老

老賞花

花慰老

花主

花宿

花根

花枝

櫻花めつるあまりにちるをさへさかつきにまつをりも有けり 全
 から國にれひぬさくらの陰しめてむれつゝうたふやまと言の葉 全
 はるとにあかぬ櫻の花衣なれゆくすゑのちさきふかしも 枝直
 さくら花花見かてらに弓いれはともひゝきに花そちりける 眞淵
 みちのくのわたちの眞弓わたにちるしつえの花をよきて引なん 千蔭
 風またぬわか身おもはて櫻花わたなるいろどなにかたつらん 宣長
 春の來て花のさかりのうれしきに我身の老はわすれてそみる 全
 花にそむ心はどしにかはらねははるは老をもれもはさうけり 春海
 さくら花にはふ春へにあまたたひあくるを老のおもひてにして 千蔭
 咲花にうかるゝ時そうなるこのひかしのはるのこゝろなりける 全
 しめゆはぬ野中のさくらみる人の心や花のあるしなるらん 枝直
 ちらすしてしはしは人をまちつけよ花こそあるし河つらのやと 千蔭
 前川にふねこく袖もかをる也なきさのやとにさくらさくころ 春海
 花も根にかへるをみてそこのもとにわれも家路はおもひ出ける 長流
 山風をかねてなけきのえたの上にもちりやすけにもさく櫻かな 全

花梢	花 色	花 與 春 句	花 露	花 鏡	花 浪	花 錦	花 衣	花 形 見	花 面 影	花 麻	花 手 向	花 插 頭	惜 花
みるにあかてなほたをられぬ恨を毛梢の花におもふわりなさ 咲はなにあくよしあらはその春やめてます色のかきりならまし たれかしのさけはかたみに匂ひそふ花と春とのふかきちきりは 道遠み人はまたこの朝露にぬれたるさくらしつかにそみる さかりなる花のかけみる水鏡日かすはかりはうつらすもかな もろこしのよしのやこのよしの山分こし花も千重のしら浪 かりかけし秋の梢のにしきにもたちまさりたる花のゆふはえ すみた河つゝみの花のからにしき春はきてみぬ人やなからん 櫻色にころもそめては春風のそて吹をたにいとふへきかな 色にそみ香にめてしより心にも身にもはなれぬはなのおもかけ さくら花かもめにぬさと散しより塵にや神のましりそめけん いつのまにたかならひより行春に手向るぬさと花のちるらん 一枝をおほふはかりの袖しあれはかさせる花は風にまかせし 心なき雲にもとよりまかひきてをしむをしらぬ山さくら哉	春 滿	全	蘆 庵	契 冲	宣 長	長 流	春 海	枝 直	長 流	宣 長	春 滿	蘆 庵	春 滿

老人惜花	惜花馬蹄遲	落 花	纒見落花	惜落花	憐落花	落花多	山落花
あたに散うさをはかねてしりなからとしもいたく花になれにき 心なく花のちるかな人みなのをしむらんともしらすや有らん ちるかうへにちりゆくみれば櫻花をしむ身のみや又のこらまし 乗駒もふましとやれもふちる花の陰ゆく道はすきかてにする 夢のねの長さ春日に袖たれてみんとおもひし花ちりにけり のとけさを思ひつゝくる春の日になとさく花のひとさかりなる ちる花をどいむる關もあらませそわれもる人にならまし物を をしとおもふ心よいかに山さくらちるこそ花のさかりなりけれ れのつからうつろふ花の心ともしらてや風をうらみそめけん 此はるのうきはまたみね木本の花はいつれのえたよりかちる 惜むとてとまるへきにはあらねども散花とにあたらとそ思ふ 惜みても散ゆく花はいふかひも長さ日くらしなにたもふらん 雪とふる花はたくひもなきものをちらはをしどは何思ひけん ちるこそはさかりなりけれ山櫻空ふくかせも花になりつゝ いかはかり高かれとてかよしの山幾代の花のちりつもるらん	春 海	土 滿	蘆 庵	全	宣 長	春 海	枝 直

深山落花

花ちらす風のかくれ家たつぬればよしのゝおくの草木のしけ山長流

落花満山

高砂のをへのさくら風ふけは外山のまつにかゝるしら雪 全

峯落花

雲とみしたかねのさくらあやまたす嵐のうへの空にちるなり 契冲

谷落花

山櫻ちるこのもとは谷河のおともあらしにきゝなされつゝ 蘆庵

森落花

ひかりなき谷にも風はよそならてさきてとくちる山さくら哉 宣長

樹陰落花

かく山のみねを吹こすはる風に花ちりみたるはにやすの森 春郷

行路落花

さくら花人のうらみをこきまかせて木陰の雪をいたくつもれる 長流

山路落花

ゆくさきの花もいかにどいそかれて散木のもとに我もとまらず 宣長

關路落花

散ぬればちりとなりぬる花なから花をはいかてふみてすくへき 高豊

名所落花

さくら花こゝらちる山こえくれはわかゆる駒はつき毛となりぬ 全

水上落花

吹こゆるあらしの花の手向をは神もいさめよあふさかのせき 宣長

石のほとに
て櫻のちるを

ひらのねの雪をあらしの吹からに波のしたゆくしかのうら舟 春海

いかにせんよしのゝたぐもちる花のうきよのかれぬはるの山風 宣長

ちりしきて水のうへにもゆく舟のあとをしまるゝ花のしらゆき 全

まゝのぬにたちなかしけんをとめ子かおもかけみせてちる櫻哉 千蔭

落花浮水

吉野河みしや花ともわかぬまに高ねのくもゝせゝのうたかた 宣長

河上落花

吉野川ちりかひくもる水上のあらしをみする花のしからみ 蘆庵

瀧落花

ふきおろすあらしの山の花をのせておのかものとやくたす筏し 蒿蹊

湖上落花

みよしのゝ瀧のしらわ相よりおちてなかるゝやまさくらかな 契冲

浦落花

風ふけはあふみのうみのおきつ浪われのみまさるしかの花園 長流

海邊落花

大ふねのかとりの磯に花そちるおき栖の沖に風たつらしも 魚彦

古宮落花

さくらちる春のみなとのおひ風に花つみそへていつるもゝ舟 蘆庵

故郷落花

風こゆるせき山さくら散にけり雪をのせくるすまの浦舟 春海

庭落花

花はゆきとふりゆく宮の庭櫻いつれの春か朝きよめせし 全

落花埋苔

みよしのをわかみにくれは落瀧つ瀧の宮こに花ちりみたる 眞淵

落花満庭

散ぬれば春のきのふの花園も全しむかしのしかのふるさと 宣長

閑庭落花

ちりつもる庭にもいとふあらし哉ふく跡みゆる花のしらゆき 全

庭落花

庭のおもはさくらちりしく春風にさそはぬ苔の色そきえゆく 全

落花埋苔

ふりにけり昨日の花は雪とたにみにこんにはのみちもなきまで 全

閑庭落花

うき世をこそむきしやとにちる花のたれにならひてしつ心なき 春海

山居落花

曉庭落花

山寺落花

古寺落花

社頭落花

朝落花

夕落花

夜思落花

月前落花

ちる花に庭のかけひはうつもれてつたふし水そ香に、はひける
 千 宣
 はるはなほうき世のさかも咲花をさそふあらしのやまかけの庵
 千 宣
 ちらぬまをみやこにつけぬうらみさへつもるや花のゆきの山里
 千 宣
 花さそふわけかた寒き真木の戸に雪ふきいる、庭のはる風
 春 宣
 かつらきや朝つま風の朝たちてとよらの寺にさくら花ちる
 千 宣
 はるふかみさくらは雪とふりにけるゆふへの寺をよそに過めや
 千 宣
 ゆふあらしはつせの花やさそふらん袖にちりくるいりわひの鐘
 宣 長
 千早ふる神のやしろのしめ縄もこえてちりゆく花をいかにせん
 土 宣
 今朝櫻露にこのめやぬれまざるたか花ならぬ枝のわかれに
 契 宣
 よしやふけくれなはなけの櫻花ちるをたにみむはるのやまかせ
 蘆 宣
 おのつからのこるかたえもあすまてはあらし吹そふ花の夕風
 宣 長
 をしみつるひとはかへりてさくら花ひとりやちらむよるの山陰
 蘆 宣
 足引のあらしのおとにねさめしてちるらん山の花をしを思ふ
 土 宣
 はるかぜの霞ふきとくをりくはちりかふむな月そくもれる
 千 宣
 れもかけをのちもしのへとやよひ山有明の月に花のちるらむ
 蘆 宣

風前落花

落花隨風

雨中落花

雨後落花

落花似雪

花不殘

落花入簾

花落頭

花落樹猶香

萎花蝶飛去

をりてのち花

ちおもふ

類題草野集上卷

春之部

月なくはいと、あたにやみはてまし霞かくれにちるさくらかな
 春 宣
 をしめとも人には花のつれなくて風のこゝろになどまかすらむ
 全 宣
 いかにせは春さく花の散らん風にまひするよしもあらぬかも
 土 宣
 さくら花今はとさそふ山風に心あはせてちりゆくもうし
 蘆 宣
 雨ましり風うちふきてふるさどにちるはなさむし春の夕くれ
 契 宣
 はるさめのなこりおほえてちる花にもろさあらしそふやま櫻哉
 春 宣
 春ふかみなかめふりにしなこりには露にももろき山さくらかな
 千 宣
 花かとよふりくる風も寒からてはるの山路につもるしらゆき
 宣 長
 くもとみし花は跡なき有明の月にのこれるみねのはるかぜ
 全 宣
 夕かせのすたれうこかすひまどめてをどめか袖にちる櫻かな
 千 宣
 かさせともかくれぬ老のもとゆひにいと、降そふ花のしら雪
 枝 宣
 木下を猶にははせてさくら花散てもひとをわこからせつる
 蘆 宣
 飛蝶の羽風にどかを飛ばしとやうつろふ花をかへりみもせぬ
 千 宣
 みし花のなこりわすれぬ曙にうたてあやしきそてのうつりか
 全 宣
 彌生たにまたてうつろふ花みればくは、る春もかひなかりけり
 春 宣
 春 海

寄花夢

くれてゆく春をうつゝどなにかみん夢はかりなる花のちきりに
露の間の夢さへ花にあくかれつ胡蝶に身をもかへし斗に

全

花前述懐

櫻花かさすとみつる夢さめてうつゝにかをるこゝちこそすれ

千

寄花述懐

咲花のかけにちらせはいとしくわかここの葉は色なかりけり

長

寄花懷舊

谷陰の老木のさくら風たにもしらてなかくのとけかりけり

千

寄花神祇

いそちあまりはるさく花に馴きつる我袖いかてにはひなからん

古

寄花釋教

こその人としはみえぬ世中になはわたならぬやまさくらかな

千

寄花無常

いのらはやいかきの櫻ちらすなとたゝひととの神のやしろに

全

寄花祝

おのつからかつらをぬけるいと櫻ほとけにまつる花にそ有ける

契

花有喜色

花はみなうつろひにけりうつせみの常なき世をも人にしれつゝ

土

花自有情

おもふどちかくしも花をかさしつゝ千年の春そまつへかりける

春

心在山花

くれ竹のよをへたてたるませのゆにうきふししらぬ花の色哉

千

春情在花

外のちる頃しもさきて山櫻こゝろふかさをみするひともと

蘆

春情在花

山さくら身こそまかせね花にいそく心の駒はなつむともなし

春

さくをまぢちるををしむと大かたのはるの心は花にそありける

千

春情寄花

花にのみこゝろひかれて春はたゝ身をうくひすにかへぬ斗そ

春

花下延思

おもふと花みるたひにわすられき浮世のさかよさもあらはあれ

全

花下言志

はるとに契たかへすさく花にあたなる名をはたれおほせけん

枝

花如舊

春の鴈の心はもたし櫻花あかぬ色かにあくよありども

春

花有遲速

あはれ世の人もかくこそ老木たに花にははひのかはらさりけり

春

遊

ひたすらにうきをみせしどちれはかつれくれて匂ふ花も有けり

全

遊

春の日のゆたのゝ原に遊ふいどのいつくるへくもみえぬ空哉

蘆

野

うちなひく柳のいとのそれならて空にもあそふ春のゝとけさ

宣

遊

のどかにも紐とく春にまつはれて糸かともゆる野へのかけろふ

春

野

いさけふはあつま乙女にたち交りかつしかのへに若菜つまはや

古

野

白妙の袖ふりはへてかけろふのもゆるしはふにすみれつむ也

千

野

道すから草の若葉になつさひてさもこゝろゆく春の野へ哉

宣

夕野遊

はるはたゝたれも心をのへに出ぬ花うくひすにさそはれねども

春

夕野遊

いとゆふの霞める空にあそふ日は人さへのへにみたれてそゆく

契

夕野遊

分のこすすゑのゝ霞立かへりあすも来てみんはるのゆふくれ

宣

野遊到暮
遅日

かもふとちあそふ春の、夕かすみたつとしらてけふもくらし、
 菅のねの長見の濱の春の日にむれたつたつのゆたにみえけり
 峯こえてかもへは長きはる日哉ふもとの花のけさのおもかけ
 入かたに近つく後も山鳥のをろのはつをのなかさ日のかけ
 うつりゆくかけをたまよりをしみつる人しはる日や心ゆるさむ
 菅のねの長してふ日も世の外はやとひてこそおもひしりぬれ
 うくひすのかたらふ聲もあくはかりしつけき窓に聞やならへる
 すかのねの長きはる日になりぬれば心すさひそいとなかりける
 しつのめかいそく手わさも床のをの長きはる日は心うむらむ
 わすれては今朝をさのふとたどるこそ日長き春のならひ也けれ
 朝鳥の花になれゆく春の日をねくらにかへるはどそはるけき
 さくうめのかけをうかへておもふとち霞をくめる春そたのしき
 岩つゝし山吹にはふまし水にはるせきとむるしはのいほかな
 山こえて霞むこすゑを見わたせは繪によく似たる物にそ有ける
 花みんどわけ入山のみちもせにふりすてかたきはつわらひ哉

春日遅
春日興
山家春興
春の山ふみ

全
真淵
宣長
契冲
千蔭
春海
全
千蔭
全
真淵
全
真淵
千蔭

暮山春望

海上春望
江上春望
水郷春望
春日望山

花の色は霞のうちになほみえて松よりくるゝるの山もと
 咲やこの花はなにはのえもいはす霞にこめてかをる明はの
 水清きあのみなとのなかれ江にかけはなかれぬきしの藤浪
 朝夕のさとのけふりも春はたゝひとつかすみのうちの河つら
 みわたせは天の香く山うねひ山あらそひたてるはる霞かな
 花鳥の色をも音をもちこめてはる日かすめるをはつせの山
 はるくれはいつくの山もひとへ山かさなる嶺もわかすかすみて
 春のきてあふく山邊に立そむる霞やはなのしをりなるらん
 うす霞一重へたてゝ春されはにはひをそふるをちの山まゆ
 をとこ山さかゆく春の神まつりたちまふそても花かけにして
 みな人にかさしの花そたまふなるうてなの竹のむかしおはえて
 雲の上の重ねかはらけたちかさね榮えん御代はくみてこそしれ
 よるへをは浪にまかせてちる花の香こめにめくる春のさかつき
 みそのふにけふはゝこつひ乙女子かかほの色そふもゝのはつ花
 けふとに花のかけくむさかつきも千とせを三たひ猶やめくらむ

石清水
臨時祭

三日

春海
春満
千蔭
宣長
真淵
古道
古道
蘆庵
高蹊
千蔭
秀倉
春海
全
春海
長流
千蔭

曲水宴

飛鳥川い駒のみやのむかしよりなかれてひさしけふのさかつき
 なかれくる色にきはひて言の葉も心にうかふ花のさかつき
 山陰のし水にうかふさかつきやなかれてよゝのためしなるらむ
 みなかみはもろこしにまれ咲花のもゝのみやひはやまどとの葉
 賤のをかそのふの桃の花さかりやふしもわかぬはるのいろかな
 今もなほゆきて見てしか桃の花さくやみ谷の水のみなかみ
 かくなから色もかはらて桃の花百代も千代もみるよしもかな
 ものいはぬ花とししれと木のもとを心ありけにひとそとひける
 のとかなるやよひの庭の桃櫻とりあはせてもめつるころかな
 春雨のふるすをしたふつはくらめしとに濡てけふそきにける
 としのはにむれつゝとふやつはくらめ都の家のみつはよつはに
 つはくらめ門田に今は解すなる種おろすへき時やきぬらん
 大君のなをしもおへる花みれえうへも世にゝぬ色香なりけり
 月雪のきよき心をひと花のにはひにこむるふかみ草かな
 なへてよは柳櫻をあしひきのかた山つはきあはれとそみる

枝直

宣長

千蔭

美樹

真淵

千蔭

宣長

春海

千蔭

葛子

千蔭

春海

全

契沖

桃花

雞合

燕來

牡丹

白牡丹

椿

堇

野堇

故郷堇

庭堇

古砌堇

閑居堇

摘堇

菜の花を

園の菜の花を

河上のしら玉つはきつら／＼にみすはまかはんたきついはなみ
 紫のすみれの花のにはへはやなへて春野はわかすみゆらん
 すみれにもあらぬ小草やましろらん摘花かたみ色のすくなき
 紫の花なつかしみむさしの／＼くさそみなからすみれともかな
 いさゝらは春の野寺にやとからんどもにすみれの花になれつゝ
 はるのゝのちはらの堇つみくれぬひはりの床や一夜からまし
 みゆきせし大原のへのすみれ草昔の袖の色そのこれる
 故郷の野へみにくれば昔わか妹とすみれの花さきにけり
 朝戸出の庭のしはふにきのふまでしらぬすみれの花さきにけり
 われはてゝ野となる庭のすみれ草こゝも昔のかさねとやさく
 朽のこるみはしの苦も色はえてよをふる花にすみれさく也
 われにけるまかきも春はゆひそへん堇つみにどこん人のため
 わかすしてくるゝ春のゝ露なからつめるすみれに月そうつろふ
 花みてもつまゝはしきをこつ春の雪間にとのみなに思ひけん
 此そのゝはるにこてふやあくかれん朝なゆふなの花にはふころ

長流

蘆庵

春満

宣長

春海

契沖

千蔭

真淵

宣長

蘆庵

春海

全

蘆庵

春海

蛙	苗代にあまるをなれもよろこひてよむかかはつの水のうたかた	宣長
澤蛙	雨そよぐをたの水口水ましてとろえかほになくかそつかな	春海
川蛙	霞してはるのすゑの、澤水にゆふへさひしくかはつなくこゑ	宣長
田蛙	かけうつす神奈備川のみひろ山こすゑの鳥どかはつなくなり	契沖
水邊蛙	垣つたをあらすきかへすかたへよりせきいる水に鳴かはつ哉	千蔭
夕蛙	はる深きゐてのわたりの夕まくれ霞むみきはにかそつなく也	蘆庵
夜蛙	霞そひくもれる春の夕くれに池のかはつあめこひてなく	全
名所蛙	みこもりの蛙かこゑもあひにあひて霞かくれの春のよの月	契沖
苗代	なれもまた春をやをしむちりまかふ山吹のせにかはつなく也	春海
	なはしろの水口まつりしめはへて賤かわさこそむかしおほゆれ	眞淵
	千町田の苗代水にひくしめの長くも秋をたのみかけり	千蔭
	種まきていてかへぬらんみこもりにうすもえきなる小田の苗代	蘆庵
	たのみわれや今より水もゆたかにて年榮ゆへきをたのなはしろ	宣長
河苗代	苗代の水口まつりしめはへて秋のたのみやかけていのらむ	春海
	ゆく河の水をくもてにせきわけて苗代いそく時はきにけり	千蔭

名所苗代	こん秋のたのみもさをな河そひのなはしろ水はゆたかにそ引	蘆庵
雨中苗代	うき田には種蒔ぬらしきのふけふ杜のしめなは引はへてけり	千蔭
雨後苗代	天河なとしろ水にひけどてやふる春雨そいとにみゆらむ	長流
海棠	けさみればよのまの雨にひくしめの雫の雫のたのな名さへしるしも	千蔭
唐棣花	春の色をみよどかいたうにはふらん錦をはれる花の梢は	春海
躑躅	この園はまたも来てみん宮人の袂ねはえてはねすさくころ	眞淵
	くれなるのうす花櫻散過てつしそはるの千しはなりける	宣長
	咲にはふいそ山もどのしらつししらすよ浪にまかふものとは	春海
水邊躑躅	つし原しろきをみれば郭公さささか山となくすきけり	長流
山躑躅	池水にうつろふときはしらつししとなによりくる浪かどそみる	春海
	たひ人の松のはかけとみるはかりもゆる山路のいはつし哉	千蔭
松下躑躅	旅人のいはる山へにたく火かどこくれにみえてさくつし哉	蘆庵
岡躑躅	つれなしとみえつる松のしたつし下のおもひも色に出にけり	宣長
巖上躑躅	山陰はくれぬにくれてつし原てれるをかへは入日をそつく	契沖
	ささいてい中に思ひのありしともいはねのつし色にみえけり	春満

夕見躑躅
樵路躑躅
山 振

山吹露
山吹露深
夕山振
里山吹
山吹盛
翫山吹
折山吹
河邊山吹

わらましき巖にこなと咲つらん妹かあかもにうつしのはな
 つしさく松かけはかりくれなむにしはし入日の陰そのこれる
 白砂のつし花さく柴人のかへるさおそきころも來にけり
 さくら花咲ての後に山ふきのいかてあかれぬいろかななるらむ
 きのふけふやへ山吹はさきにけりゐての河瀬に春やゆくらん
 山吹の花さくころは行みねとこゝろにかゝるゐてのしからみ
 折しれはちるも中ゝわたならしはるもいまはの露のやまふき
 行ゑるもやとりとるへく夕つゆにしなふまかきのやまふきの花
 くれゆくをれのか色とや夕露にさきものころぬやまふきの花
 ひかりあるさとこ玉河山吹のさかりは人のむれてこそとへ
 しめゆひしまかきもみえす山吹のやへにかさなる花のさかりは
 おそさくらそをたにあかすみるものを青葉ましりの山ふきの花
 袖はよしぬるともをらんこれも又ははいくかのやまふきの露
 山ふきは下行水も花なるを心してさせはるのかはふね
 いはぬ色にさくやまふきも吉野河うつり行春のかけそみたるゝ

春海
春滿
蘆庵
契沖
美樹
千蔭
春滿
千蔭
全
全
全
契沖
宜長
真淵
春滿

水邊山吹
山吹寫水
水底山吹
瀧下山吹
岸山吹
島山吹
橋邊山吹
幽居山吹
籬山吹
故郷山吹
山中山振
名所山吹
處々山吹
雨中山吹
暮春山吹

よしの川さくらのかけも山吹にうつりにけりなはるの日かすは
 そこすめる石井の水をかゝみにてたちよそひたる山吹のはな
 みぬ人のためにをらなん玉水のそこさへにはふるてのやまふき
 落瀧つ中にもよとむ影みえて淵瀬ともなきさしの山ふき
 かはつなく朝河わたりあすもこんちらてありまて岸のやまふき
 くらなしの泊はこゝと山吹のさけるこしまによするふなひと
 枝たれて岸よりさしに山ふきの花もかゝれるたにかはのはし
 よのちりをひとへたてゝあし垣にやへ山吹の露そしつけき
 ゆくはるもとまりにけりなこえかねて八重山吹の花のまかきに
 ふるさとは春のくれこそあそれなれ妹にゝるてふやまふきの花
 露深き山路わけきてをのゝえのくちなしそめのはなをみる哉
 神なひの岸の山吹咲にけりみむろのあらしふかすもあらん
 妹脊山中ゆく河にかけみえてにはひかはせるさしのやまふき
 春雨は七日ふれともやまふきのやへさく色はあせすそ有ける
 行春はなにのいそぎに山ふきの花のさかりもみはてさるらむ

宣長
千蔭
契沖
宜長
古道
長流
宣長
千蔭
宣長
真淵
自寛
千蔭
春海
全
枝直

借山振

世間はゐての河浪かくこそわれ八重山吹もひとへにそしつる

契沖

山吹散

ちりぬれこくいのやちたひかへりこぬ水のゆくてのゐての山吹

長流

燕子花

水かれてふるき澤へのかきつはたさけるあたりや八橋のあと

蘆庵

池杜若

かきつはたよにさく花の春の色のみかさもこれや限なるらん

宣長

藤

花の色になみもにはひて池水をむらこになせるかきつはた哉

春海

藤

かさつはおかけみる池やむらさきのはへる妹か鏡なるらん

千蔭

紫藤

高砂の松のふちなみさきしよりうらむらさきの鶴の毛衣

長流

藤春初綻

かいにける松にかゝりていつまでかわかむらさきの藤浪の花

春海

雨中藤春

松かえのみどりよりしも紫のたかきにうつるふちなみの花

千蔭

池上藤

はるなつにかゝる藤なみいつかたに花の心のなひくなるらん

土満

藤花映水

紫のはつもとゆひのめつらしくわかみる藤は花かつらせり

長流

水邊藤花

咲そめて池のかゝみにみるもかをううつるもにはふ花の藤浪

春満

橋上藤花

そはちつゝ折けん藤のふるともかくこそあめのけふのぬれいろ

蘆庵

瀧下藤花

ふちの花うつろふからに紫のゆはたにみゆるいけのさゝなみ

千蔭

浦藤

はるかぜのみきはの松をふくたひにさとうちかをる池の藤浪

春満

松上藤

世のつねの色とやはみんむらさきの名高のうらにはふ藤なみ

春海

松間藤

ふちさくや松のこすゑを高機にたれうま人のみけしなるらん

千蔭

藤懸松

松の色の又ひとしほのふちかつらかゝれどても花はさかしを

蘆庵

藤花藏松

咲そめて手にさへかゝる藤なみにまつは木高きかけとしもみす

春海

紫藤埋松

むらさきに咲ふちなみにまつはれてときその松も色かはりゆく

千蔭

折藤

あけならぬみどりも藤のむらさきに色うつもれてにはふ松枝

全

挿頭藤

をりてみん夏をかけてはにはふともかへらぬ春のふちなみの花

蘆庵

藤花年久

あをやきのみどりのかつらふりぬれは又めつらしくかさす藤浪

契沖

全

暮春藤花

藤花散
暮春

ふちなみの花の盛りはうつろはぬを春はそやくもくれにける哉 春郷
 夏にしもかゝらんよりは藤の花はひまつはれてはるをどゝめよ 宣長
 日をかさね咲そふふちのむらさは春深くしもそむるなりけり 春海
 藤浪のなかさしなひにくらふればちりぬるはなは心みしかし 契沖
 をしめとも日數はけふにつき弓の心つよくもはるそくれゆく 枝直
 ちる花にしはしかくれし日數さへつひにどまらぬ春の別路 宣長
 花鳥もさもわらはわれ行春はそのとどなくをしまるゝ哉 たみ子
 今もなほてふや花やとなれきつゝをしむ心はうなるこにして 千蔭
 をしめともどまらぬ春のつれなさをみしとや花のどく散ぬらん 土満
 ささちるは程なき花のさかりをまたてや春のくれてゆくらん 蘆庵
 櫻たにまたちりのこる此はるをいくかもなしとたれかいふらむ 眞淵
 わたなりと何かおもはんくれて行春にあらそふ花も有けり 春海
 春もどくくれさらましを大かたにちるをし花のいそかさりせば 全
 ちりのこる花はなこりも有ものをつれなくくるゝ春やなになり 全
 ちる花をよのまの雨にくたしなは春のかたみもあすやたとらん 全

暮春落花

暮春落花

暮春花

暮春雨

暮春雲 おもひかねなかむる空に行雲も春をおくるとみえてさひしき 高蹊
 暮春風 ちりはてし春のゆかりの春をさへさそひもゆくか跡のやま風 宣長
 暮春霞 ゆく袖をひきもとめはやさは姫の霞の衣はるのわかれち 全
 暮春月 ほどもなくくれなん春のねもはれていとつれなき在明の月 枝直
 暮春鳥 おしどねもふはるの日數はくれそひてよなくおそき有明の月 蘆庵
 うくひすもおいをやなげく此園に羽ねならせしをりも有しを 春海
 ゆく春をしはしどなかん鳥さへもふるすにかへるころにも有哉 千蔭
 心よわくかへりかねたるうくひすのこゑをのこして春を暮行 枝直
 ほとくすすまつの藤浪春かけて夏しきぬれば今もなかなむ 契沖
 つきはては何こゝちせん入相のかねてそをしき春のなこりも 春満
 なこりなく春はくれゆく浦浪のなにしたつらにたちかへるらん 春海
 花ははやすまもわかしも散にけり浦つたひして春やくれ行 全
 あわどちる浪間の花は色もなしひらのみなどのはるのくれかた 全
 けふの日も入江かすみて行舟のあどなきなみにはるそくれゆく 蘆庵
 ふるすとふ鳥の聲して山人のすみかの松にのこるはるかせ 古道

花もみなちりての後そしつけさをもとめし山のかひは有ける 千 蔭
 花ちりて人め絶にし山里に行はるさへやとまらざるらむ 宣 長
 日長さもとはれぬまゝにしられけり花よりのちのはるの山里 春 海
 山まゆの心はそくもかすむ哉こるはいくよか有明の月 契 沖
 くれてゆく春のそなたに心のみどりこそはなせさのゝ舟はし 全
 山さどのかきねのわらひをりにみし人めも絶て春そくれゆく 蘆 庵
 尸もいぬ春もかへりぬくさ枕たひにやひとりわかこのらまし 全
 はるよなど夏かけてさく藤浪の心なかさにならばさるらん 千 蔭
 ゆく春は夢とのみこそたどらるれいつかは花をあくまてはみし 春 海
 梅ちりて柳さくらどうつるよりみるゝ花のはるそたけゆく 蘆 庵
 よそへてははるの日數ををしむ哉のこりすくなき花をみるにも 春 海
 うつりゆく春をゝしむもあすしらぬ身をなげくとや人の思はん 蘆 庵
 花鳥のいろねに老もわすれしをなはなるゝとや春のいぬらむ 千 蔭
 木かくれにのこれる花は有ものをあひもかもはぬ春そつれなき 全
 まててふにいつかは春のとまりにしと思へと猶もをしまるゝ哉 全

暮春山

名所暮春

幽居暮春

旅宿暮春

惜春

寄花惜春

老人惜春

留春々不駐

惜春不駐

山河やはるもよとせもなきものをかひなくかけし花のしからみ 春 海
 花のみなちりての後ば春さへにのこる日なくもおもはゆるかな 眞 淵
 花ゆゑに待こし春のいかなればちりての後にをしまれぬらん 千 蔭
 花鳥にぬくれて又や此春ものこる日數をひとりをしまん 蘆 庵
 けふくれはあすもくれなんあすくれとしの春之残らさるへし 全
 春をたゝあけんあしたを限りそと思ふこよひのいやはねらるゝ 全
 ひたちにを田をこそつくれしめはへてけふ行春を誰かどゝむる 眞 淵
 春の日もけふとしなれば菅のねの長かりしとはおもはさりけり 千 蔭
 あまたゝひ春の別になれぬれどをしさこかいもかはらさりけり 枝 直
 けふのみにくれさらめやはあつさ弓春よしはしと鳥はなくとも 千 蔭
 くれぬるか春をこてふの夢のまになれみし花をおもかけにして 蘆 庵
 はるの日のいつはあれともいまはとてくれゆくけふの夕暮の空 土 満
 昨日まてなほあすありとたのみしをそもかたふきぬ春の日の影 蘆 庵
 まどろまてなほそをしまん花鳥の春もひとよのゆめとこそなれ 全
 さぬゝのうさにいくらもかどらぬははるつくる日の曉の鐘 千 蔭

残春

残春日少

残春二日

春光只是在明朝

はるのはてのきた

やよひの晦日

三月盡

三月盡夕

三月盡夜

三月盡曉

三月盡鐘	けふのみにほるはつきぬときくもうし聲たにかすめ入相のかね	春満
三月盡花	かきりある春のをしさに何かそふあすも散へき花にやはあらぬ	契沖
閏三月盡	今日そしる春くこゝれると思ひしは馴てなこりのまさる也けり	全
春風	百敷のおほみや人のをりかさすやなきかえたにはる風そ吹	春郷
春山風	あをやきのかつらき山のあさみどり霞もなひくみねのはる風	宣長
春風夜芳	ちる花にあすのたのみもなくくそくるればかへるはるの山風	全
春天象	よもすからねやの板戸のひまとめてかをるやそのうめの下風	千蔭
春日	なにどなくのとけきものは初春のみどりの空にはふ日のかけ	蘆庵
春星	うちかすむ千里の波をひかりにて朝日にはへるはるの河つら	春海
春雲	けふの日ものどけさしるくしのいめの霞に匂ふあかほしのかけ	千蔭
春山雲	山のはもさくらのさぬの色みえてうすくれなるにはふよこ雲	全
春烟	はる山のかひにかゝれるしら雲や花のよそめのはしめなるらん	全
春朝	はるさむき松かうら島かすませて心あるあまやけふりたつらん	蘆庵
開中春朝	のさちかき聲もにはひてあくるより朝戸いそかす花鳥のはる	宣長
	朝日さす算のたるひうちどけてかたらひなるうくひすの聲	千蔭

春夕	そこどなく花のかゝをり櫻色になへてかすめるはるのゆふ暮	蘆庵
春夜	心にもかなふいのちもえてしかな月と花との春のよにせむ	契沖
春夢	月かけもにほふやうめのしたふしはさめてもたどる花の移香	千蔭
春山	ゆめちまたて花に心のあくかれてわかやとなから旅ねをそする	自寛
春嶺	大かたの霞はたちもおよとぬと春のひかりにほふふしのね	千蔭
春山	をつくはの高嶺と雪にあらはれて霞にまかふは山しけ山	春海
春山	さくらさく春の袖人心せよをのいひききに花もこそちれ	枝直
春山	こゝにのみ枕からまし春はたゝこゝろひくまのへのわかくさ	春海
春山	古くさは螢のたねものこりなく春の野火とやまたもゆらん	長流
春山	たか袖もうへこそかをれ行かひの大路にたてる梅咲てけり	たみ子
春山	ゆくもくも花にとまりて逢坂の關路まさしき春のこの頃	春満
春山	いなり山はからくくと明る夜に名のるからすの聲もそるなる	全
春山	宮人のかさしのためと咲にはふみやこのはるのはなそことなる	千蔭
春山	二見かたつのくみわたるあしかひに神代の春もたもほえにけり	全
春山	志賀のうらやそもたはるゝ花そのゝこてふよ夢か有し昔は	宣長

春 閑居	玉水のそれさへおどやしのふらんこけのみふかきやどの春雨	千 蔭
春 田家	こゝろしてあらすきかへせ筑波ねの雨の田るに櫻ちる頃	全
春 田	さくら咲遠山もとのさど人は田にたちつかることやなからん	古 道
春 川	どね河の水せきわけてかとりかた神のみとしろゆたねまきけり	千 蔭
春 瀧	はるもはや中つせなれやすみた河霞そふかく立わたりける	全
春 海	水上のいはまのつらうちとけておちくる瀧のれとそ春なる	全
春 濱	はるのうみの中津遠山かすむ日は心もなきぬしはちはるかに	契 沖
春 浦	住のえの濱邊にかすむ春の日の長るすなどはたれかいひけん	古 道
春 浪	ふしのねの雪のひかりにわけそむる二見の浦の春そのとけき	千 蔭
春 池	はる来ぬと浪ものとかにわたの原八十島かけて霞たなひく	自 寛
春 木	みわたせば水の烟もいとゆふもひとつにかすむいけのおも哉	千 蔭
春 植物	もえ出る緑のなかにおのか秋のあらまし見する若かへてかな	全
松有春色	吹どなきわしたの風にうちなひく柳そはるのすかたなりける	全
春 歌	うつろえぬのとけさそひて松かえの花に先たつはるの色かな	全
	あらくまのあらしき心もしはせ山しはしは春にわけしらなん	土 満

春 園歌	かり人の手かひのいぬの綱手繩なかきはるひをくらすのへ哉	春 海
春 鳥	春どてもとまらぬ隙の駒なるをのとけきかけどきかたのみし	蘆 庵
春 聲	かけろふのもゆる夕へは春野行うしのあゆみそいとゝのとけき	千 蔭
春 色	山かつのそのふの花の雪のうへに聲なきしかのわともみえけり	蘆 庵
春 虫	春鳥のよその木するゑにあくかれて古巢の花はしらすや有らん	土 満
春 人	ふるとしもきし鶯それなからあらたまりぬるはるのはつ聲	蘆 庵
春 主	はるの色はあまねくも有か大空も野山も海もおなしみどり	長 流
春 心	うちとけんものともみえず春かけてふるえにのこる雪のみの虫	春 海
春 車	うらくととかすむはるのは飛蝶のつはさにのみや風のみゆらん	全
春 舟	花にそふ朧月夜やなくさまんさらしな山のはるのさとひと	契 沖
春 鐘	くれぬとて月にも人はかへりにきよるこそまされ花のあるしは	全
	そことなく野へにくらしつ花をどひ鳥をわけふこゝろくに	春 海
	九重のゆきもけさはあら玉のはるのくるまのおどそのとけき	宣 長
	かけさへもにはふみきはに舟よせて磯山もどの花をみる哉	千 蔭
	入相のかねははるしもうかりけりはかなさみせて花のちれゝと	たみ子

春 衣	朝霞はるのころもえうすなから遠山みればやへにたゝめり	契 冲
春 床	ひとりのねのどこもうからす枕つてつまやの軒の梅かをるよは	千 蔭
春 苞	さくらかりわか袖なからちる花をはらはてけふの山つとにせん	春 海
春 山 旅	しなのちのれきその山の山さくら又もきて見んものならなくに	真 淵
春 旅 泊	梅咲やむろのとまりのかちまくらふるさと人の袖のかそする	千 蔭
春 遠 情	いろくの袖ふりはへてみやこ人今やさかのにわかにつむらむ	枝 直
春 述 懐	何事のあかすといはんやそちまで風なき花も幾春かくし	全
春 懷 舊	みたれつゝ物おもふころは常よりもうちまもらるゝ青柳のいと	たみ子
春 無 常	はるの日もはやく暮ぬとなく哉ふみる道のいそかるゝ身は	宣 長
春 神 祇	いく春の山の霞をへたてきて見しよの花のとはさかるらむ	枝 直
	こん秋とちきりもおかて別行かりはこのよのならひなるらん	千 蔭
	大王の園のまつりにとる弓のはる日たのしきかみあそひ哉	真 淵
	ささらさやみとしの神のしめ繩はたりはの秋をかくるなりけり	古 道
	一しほのみどりこそへてふたら山神のみまへの松そさかゆく	枝 直
	このへの神のつかさの花しつめよのうきともちりていぬめり	千 蔭

春 祝	はるとにかよふつはめのうつろはぬやとをどこよと契れくらし	古 道
陽春布徳	雪もきえわかかなもえてむさしのゝはるの光を限りしられぬ	春 海
春色浮水	こはりぬし志賀の浦なみ立かへり白ゆふ花に春はきにけり	真 淵
江上春興多	よる涙もにはふ入江のうめ柳いつれのかけにふねはつなかむ	春 海
萬物感陽和	大路行くるまのおとも百鳥のこゑのにはひもはるめきにけり	全
春水満四澤	はるの日に氷とけゆく澤水のけふりやよもにかすみそむらん	全
家々翫春	みやこ人はるはいどなし花鳥のすさひにたれもとひとそれつゝ	春 海
心酔酌春酒	さとつゝささへつりかはす百千鳥なれさへ御世の春やたのしき	千 蔭
椿露八千春	日長さをおもひなくさむ盃にいく度花をうかへてはみし	春 海
軍風暖入塵	のどけさをくみてこそしれ酒の名もひしりの御代の春に逢つ	千 蔭
志賀花園蝶	しきしまのやまとと葉の玉椿や千代さかえんやどそこのやど	全
正 月	うめかゝををすのすけきにさそひきて袖さむからぬ春の朝風	全
二 月	霞たち梅のかをりもまさりゆくむ月のそらそうれしかりける	筑波子
	雪もけぬ花もにはひぬ春はたゝきさらきにのみあるへかりけり	枝 直

三月 水無瀬川 春曙 櫻川 志賀浦 志賀花園 深島 香取浦 寶山 蘆庵里 千葉野 鹽竈浦 未松山 難波江 吹上濱 淡路島

れく山は猶さく花も有へきにのこりすくなきはるとなりぬる 菅根子
ありてゆく水はまさらすみなせ河霞なからのはるさめの空 枝直
よどもになかれて久しさくら河花のしつくをみなかみにして 全
から崎やかすみにもる松の色をりくみする志賀の浦風 千蔭
大宮をこしきけは花そのにあやなき袖をふれんものかは 全
かすみたつ春のしほちをみぬ人やうき島の名はおはせたりけん 全
浪をたて霞をぬきにおる機のかどりのうらのはるはしよしも 全
ひろの山老木ももとは若櫻世にめてられし花にやはあらぬ 蘆庵
あま人のわかすむかたもたどらし霞むゆふへのあしのやの里 全
おもふとちのはの春にもえ出るこのてかしはのいつかひらん 全
しほかまの烟もかきりあるものをうらの名たてにたつ霞哉 全
松かけに咲る櫻は末の松したよりなみのこすかどそみる 全
船とめてなにはもわかすかすむ江に梅咲ぬらしにはふ浦風 蒿溪
吹上の名にたつ濱も風たえて霞はれせぬはるの夜の月 宣長
ふかくなる波路の霞日にそへてみるめも春のあはち島山 全

○夏部

首夏

花の色またそめさりし白妙のはしめにかへすなつころもかな 長流
暮ていにし春もしはしと藤波のちらぬほどこそなくさまれけれ 千蔭
白妙のたもとふりはへ宮人のあふひかさんつきは來にけり 春郷
はる霞わけしひとよをへたてにてこれゆく空に夏はきにけり 宣長
みしはるのなこりわする夏衣花のかどりは名のみなりけり 春海
木のもとに散のこる花やかきつめん昨日の春のわすれかたみに 全
梅櫻わか葉のかせもかをりきて夏もよしあるやどりなりけり 千蔭
れどもせて降しなかめの其まにはれぬや春のかたみならまし 枝直
ちる花のうきて流れしなこりにはうつる若葉もかけかをるらむ 千蔭
宮人のふたあゐのきぬにかよへはそ夏來て藤は盛なりける 全
こと花のはるを過してあらそはぬこすゑのふちの心たかさよ 全
けさよりの夏をせにとや咲かけし春こきのふのふちなみの花 蘆庵
花さかぬま木のどやまに春くれてかはらぬ色に夏こきにけり 枝直

首夏新樹

首夏朝

首夏待郭公

山家首夏

田家首夏

竹亭夏來

更衣

春花を待しはかりはまちもみぬ木の若葉のいつしけりけん 全
 なつ山やきのふの花の雪きえてわか葉に、はふあさ日かけかな 春海
 夏衣はるはきのふの花のかもなこりたつぬるそてのあさかせ 宣長
 衣かへうきもうれしくなるはかり山ほど、きすけふきなかなん 長流
 庵なから昨日の春の花もみつさてこそきかめやまほど、きす 眞淵
 山さとは夏のはしめそた、ならぬ花の人めもすきぬとおもへは 全
 やまさどと古巢にかへる鳥かねにあはれをそへて夏は來にけり 春海
 山さとのはらはぬ庭之夏なから苔路にまじる花も有けり 全
 かはつなく山田のくろのさしうへ木花さくころになりける哉 枝直
 をしみこしはるもいつしかくれ竹の陰には夏のこのましきかな 千蔭
 雪折のさむけかりしも夏の來て軒端の竹に風そまたるゝ 自寛
 山吹の花色衣ぬきかへてしろきひとへもめつらしき哉 契沖
 猶殘る花にや袖をふれてまし薄きかどりのきぬにはわれとも たみ子
 ぬきかふるせみの羽衣うすけれとあつさもよほす夏はきにけり 枝直
 くやしくも深くそ花になれ衣そてのわかれのあるをわすれて 春海

惜更衣

更衣惜春

朝更衣

貴賤更衣

寄更衣述懐

早夏

しらかさねするてふけふそ花の雪きえすもわれな麻の袂に 千羽
 ぬきかふるならひうらめし心からはるをへたつるけふの衣よ 宣長
 わたにちる花をうらみし心にもそめし衣はさすかかへうき 枝直
 なつにけさかへしとうときこゝちしてきならし衣なほそ戀しき 蘆庵
 雪とのみふりしゆかりのしらかさね夏來ても猶花はわすれず 宣長
 きのふにもかへまし物を花衣かさねせてをしむはるのわかれち 蘆庵
 きならせしはるの衣をぬきかへて又しも花にわかれぬるかな 春海
 雪とみしきのふの花の色にたによそへてけさや白重せん 千蔭
 花染のをしきわかれの露たにもかたみと、めぬそての朝風 宣長
 殿の内のよそひもかふる今日といへはみやつにさへに夏衣せむ 嵩蹊
 ぬきかふる袖もやさしなわさ衣しらかさねせし人も有世に 春海
 わひ人のおのつからなる薄衣をりにあへともきたるなつかな 長流
 おは舟に小舟引そへ隅田河出てあそはんなつはきにけり 古道
 花ちりてかれにしたれをよふこ鳥青葉かくれに聲の聞ゆる 全
 はとゝきすいつかきかんとまたきより思ふそ夏のはしめ也ける 土満

早夏鶯

咲残る花もやあると山ふかく入もてゆけはうくひすのこゑ
さらにななくねは雪につゝまるうの花かきの夏のうくひす
散のこる花にたくへてをしむ哉若葉かくれの鶯のこゑ
長流

社頭早夏

神まつる卯月さぬらし山もどのもりの柳にしめはへてけり
さかさすいつきの宮のわかづら吹わたる風のおもしろき哉
刺竹の大宮人のけふこそはくもゐの風をねにならすらん
春海

孟夏旬

神みそにつけしうみそのうちへて今も絶せぬけふのみてくら
いかつちのをかの名しるゝ雲よりたてつかひこ峯も轟に
真淵

大神祭使

神さふる杉のした道いくとせかおほみやひどのたちならしけん
みわの山杉のした道ふみわけてぬさとゆくとつかひさねかも
全

餘花

神まつるあすはうの日とみわの山みてくら使けふよりそたつ
花おそき山のとかけにすむ人はさくらをなつのものとみるらん
全

殘花

のこるやどわれこそけふはたつねつれ心長さはさくらのみかこ
心して風もふかなん春たにもさそて過しみやまさくらを
宣長

思餘花

はとゝきす尋ていうしみ山路になはさかりなる花をみし哉
はるにこそおくれし色はふりぬらめ青葉の山のはつさくら哉
長流

尋餘花

名もしらぬさどに出けりみ山には花やのこるとおくをつくして
なつ衣なほ山さむくたつねみんのこるさくらの雪にあふやと
枝直

賞餘花

なつ山のしけみかおくのしつけさに心のちらぬ花もありけり
はとゝきすたつぬる山のおそ櫻おもひの外にはるそのこれる
長流

山中餘花

手向山はるのこえゆく跡とへは今もさくらのぬさどこそみれ
分入しかひは有けりなつ山のあを葉か中の花のひともと
春海

深山殘花

おそくさく花なりけらし山寒きをきそのれくにみゆる白雲
世をいとふたにのいはりのれそ櫻時にきそはぬ心をやしる
枝直

谷餘花

松かけやしつえにかけしゆふ斗花こそこのれ神まつるころ
木かくれに花こそ殘れありて世のはてもうからぬ松にならひて
春海

松陰餘花

夏山のしけみに花やのこるらんそこはかどなく風のかをれる
山姫のいはひのこせる花なれやさなからはるの色をみすらん
全

餘花何在

餘花似春

殘花霽風

散のこる花のありかやしらすらんうかりし風のこゝろにも似す
枝直

殘花誰家

葉かくれの花をこそみれきのふかも恨みはてつる風のなこりに
千 際

殘花少

たれか住庵のかきねの花一木よそにはみえぬをのこして
蘆 庵

惜殘花

きのふまでのこるとみしもちりそひて青葉の底の花そまれなる
全

花落枝綠

わかぬまにわかれし春のかたみそとおもふ花さへ散んとやする
春 海

鳥思殘花枝

なにたちし花はあどなき青葉山それもあたにや秋はちらまし
枝 直

遲 櫻

きのふかも雲にまかひし花はいさみとりにつくは山しけ山
千 蔭

山 遲 櫻

きのふみし花はいつれの梢そとあを葉にたるとる朝戸出の庭
蘆 庵

花はなはのこれる枝に夏來てもふるすおもはぬもちどり哉

花はなはのこれる枝に夏來てもふるすおもはぬもちどり哉
千 蔭

うちむれてどはるゝ春を過しつゝひとりしつけきおそ櫻かな

うちむれてどはるゝ春を過しつゝひとりしつけきおそ櫻かな
全

おくれては物すさましくみゆる世に今もさくらのめつらしき哉

おくれては物すさましくみゆる世に今もさくらのめつらしき哉
眞 淵

をりどらにはひをうつせ遅櫻花のかどりのそてうすくども

をりどらにはひをうつせ遅櫻花のかどりのそてうすくども
春 海

やへかすみはれにし山のおそ櫻春をへたてゝみるもめつらし

やへかすみはれにし山のおそ櫻春をへたてゝみるもめつらし
宣 長

あしからの關の山路をこえくれはなつそさくらはさかり也ける

あしからの關の山路をこえくれはなつそさくらはさかり也ける
眞 淵

なとてかく春にもわはて山陰に木かくれてのみひとりさくらん

なとてかく春にもわはて山陰に木かくれてのみひとりさくらん
筑波子

新 樹

夏の來て昔にかへる玉かしはとるともつきしにひかゝみ葉は
眞 淵

新 樹 風

うつろおぬ色としみれは水鳥の青葉さす頃そ物おもひもなき
古 道

新 樹 露

さくらこそなほみやられるれその色とわかぬ若葉も花のなこりに
宣 長

新 樹 坊 月

花鳥の春のあはれをゆつる葉の若葉の露に風そかをれる
枝 直

夏くれはなつかしからぬ白かしも若葉のいろそなかめられける

夏くれはなつかしからぬ白かしも若葉のいろそなかめられける
千 蔭

きのふまで花にいとひし心さへ青葉にかはるかせのいろかな

きのふまで花にいとひし心さへ青葉にかはるかせのいろかな
蘆 庵

朝な〜ぬれて色そふ若かへてみどりそさへや露はそむらん

朝な〜ぬれて色そふ若かへてみどりそさへや露はそむらん
全

花にとひし軒はの梅の若葉さへ風いとほるゝゆふくれの露

花にとひし軒はの梅の若葉さへ風いとほるゝゆふくれの露
千 蔭

きのふけふ夏はきぬるをわか葉さすあすはひの木露を涼しき

きのふけふ夏はきぬるをわか葉さすあすはひの木露を涼しき
全

あすも又かけどたのまん夏木立月のためにはうしとみながら

あすも又かけどたのまん夏木立月のためにはうしとみながら
枝 直

はのみゆるかけもあをみて若葉さすかへての梢月そをくらき

はのみゆるかけもあをみて若葉さすかへての梢月そをくらき
蘆 庵

深山新樹

都人きてもをらねは若葉さへみ山さくらそれのかまゝなる 千 蔭

嶺上新樹

いくよしの宮木にもれてみ山木の老木なからに若葉さすらん 全

林新樹

かけしけきその名もいとゝしるき哉筑波高ねのわかばさす頃 全

若葉さすかた山林露ちりぬ花にいとひしかせのなこりに 全

三輪山や花より後のかけもよししけきかもとに若葉さすころ 春 海

庭新樹

それとみし櫻も今はあをこにて雲の林は名みのなりけり 宣 長

雨中新樹

なかめても心つくしはなつこたちちらぬ青はの庭のゆふかせ 全

むらさめにぬるゝ水枝のあえれさも昨日の花におどりやはする 千 蔭

雨にそふ色をいつれどわか葉さへ中にさくらの露のはえある 春 満

庭樹結葉

あめそゝくかた山かけの夏木立いまひとしほのみどりをそみる 春 海

陰ふかむ青はのさくら若楓夏によりてもわかぬにえかな 眞 淵

庭樹緑滋

いつしかと木ゝと青葉に成にけり庭のこけちに色をかはして 枝 直

縁樹連村暗

軒近き木ゝのわかばの日にそひて縁にこもるやとそしつけき 全

卯花

なつ木立しけりあひては山本につらなるさともみらくすくなき 蒿 蹊

月影にさなからまかふ卯花はかつらの枝にさくかとそみる 長 流

さむからて空にしられぬ白雪はあらしとあもへどまかふうの花 契 冲

咲出てかつ散からにうの花の雪にもあをいとふころかな 千 蔭

ささしよりつもる日敷のはとみえて卯花垣そゆきになり行 春 海

此さどのうの花月夜よゝしとはつけぬかきねも人そとひくる 宣 長

暮見卯花

夕月夜さすや垣ねの卯花といりての後そ空にしられぬ 契 冲

夕卯花

夕月夜かきまもとめてほのめくやはつうの花のさけるなるらん 長 流

くれぬとてねくらにかへる鳥の聲よそにきゝなす垣のうの花 枝 直

夜卯花

雪の後はたるの先のたかまどに卯花月夜今たのむらん 契 冲

なつのよの霜とみえつゝ月かけのおきまとはせる庭のうの花 長 流

卯花混月

月をさへ花かどそみるうつ木垣まかへしよこのこゝろならひに 千 蔭

卯花をさなからかこふまかきには月のひかりもへたてさけりけり 春 海

卯花似月

月とみてまかはぬ色に咲しよりうの花かきねくもるよそなき 春 満

うの花のさけるあたりを心せよ月夜よしとてひともとひけり 蘆 庵

卯花如涙

涙の色をうはひてなどか玉河のひかりをそへし岸のうの花 全

島津鳥其名に通ふうの花も色は涙とそみえまかひける 契 冲

卯花似雪
垣卯花

うつ木さくかた山里のわけはのは雪にしらめるこゝちこそすれ
 あはれなる賤かふせやのうつ木垣花見んためにおほしやはせし
 山吹のうつろひはつる垣根よりさかりをかへて咲るうのはな
 夕月かけさせとさゝねと卯花のさけるかきねはしるくそ有ける
 たどりゆくさとのかきねはうの花の雪にも人のあどつけてけり
 すむやたれ月と雪とのあはれさへうの花垣にしめしこのやど
 月雪を心にしめてすむやたれうの花かこふやまのしたいは
 人心あなうの花のささしよりかいま見さへもまかせさりけり
 しろたへに卯花さけりみこしちの雪にうもるゝやとゝみるまで
 山かつのかきはは又もとひてみんうの花くたす雨ふらぬまに
 うの花は咲にけらしなまれにとふ都の人のそととみるまで
 ふみわけてとひこし雪のおもかけにうの花さけるをのゝ山さと
 あしひきの山さとひたる垣根にはところえかほにさけるうの花
 ひさかたのかつらのさとの卯花はやみもわかすや咲わたるらん
 きえて後ちれる櫻に見し雪を又みよしのゝさとのうのはな

春海 千蔭 契沖 春郷 宣長 千蔭 春滿 春滿 千蔭 春滿 全 春海 千蔭 全 土滿 宣長

閑居卯花
里卯花

山家卯花

卯花藏宅

卯花隔隣

卯花傍家

卯花誰垣

田家卯花
溪卯花

わか門のわさ田うゝへき日を近みかきはのうつ木花さきにけり
 ひかりなき谷とはいはし夕やみも月かどみせてさけるうのはな
 谷風をいはねにひゝくおどにしてうちよする浪はなひくうの花
 たに陰はうち出る浪のおどはせて白きをみればさけるうの花
 山かつらゆふこえゆけと卯花のかけふむ道はくるゝともなし
 わくらはにどめくる宿のうの花のこのもかのもに道まどふなり
 ゆふやみの道もたどらし賤のをか山田のそはにうつ木さくころ
 すきかてに人やをりけんうの花の雪にあどあるさとのかよひち
 うの花の月をくろ木におひそへて山路たどらすかへる柴人
 ひまもなくさとの卯花咲にけりとこんかさねも道みえぬまで
 下河の水は今しもこほらしをうの花月夜雪とさゆらむ
 谷川の水にうつろふうの花はぬのさらすとやひとのみるらむ
 うの花のかけ行河をかすかなる雪のした水もれしとかりに
 散はてゝしける櫻の木の下になはうの花の雪そのこれる
 しけりゆく楓かしはのこくれよりしろくみゆるやさけるうの花

萬 蔭 たみ子 春 滿 全 全 維 寧 千 蔭 宣 長 長 流 自 寛 春 海 契 沖 蘆 庵

樹陰卯花

卯花藏水

水邊卯花

水郷卯花

卯花隔路

樵路卯花

行路卯花

路卯花

雨中卯花

名所卯花

卯花盛久

灌佛

世のなかをわなうの花の咲ころは空さへとになかめかちなる
此頃は卯花山になみこえて水上しらぬたきそおちくる
契沖

夕月にまかひし花のうつ木垣なほありわけのかけもへたてす
春満

ひんかしになかれて久しおれ出しほとけにそくけふのまし水
千蔭

御佛のわらはれそめし法の水なかれて世の人もくみけり
春海

諸人のけふのためしの舟つゝみつとふやのりのみなどなるらん
全

雪の山出しし月のかけとめて卯花垣にいまもうつろふ
自寛

神祭とて

家に神祭

神まつり

葵

玉かしは若葉さしけりすへ神にひもろきまつる時しきぬれは
千蔭

うの花をゆふにとりなし庭中のあすはの神をいさやいはむ
全

夏たてはもりのまさかきしける也もふとる袖もかをるはかりに
春海

玉たれのすける心におのつからあふひてふ名はけふそかゝれる
長流

日のかけにむかふあふひをみるくも人は心の根をそまもらぬ
契沖

あふひくさしらかにかけて神まつる心もさこそわかへるらめ
蘆庵

おはつかきたれにあふひをかけぬらん物見車のをすのすきかけ
千蔭

小車に葵のかつらかけてけり神まつるけふにめぐり來ぬれは
春海

葵露

挿葵

簾葵

毎年懸葵

賀茂祭

新竹

神まつるあふひの露の玉かつらかけてひさしきためしなりけり
枝直

かみ山やあふひのかつらとる袖にまつかけそむるけさの朝露
宣長

葵くさけふしもかさすもろ人にかみのめくみの露かゝるらむ
千蔭

みしとるの梅も櫻も思ひかけすけふは涼きをすのあふひに
春海

神山の朝露なからかけわたすをすのあふひの色そすしき
千蔭

かみ山の二葉のあふひ幾年のけふをかけつゝ根さしそめけむ
全

年とににかけていく代かたのましけふのみわれに葵てふなは
春海

年ごとにけふのあふひをかけまくもかたしけなしや賀茂の氏人
真淵

神山にたえせぬものもろ人のかくるいのりとあふひなりけり
枝直

いく千たひみわれのけふにあふひ草う月の中のとりもつくさて
全

たれもけふもろ心にももろかつらかけてや千代と神祭るらむ
春満

ちはやふるわけいかつちの神代より葵のかつらたえすも有かな
土満

かひ先に千代をしめつゝかのつからのとかにみゆる園の竹の子
千蔭

行すゑの千尋をたのむ竹のこはかひ出るよりいさましきかな
蒿蹊

きのふよりけふはよ長きわか竹にかねて千ひろの陰もみえけり
千蔭

郭公

橋のかをれるやどの夕くれに二こゑなきて行はとゝきす 眞淵
 ほとゝきすたゝ一こゑにみし春の花のなこりもわすられにけり 春海
 むらさめのすくるみ空の雲のわしにおくれ先たつはとゝきす哉 千蔭
 思ふとちかたらふよひのはとゝきす心とけてやこゑをしまぬ 蘆庵
 さみたれのなかめまされる夕くれにうたてもなくか山郭公 筑波子
 ほとゝきす山彦ならはたつねわひよふにこたふる聲はせましを 宣長
 人なみにまつとも我をとひはこし尋てきかむ山はとゝきす 蘆庵
 郭公めぐりあはねはうの花をさすかくるまのかへるさやうさ 自寛
 ほとゝきすたつぬる山のかひなく都の人にかゝかたらむ 千蔭
 はつこゑをみやこにいそけ郭公山かつならぬひとこそとまで 眞淵
 なつくれはなにはれもはすあし引の山はとゝきす先またれぬる 古道
 まちわふととやつてましくひすのかへるふるすの山郭公 枝直
 人傳にきゝそめにけりほとゝきすまちよわるども又やたのまん 春海
 うの花に月こそこのこれほとゝきすこのあけはのを過すへしやは 千蔭
 さつきこそあくまできかん郭公またしといふもまつにさりける 枝直

尋郭公

遠尋郭公

待郭公

漸待郭公

久待郭公

年々待郭公

夕待郭公

夜待郭公

郭公勝待月

對月待郭公

終夜待郭公

曉待郭公

待郭公空明

連夜待郭公

每夜待郭公

雨中待郭公

咲わへぬうの花かきにまちそめてさかり過行やまはとゝきす 全
 こそきゝし頃とおもへはかた時もまちたもまれぬ山はとゝきす 春海
 こりすまのうらみつゝまつ郭公つれなかりしもこのころ 九み子
 郭公このゆふくれのむらさめにまちえてきかは物とおもはし 全
 つれなきもえこそうらみね郭公なかたのめたるゆふへならねは 蘆庵
 なきぬへき雲間の月もむらさめの空たのめあるほどゝきす哉 宣長
 郭公今もなかなん月かけのいさよふはとはかきりありけり 千蔭
 なつの上や霞へたてぬ月にたにものおもはするはとゝきすかな 全
 まちわひてふすかどすれと郭公なかぬにあくるしのゝめの空 宣長
 有明の月まちいてゝつれなきのいとゝしらるゝやま郭公 全
 ゆめにたにきくよはそなき郭公やすいもねすに待しわかせと 蘆庵
 郭公かくていくよのむらさめを空たのめにはなして過へき 春海
 一こゑもきくとはなしに郭公まつにねぬよの敷そつもれる 宣長
 よひゝにまでとつれなき郭公いかにしのふるはつねなるらん 土満
 しのひても一聲はなけ郭公まつよひすくるむらさめの空 九み子

移居待郭公

名所待郭公

樹下待郭公

對藤花

待郭公

對卯花

待郭公

未聞郭公

五月末

聞郭公

待聞郭公

人傳郭公

初郭公

待わひてうらむるよりは郭公おはかるかたにやとやかへまし

なきさはの森にまたはや郭公名にたかはすはきにもそきく

聲さかは涙かさむとまつかけの車かひなきやま郭公

藤浪のさくをみしよりあし引の山郭公かけぬ日はなし

とさらにうつ木垣してたれをしもまつとかおもふやま郭公

うの花にやとのまかきはうつもれぬこゑなへたてそ山郭公

郭公うの花垣にまつわれを徒にしてむかふとやみむ

有明の月にもなけて日かすのみ空に過ゆくやま郭公

つらからはたか名かたゝん今よりはまたしさつきの山郭公

あれまつと花橋をうつしうゑて聲さへにはふやま郭公

なほさりにわれやはまたし郭公ねたくも人に先きかれけり

さどわきし恨はわれと郭公聞つとつくるひともなつかし

めつらしとかたるはつねも人傳にきけはかひなき山ほとゝきす

郭公ねさめにたどるゆめよりもひとつてのみそいやはかなかる

月におもひ雨にまつよの敷をへて初音うれしき郭公哉

契冲

全

宣長

長流

千蔭

全

契冲

宣長

蘆庵

枝直

全

春滿

千蔭

春海

うの花の雪のかきねの冬こもり思ひかけぬをはつ郭公

雲まよふゆふくれとの空たのめかきりわれはやけふのはつこゑ

散のこる花をたつねて郭公あを葉かくれのはつねをそきく

郭公しひてまたすは人傳にあすこそきかめよはのはつこゑ

はのかなるはつねもよしや郭公まぢあへぬ人はきゝあへぬ哉

郭公はつこゑきけはめつらしき友まぢえたるこゝちこそすれ

郭公きゝつとかたる人もなしはつねやわれに先もらしけん

郭公さやかに名のるひとこゑをきゝそめてこそいやまたれけれ

かくしつゝをちかへり来てわか爲にむかしかたらへもと郭公

みねにおふるまつは千とせのこゝちして山郭公一こゑそきく

物ねもふわれならなくに郭公なかなく聲をさけはわひしも

郭公なくこゑきけはあやめ草玉にぬくへき時やきぬらむ

郭公ほど過ぎてきくわかやどのけさのはつねやよはの古聲

さたかにえきゝもわかれすむさしのゝ野末に今やなく郭公

千町田をへたてゝきけと郭公物にまされぬけさの一こゑ

長流

千蔭

蘆庵

全

春滿

千蔭

春海

全

常樹

春郷

自寛

長流

枝直

全

近聞郭公

両方聞郭公

年々聞郭公

夕聞郭公

薄暮聞郭公

暮天聞郭公

夜聞郭公

闇夜聞郭公

曉聞郭公

深夜郭公

なれをしもまつよふけゆくうたゝねの夢おとろす山郭公
 山路へしかひは有けれあし引のかなたこなたに鳴郭公
 みねにをに中のやしろをへたてつゝなくやいなりの山郭公
 としのはにまちえし人はふりぬれどふりせて名のる郭公かな
 郭公いまたたひなる草枕けふやよどのにゆふくれの聲
 郭公なきこそわたれ夕月のかけかすかなる雲のはたてに
 月れそきゆふへのくものたえまより先聲もらず郭公かな
 なをまつとねさりしよはの敷はとはこゝにのみなけ山郭公
 さく度にねぬよそたほき郭公今ひとこゑとまちならひつゝ
 たつねてもまたきかさりし郭公ねさめをりよきよはの一聲
 五月やみう川のかゝりさすよはゝなれもせになく郭公かな
 郭公をりしりかほに鳴ぬめりものおもふやとの曉の空
 郭公よふかき雲の絶間よりおちゆく月をしたひてそなく
 夏のよのふかくさ山の郭公ふしみの夢のあとになくなり
 郭公しのふ心やゆるふらん人しつまれるよはになくなり

全 全
 春 春
 千 千
 長 長
 春 春
 枝 枝
 春 春
 千 千
 長 長
 春 春
 全 全
 長 長
 春 春
 全 全
 長 長
 蘆 蘆

月前郭公

夢中聞郭公

夢後郭公

郭公驚夢

寢覺郭公

曉月聞郭公

曉郭公

月かけは眞砂の霜の深きよになつをこどわるやま郭公
 おなしくは今一こゑもいらぬまになけや月夜のやま郭公
 郭公月の桂のえたにゐてなけはや聲の空にさやけき
 夕月のなかはかくるゝ山のはをなきてすき行郭公哉
 一こゑもゆめになせとや待わひてまどろむほとに鳴郭公
 おもほえすきくそうれしき郭公をりあはれなる老のね覺に
 一聲にやかてさめけり郭公まつにたゆまぬたまくら夢
 まちたゆむゆめの枕の郭公さむれは聲のどほさかりぬる
 ねさめすはさかまし物か郭公おいもうれしきよはのひとこゑ
 ひとこゑによそのねさめの袖をさへおもふもあやな山郭公
 待あかす心くらへにまけにけり有明の月になく郭公
 横雲のわかるしみねの郭公たかさぬゝのなみたそふらん
 やこゑなく鳥も有明の月かけに二こゑもせてゆく郭公
 よひの雨につれなかりしは有明の月やまちけん山郭公
 夕月のはしるなからに郭公かはたれ時のこゑをさく哉

枝 直
 宣 長
 契 冲
 千 蔭
 春 滿
 春 海
 高 蹊
 蘆 庵
 千 蔭
 春 海
 蘆 庵
 た み 子
 高 蹊
 千 蔭

曙郭公

横雲のにはひてあくるそなたより聲はなやかになく郭公

全

朝郭公

玉くしけ箱根の山の明ほのにふた聲名のる郭公かな

春海

夕郭公

しのひねをよはにはなかく郭公など明ほの空はまちけん

宣長

夜郭公

郭公なきて過ぬとみし夢をうつゝにかへすけさのはつ聲

枝直

郭公一聲

郭公鳴てすきゆく一こゑのあとにてりそふゆふつゝのかけ

全

郭公一聲

郭公わけぬよのまといそくらんなくひとこゑもしのひねの空

宣長

郭公一聲

をち返りなくともあかし郭公つれなかりけるよはの一聲

枝直

郭公聲珍

いくたひのかたらひくさにいひいてんたゝひとこゑの山郭公

春海

後聞郭公

めつらしとれもふ心にはとゝきすはつ音を夢となはたどるかな

全

忍音郭公

さためつや世人はいかに郭公ゆめかうつゝかよはのひとこゑ

宣長

郭公幽

しのひねは中つらし郭公したまつほどの心いられに

春海

郭公幽

うちとけていつかきこえん郭公卯花垣の雪のしたこゑ

長流

郭公聲幽

しつかなるね覺ならずと郭公さゝもさためしをちの一聲

董庵

郭公聲幽

きゝつとまれもひさためす郭公今一こゑはしのはすもかな

春海

たかためにしのひねなれば郭公雲も夜深き空に過行

春満

郭公過

五月雨に雲間の月のほのかにも名のりて過る山はとゝきす

古道

郭公早過

東屋のまやの蔀をあけかたの雲路すきゆくはとゝきす哉

千蔭

郭公未飽

梓弓やよやまてともいはぬまにはやくも過るはとゝきすかな

契沖

郭公未飽

はとゝきすなくやさ月の橋の花ちるころのあかすも有かな

筑波子

郭公未遍

なれゆかはあくをならひの人の世になはめつらしき郭公哉

春海

郭公未遍

さどわかぬ月見てかこつはとゝきす聞つる人もありわけのころ

宣長

郭公遍

さのみやはうらみはつへき郭公さゝつるひとのかすそすくあき

千蔭

郭公遍

はとゝきすうとかるさとはあらずともこの橋をやとゝさためよ

春海

郭公聲遍

はつこゑはたれにしのひし郭公今はさなかなぬ里もなきもの

土満

郭公語少

よひのまにはのかたらひし郭公又たになかてわけぬこのよは

蘆庵

郭公頻

このさとはさらのたひもあへぬまで過ればさなく郭公哉

眞淵

郭公聲頻

秋ちかみこゑもをします郭公ふるすにかへるわかれつくらん

枝直

郭公數聲

郭公こゑのたえまもなつ引のね引の糸のみたれてそなく

蘆庵

郭公稀

やとりせし花橘も實になればよかれかちなるやまはとゝきす

枝直

郭公留客

はとゝきすなかなくこゑに山かつの垣ねも人のすきかてにする

蘆庵

郭公如舊

雲間郭公

雲外郭公

雨中郭公

雨後郭公

遠郭公
近郭公

この夏さゝもふるさていとしくことしまたるゝ郭公かな
 村雨のなこりあしとくゆく雲に聲もかくれぬほとゝきすかな
 あけはのゝ嶺たちわかれ行雲にこゑはのこれる山ほとゝきす
 夕月やいさといひけんかけもるゝななしくもまになく郭公
 うき雲にかけかくしぬる夕月のゆくへをとふか山ほとゝきす
 立へたつ雲のよそなるひとこゑはしたふかひなき山郭公
 やよしはしかさやとりせよ郭公ひとむらさめにふり出ること
 橘の花ちるくれのむらさめにをりあはれなるほとゝきす哉
 あめ過てたゝひとこゑは東屋のあまりつれなき郭公かな
 雨すきてあやめ露ちる軒はよりなくねもかをるほとゝきす哉
 ゆふたちのはれゆくあどにたへにしをなきてよこさる郭公哉
 さみたれもかきりわれはそほとゝきす鳴一こゑに雲ものこらぬ
 あめはるゝ軒のしつくと涙にて鳴音おちくる山ほとゝきす
 郭公さたかなるねをゆふくれの雲のよそにたれか聞らん
 山遠くたつねし聲のけふこゝに近まさりするほとゝきす哉
 長流 春海 千蔭 全 春満 蘆庵 千蔭 自寛 千蔭 全 枝直 宣長 千蔭 長流

山郭公

郭公出山

山路郭公

麓郭公

樵路郭公

樹間郭公

谷郭公

森郭公

杜間郭公

なつくれはねなしこすゑも高砂の山ほとゝきすこゑはるかなり
 舟とめていつくときけは磯山の松のこすゑになくほとゝきす
 ゆふたちの雲もかゝらぬ山のはにかのれふりいてゝ鳴郭公
 遠山のおくよりいてゝ郭公たひをくるしみたか爲になく
 一こゑはみやこにもさく郭公山路のかひにをちかへりなけ
 わし曳の山路をゆけはほとゝきす雲よりおくの梢にそなく
 峯のいほにとゝひすてゝ郭公ふもとのくもに又名のるなり
 郭公とはの山柴とりならしなれてや賤かきゝふるすらん
 郭公しける木の間をもる月のたえゝならてきくよしもかな
 をりゝはさ月まつはふしのひねももりの木のまの郭公哉
 もらすへき人めたになき谷の戸に何郭公こゑしのふらむ
 さ夜中にたれをとふとか津の國のいくたのもりに鳴郭公
 郭公おほつかなきを我ならてきくやたれそのもりの一こゑ
 月かけはよそなるもりの木かくれに鳴音さはらぬ郭公かな
 郭公しのたのもりにはふくすの尋くれはそひとこゑもさく
 全 蘆庵 枝直 宣長 契沖 春海 契沖 春海 全 契沖 春満 蘆庵 千蔭 宣長 契沖

岡郭公

姿さへさやかにもみすほとよきす月にむかひの岡になくよは

春満

野郭公

郭公あくよわらめやあまたとしならしの岡になきふるせども

千蔭

原郭公

さととにまつなるものと郭公なそしもひなのあらのにはなく

枝直

霧中郭公

ひさしのよひろさしられて郭公きよにきつれと聲のはるけさ

宣長

旅中郭公

むらさめにつはたしはれて郭公山田の原のすきかてにきく

千蔭

旅宿郭公

わしひきの山こえのゆき郭公なれもや旅をうしと鳴らん

土満

關路郭公

郭公おのかさ月もたひ人のやとりせんのはこゝろしてなけ

土満

海邊郭公

み山路をかたらひくらす郭公聞にと出したひならなくに

たみ子

郭公なくひとこゑにたひち行くその人の袖ぬらすらん

千蔭

さらすともみやこの夢もみしか夜をなけやかりねの山郭公

宣長

むらさめとすくるすたかの關の戸におのれふり出てなく郭公

春満

東路にたれをどふどか郭公關こゆるきのいそくなるらん

土満

わけそむる箱根のせきのほとよきす一こゑ三聲先なのる也

春海

世はなれてかたらふ聲をきくやたれすまのうしろの山郭公

春満

磯郭公

郭公伊勢島かけの一こゑはひろへる玉のこゝちこそすれ

春海

磯邊郭公

ふるさとへことつてはせよ妹かしまさしも過行やま郭公

千蔭

浦郭公

郭公今ひとこゑはなれその波のまされにとほさかりぬる

蘆庵

泊郭公

しのひねもあらはになりぬ郭公なみこすいその松にならひて

枝直

舟中郭公

したふへきかたも浪間に聲おちて浦わはるかにきく郭公

春満

船中郭公

一こゑにおなしとまりの百舟のねさめをおもふ郭公かな

千蔭

水路郭公

郭公おのかさ月の山川をこゑにのりてもさしくたすかな

眞淵

渡郭公

郭公いそ山もとに聞すてよかのれ過ゆくわけのそはしに

宣長

河上郭公

郭公鳴一こゑをつなてにてみをひきはるとねの河舟

千蔭

名所郭公

よと河やくたす夜舟のまくらよりあどより名のる郭公哉

全

名所郭公

くるしさもわすれてそきく郭公さのゝわたりのむらさめの空

宣長

名所郭公

すみた河堤にたちて舟まては水上とほくなくほとよきす

千蔭

名所郭公

なきすていまいとこゑは泉川とほきわたりのやま郭公

宣長

名所郭公

つくは山花たち花のささしより鳴こゑしけき郭公かな

眞淵

名所郭公

名にしおはし五月すくとも時わかすなけや常磐の山郭公

宣長

社頭郭公

寄神祇郭公

古寺郭公

山寺郭公

故郷郭公

古宮郭公

里霍公鳥

市子規

山家郭公

たかさどに契りかけはか郭公なのりて過るせきのふち河
 こひしくはきてもきけとや郭公三輪の神杉やとしめてなく
 過やられてこゝになかなん郭公北野の松のひとよはかりは
 朝くらのこゑすみわたる神垣に郭公さへ名のてりそゆく
 はつせ山みのりの文に聲そへてよたよとなふる郭公かな
 都へにとつてやらんひえの山ふもとのくもになく郭公
 橋のしまの宮のあともめてなくはむかしの郭公かな
 郭公しのひねもらせ宮人の袖のゆかりのふちはらのさと
 ふるころもきならのさとの郭公さならしけん人やこひしき
 みかの原布當の宮のあともへて鹿背山のまに郭公なく
 花散てしけみにこもるおく山のさとをもかれすとふ郭公
 しのひねをあらぬ名のりにまかへとや市路になきて行郭公
 一こゑになにをかへまし西の市の夕くれちかくなく郭公
 椿市のやそのちまたにをちかへりなくやはつせの山郭公
 昔わかにはつね尋しほどよきす今はのきはの山にこそきけ

枝直 土満 枝直 千蔭 全 真淵 千蔭 全 枝直 千蔭 全 蘆庵

田家子規

閑居郭公

閑中郭公

行路郭公

郭公鳴橘

野卯花
田子規

さひしさにたへてすめとやとひすて、都にむかふやま郭公
 みやこよりはとくき、そめて郭公ともしくもあらず夏の山住
 み山へを鳴てそいつる郭公たもひ入ぬるひともあるもの
 はとよきすなきそとよむる都人吾山ひこにまひはしてきけ
 かつしかやわさ田のさなへとるたこか聲にきそひて鳴郭公
 郭公なれも時とやみたみらかいそくさなへにあらそひ鳴も
 かはつさへあはれとき、し小山田にしてのたをさの夕くれの聲
 き、にどて人もこそくれかくれかになく聲たかき郭公かな
 あふち、り郭公なく夕くれはこゝろよわくもとほそ明けり
 とも、なき宿とのみやはいひはてん山ほとよきす月になくよそ
 れくれすもゆかましものをほとよきすいつちの空に鳴て過けん
 聞すて、過來しあとのほとよきすかめもなつのに又やなくらん
 はとよきす筑波ねしけく橘の下吹かせに今やなくらむ
 たち花にねくらやしめしほとよきすこゑうちかをる明ほの、空
 郭公やとりとらなんらの花のまかきを雪の山とみつよも

枝直 土満 千蔭 全 土満 長流 宣長 千蔭 春海 筑波子 宣長 契沖 千蔭 全

卯月郭公

さ月はおいその森のはとゝきす若葉のはとのこゑをさかはや
なつの来てまたゆふ月のほのかにもしのひねになく山郭公
契沖

閏四月郭公

神まつる卯花垣にゆふかけてはのかにそなくやまはとゝきす
はとゝきすかくつれなくて過ぬるは又のう月のあれなるらむ
古道

五月子規

此ころはれのかさ月どなくこゑもしけき青葉の山はとゝきす
郭公聲のあやめもわかやとのけふのつまとやきてかたるらん
宣長

五月日郭公

とめもせしかへらはかへれ郭公われも入へき山にやはあらぬ
郭公よふかきこゑにわかこふる人のねさめもおもひこそやれ
契沖

郭公歸山

あふ坂のせきやこえけん郭公あつまにかよふよはのひと聲
まぢよわりひきたゆむよのつまとになくねそへよととふ郭公
全

郭公催戀

よひくのかたらひ人となりにけりとのねさそふ山はとゝきす
今よりのいくよの夏をかさぬとも聲はふりせしやまはとゝきす
千蔭

寄郭公夜琴

わかやどにやとりてそなけ郭公ぬれし雨夜の袖くらへせん
郭公よたゝ鳴ねにならへどやものおもふやどを過かてにする
藍庵

寄郭公述懷

あしひきの山はとゝきす今そなく世をうの花のにはふあたりに
土満

寄郭公祝

いかになほむかししのへと郭公花たちはなにきなくふるこゑ
常世より珠城の宮にかをりこしかくのこの實そ花さきにける
枝直

盧橋

我園にどこよのたねをおはまのいにしへのふ夏をこそまで
そことなくかをるもうれし橋の花ちるさとのあけはのゝの空
春海

栽橋

さたかなる昔の夏はさめしよのやみのうつゝにはふたち花
みしゆめのなこりしのふの軒端より昔をしるくかをるたち花
宣長

盧橋風

うつしうゑし花橋にまきむくの珠城のみやのむかしとはゝや
たち花とめのまへなからにはひもて過にしかせそむかし也ける
春海

盧橋薫風

上つ代に常世の風をつたへ来て今園もせにかをるたち花
いにしへをしのふ軒はの風過てひもとくふみにかをるたち花
千蔭

雨中盧橋

たち花のよのまの露もさなからにちらぬ斗の風そかをれる
はとゝきす笠やとりせよ夕くれの雨うちそゝく庭のたち花
枝直

曙橋

たち花の花咲やどのいつそあれと雨のゆふへそよにゝさりける
はとゝきすなく一聲もにはふらん花たち花に明るしのゝめ
春海

曙橋

しのゝめの明行そのゝ朝しめりこはるゝ露もかをるたち花
千蔭

曉 盧 橋 なほいか昔しのへとたち花のわいのねさめにほひきぬらん 宣 長
 曉更盧橋 橋にかたしくそてそかをるなるいづもねさめのかしらましかは 春 海
 盧橋驚夢 しはしみる夢路なやます袖の香もおなしむかしの軒の橋 宣 長
 夕 盧 橋 橋に見し夢さめて見ぬ世をはしのふもはかなやみのうつゝに 春 滿
 夜 盧 橋 おもほえずすたれうこかす夕風に袖のかたどるのきのたち花 春 海
 橋 薫 たち花のかけさへみえて軒はもる月のはひもふかきよのそら 宣 長
 盧橋薫袖 たち花の花ちるやとにひと夜ねんしのふ昔の夢やむすふと 春 海
 禁庭橋 橋のはなちるころは木のもとのこけちの露も香にほひけり 全
 故郷橋 たちはなのもどにかけふむ人しけみ袖のあまたにかをるころ哉 土 滿
 籬 橋 ゆふ風にわれなからわか袖のかもなつかしきまてにはふたち花 宣 長
 盧橋薫枕 子規なくひとこゑにそはたてし枕さためぬのきのたちとな 契 沖
 禁庭橋 もゝしきや花たち花のおひ風に右のつかさの袖かをるなり 春 海
 故郷橋 さらてたに昔こひしき故郷をいかにせよとてにはふたちはな 宣 長
 籬 橋 のきちかき花たち花はたてなからさつきの玉にぬきてしもみん 自 寛
 ひかしたれとはかりたにも後しのへわか袖ふるゝのきのたち花 宣 長

盧橋薫簷 夢にたにみぬよの人の袖のかもしのふにちかきのきのたちはな 春 滿
 庭 橋 ひともとの軒のたち花咲しよりみつはよつはに風そかをれる 千 蔭
 閑庭橋 香をとめてとはれやすると窓近くうゑしたち花さきにけり 枝 直
 依橋客來 今しはとむかしをすてしかくれかになほしのへとやかをる橋 九 子
 故宅橋 橋の花ちるころはわかやとのこけちちに人のあともみえけり 千 蔭
 水郷橋 としをへてふりにしやとにかをるなる花橋をわはれとそみる 古 道
 社頭橋 船とめてむかしとは、やかのみゆる入江のさとにはふたち花 秀 倉
 風靜盧橋芳 さかさ葉のかをとめてたにかくれなき神のいかきにさける橋 長 流
 盧橋子低 たち花を玉にぬきたる糸にたにしられぬ風もかにほひけり 千 蔭
 對橋問昔 たち花のはふのきは、吹たゆむ風のひまさへたゝならぬ哉 春 海
 寄橋祝 木の葉さへゆるかぬ風にはひたつ花たち花そかまましき 蘆 庵
 寄橋述懷 橋の花の露そふ葉かくれに實さへかをれる雨のゆふくれ 春 海
 いにしへをしるやと、へえ橋のふかき匂ひそこたへかほなる 高 蹊
 ときはにもいやときはにどたちはなの木陰によりて祝ひぬる哉 古 道
 しのはれん身にしあらねは袖ふれてうゝるかひなき庭のたち花 枝 直

寄橋懷舊

棟

いにしへをおもふねさめのどこよ物よりわはれにも薫るよは哉
たち花のかけふむ道にしにのへとも昔そいとよどほさかりゆく
時ならぬふちとみるまで五月雨の雲にまじるはあふちなりけり
村雨のなこりの露もにはひつゝちるやあふちの花のしたかけ
ゆふたちの雲吹おくる風とやみかた山あふち花をみたるゝ
山ふかみとこれぬものをたれに今あふちの花そ人たのめなる
山さとはたゝ青葉のみしけりあふをりにあふちの花もめつらし
大御田のみなわもひちもかきたれてとるや早苗はわか君のため
さなへとるたもとほうきによこるれど心ときよき賤かなりはひ
谷川の水せきいるゝふもとたは雨もまちあへすさなへとるなり
秋の穂の霜のわくてもわさなへもひとつみどりになひくゆふ風
かたらひてとるもむつまし妹と背の山田のさなへたのみ有けり
きのふけふ時きにけりと郭公とはたのおもにさなへとるなり
早苗くさはこふ袂やくちぬらんしつくの田の五月雨のころ
暮かけてうゑしきのふのはつ苗にけさは露見るをたのすゝしさ

山家棟

早苗

朝早苗

採早苗

長流 契沖 春海 千蔭 枝直 宣長 眞淵 蘆庵 春海 眞淵 春海 宣長

夕早苗

うつまさのもりにひゝきて聞ゆなり四方の田歌のゆふくれの聲
夜をこめて急くけふたにうゑはてぬ竹田の里にさなへとるらん
さと人のうゑめもよほすよひ聲も空もとゝろく五月雨のころ
朝またき山田のさなへ日は長し露のひるまをまちてとらん
うねとにまつ束ねおくさなへもて山田はけふやゑつくすらん
みしふつきうゑし澤田の若なへのしけるに賤かうさやわすれむ
賤のめかさは田にうゑし村なへのなへてみどりになりける哉
雨はれて雲たちのほる山もとのさとわのをたにさなへとるみゆ
みどりなるひとつかとたの若なへもいく千町にか引わかるらん
きのふかも花をせきいれし河そひやさなへ取こか袖かをるらん
秋のこはいかにせんどかくらなしの濱のみなどたさなへ取らん
あま衣たみのゝ島田雨ふれば難波すかゝさきてそらゝなる
いそきてそさなへはうゑん足曳の山ほとゝきすなきにし物を
郭公とはたのさなへいそくらんかすこそまされ賤かすかゝさ
植わたす千町のさなへいそくらし田歌もやめてたこそおりたつ

山田早苗

宣長 契沖 蘆庵 全

山哇早苗

全

澤邊早苗

契沖

遠村早苗

蘆庵

門田早苗

全

河邊早苗

千蔭

海邊早苗

長流

急早苗

契沖

早苗多

雨中早苗

雨後早苗

名所早苗

寄早苗述懐

五月五日

藥玉
競馬

くるゝまでうたふ田歌に長き日も植はつくさぬさなへをそしる 蘆庵
 さなへくさうゝる時とて五月雨のくもゝ山田にねりたちにけり 眞淵
 暇なき田子の身をしる雨のうちにしひていくかの早苗とるらん 長流
 むらさめにかりたつたこのすか笠の車もすゝし神のみとしろ 千蔭
 しめそへしみとしろをたに雨過てきよけにみゆる露のたまなへ 全
 いつくにも待けるほとか雨はれてけふは田とにさなへとるなり 宣長
 さなへとるつるの郡のさと人は千代のはつ穂の秋やまつらん 春海
 大荒木の浮田のさなへ是も又老てはすてゝとる人もなし 契沖
 わやめ草けふなつ引のいとなれやねもたゆきさて根長かるらん 長流
 けふにあふ淀の若こもかりそめのかさり千巻もすゑはとそみる 契沖
 をりにあふ花も結ひてわやめ草まそてにかくるけふはきにけり たみ子
 軒にふくけふのわやめのそれならて引わらそふは眞弓なりけり 春海
 ともにけふもてはやさるゝ契にてなとかわやめを駒のすさめぬ 蘆庵
 たち花をぬくやさ月の玉のをの長きためしをかけてこそしれ 千蔭
 若駒をわやめの草にひきそへてけふ中の重の眞手つかひする 全

騎射

端午興

端午述懐

藥獵

菖蒲

菖蒲露

菖蒲

尋引菖蒲

菅菖蒲

菅菖蒲

かうふりにかくるわやめもうま弓も古きためしを引にそ有ける 全
 吹かよふ風もかくはしけふといへは軒はのわやめもやのくす玉 蒿蹊
 言の葉之何のわやめもわかぬまにさ月のいつかおいとなりけん 蘆庵
 露ふかさうけらか花に入みたれくすりかりするむさしのゝ原 千蔭
 おひしける夏のゝ原のくすりかりいつこに鹿のあとととむらん 春海
 さをしかの秋とちさされる妻をおきておもはぬ夏の獵にあふらん 長流
 軒のつまとみるはたうときわやめ草今夜枕にねてかたらなん 全
 わやめ草けふはよもきにましれども鹿にもまして乱れさりけり 契沖
 すなほなる姿にいかてならはましわやめにかくる露のまのは 蘆庵
 花のかはたちかへてける袖のうへにあやめそかをる軒の朝露 千蔭
 軒にふくわやめもみえぬ五月やみ袖にあやしくにほふ露かな 宣長
 わやめふくけふのためしを過ぎしと賤はよとのにかり立にけり 春海
 若こもをかりちの池は名のみしてけふさと人そわやめひくなり 契沖
 人しれぬねさしやあると山かけのみくまのわやめ尋てそひく 蘆庵
 菅蒲ふく軒のしつくのいつくよりなかるどおもへは淀のさそ水 長流

葺 菖蒲
每家葺菖蒲

袖上菖蒲

雨中菖蒲

名所菖蒲

沼菖蒲

江菖蒲

澤菖蒲

池菖蒲

水邊菖蒲

さらにつけふふくどはすれどけ深き軒はあやめも分れさりけり 蘆庵
 杉ふける軒の板間もみえぬまで今日にあやめのあひにける哉 契冲
 菖蒲くさひさしの軒に今日ふけはなかめふりつゝ枯しどそ思ふ 全
 ぬまごにひきもつくさすあやめ草今日葺そへぬやどしなけれと 千
 さみたれの空たきものそやととにしめりてかをるあやめ之けり 蘆
 色もなき麻のそてにもかけてけふあやめの草のかをそしめつる 全
 五月雨にぬるともひかかんあやめ草あやなくけふを過さましやは 春
 菖蒲草かりふくけふはさみたれに軒ふりまざるやとゝしもなし 枝
 おのつからあやめにそゝく五月雨の露やさ月の玉とみゆらむ 千
 川舟のたえぬつなてもけふ絶ぬ人はほりえのあやめひくらし 長
 かくれぬにたつねて引しわやめ草軒のしのふになはやらもれん 契
 草か江の入江のあやめ田鶴かねも同しなきさに千代やくらふる 全
 子日せしかなし野澤に今日も又千代のためしのあやめをそ引 全
 かる跡にさゝ浪こえて水ひろき池はあやめのかこそみちぬれ 蘆
 松かえの千とせをうつす池水におなしためしのあやめをそひく 枝
 直

旅宿菖蒲

寄菖蒲祝

寄菖蒲述懐

節後菖蒲

紫陽花

梔子花

五月雨

初五月雨

朝五月雨

夜五月雨

都には軒にこそふけあやめ草たひにしあれはまくらにそかる 全
 君か代のなからの濱のあやめ草いのちつくてふためしにそひく 春
 なからへてけふもみきりの菖蒲草あやしきものはいのち之けり 蘆
 こもりえにおふる菖蒲の根をふかみ千代のためとや引残しけん 春
 なにともけふはさきのふのあやめくさたゝ露のまのすさひ也けり 蘆
 宮人のなつのよそひの二あゐにかよふもすゝしあちさゐのそな 千
 神代には草木もことをとひきてふたゝこれのみやくちなしの花 契
 かりてふく軒のあやめの白露の玉ぬきみたし五月雨そふる 蘆
 五月雨に雨つゝみする人まではこゝらとしふるこゝちこそすれ 千
 夏のを長かりはりどおもふまでかきくらしふるさみたれの空 枝
 みよしのゝみくまか菅をかりそめのはれまたになき五月雨の頃 宣
 月も日もかけをたにみてそはふれど心もはれぬさみたれの頃 春
 さのふけふまた河水はまさらねどくもふかくなるさみたれの空 宣
 五月雨之朝くもりより墨染の夕のそらとかきくらしつゝ 契
 月星をへたつる雲のさみたれによひあかつきそ空にわかれぬ 春
 満

深夜五月雨

よもすから降とモよしや五月雨のしめやかにたに語りあかさは 九み子
あめをのみさして更ぬるさ月やみおほつかなしや鐘もおとせす 蘆庵

五月雨雲

はれぬへきけしきをやかて色かへて雲のゆきも五月雨の空 全
をやみなきさ月の空のなかめ哉降いてし日もわするはかりに 全

五月雨久

さみたれに花橘の咲そめてみになるまてにはれんともせず 枝直
さみたれに散にし花はうたかたとなりてもかせる庭のたち花 全

連日五月雨

五月雨のふるき軒端の板間よりあまなりなるまてもるそわひしき 春満
鈴鹿川八十瀬もかなしいはなみのおどになり行さみたれの頃 全

山中五月雨

山ふかくふりにけらしないつみ河宮木なかる五月雨のころ 古道
かさき山もらぬいはやに五月雨の日數もやすくおくるうはそく 全

杣五月雨

れしなへて淺瀬もみをの杣川や宮木よとまぬ五月雨のころ 宣長
飛驒人の言もかよはすさみたれに丹生の杣河おとたかくして 契沖

杜五月雨

ものおもふたか衣手の森の露はらひもあへぬさみたれのころ 宣長
なつくさの露のはれまもなくてのみ日數ふるのさみたれの空 全

野五月雨

峯ふもとわりたつくもにいなり山ちかくてとほきさみたれの頃 春満
かきくもりふる五月雨のはれていつ外山のみねに松たてる見ん 枝直

山五月雨

さみたれに里のかよひち水こえて草のすゑ葉そしるへなりける 契沖
あしのやの一夜とてこそかり衣なるはかりのさみたれのそら 全

峯五月雨

旅泊五月雨

旅宿五月雨

さみたれに日數ふるえのむやひ舟棹さへ浪のしたにくちにき 春海
五月雨はをやむもわかす谷の庵に雲よりおつる真木のした露 眞淵

山家五月雨

山さともとふひとあらはしはたれてぬふとやいはん五月雨の頃 契沖
山かつの麥かりかけしはてもなくこきたれてふるさみたれの頃 長流

田家五月雨

さひしさになれすはたえし山たつのおどたにさかぬ五月雨の頃 千蔭
水こえて池の堤しくつるれば夏の田面はさみれそます 契沖

閑居五月雨

とはれぬも恨なれぬは五月雨のふるにまかするよもきふの宿 枝直
とはれぬにならひしやとは五月雨の雨間ありとてたれを待へき 春海

閑中五月雨

ちりの外のちりもなかるさみたれに水草さよき谷のしたいは 枝直
日をふれば庭に海なす五月雨になひく玉藻はよもきなりけり 全

庵五月雨

さみたれに散にし花はうたかたとなりてもかせる庭のたち花 千蔭
五月雨のふるき軒端の板間よりあまなりなるまてもるそわひしき 春満

故宅五月雨

鈴鹿川八十瀬もかなしいはなみのおどになり行さみたれの頃 全
山ふかくふりにけらしないつみ河宮木なかる五月雨のころ 古道

川五月雨

さみたれになかる、水の利根川は底のにこりもあらそれにけり 契沖